
遊戯王GX～十代に転生！？～

ヒートソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX～十代に転生！？～

【Zコード】

Z0127T

【作者名】

ヒートソウル

【あらすじ】

ある日、一人の少年が神の手違いで死んでしまい、別の世界に転
生する事になった。転生した世界は遊戯王GX。だが転生したら遊
城 十代になっていた。これは幸か不幸か転生した少年の物語。
(話を修正しました。)

プロローグ（修正）（前書き）

ヒートソウルです。プロローグ修正しました。

プロローグ（修正）

? ? ? s.i.d.e

ふと気がつくと俺は真っ白な空間にいた。上↑下↓左←右→を覗くても白一色だった。

「どーだ、こーせー。」

そのセリフが不意に出でてしまった。仕方のないことだった。自分が読んでいた一次小説の転生パターンでよくあることだったからだ。

「あの～、すみません。」

そんな声が聞こえたので後ろを振り向くと、背の高い女性がいた。

「私は神です。」

やつぱり、と思つた。この場合は転生か、とにかく何故俺はこんなところにいるんだ？

「本当にすみませんでした。あなたはこちらの手違いで死んでしまいました。なのであなたには別の世界に転生してもらいます。」

よくあるパターンだな。ていうか、心を読んでいるのか？
「はい、そうです。神様なのでそれくらい簡単なことです。」

「なるほど。で、俺はどの世界にいくんだ？」

「遊戯王GXの世界です。」

「そりゃ、分かつた。」

遊戯王GXの世界か、どんな『テッキ』を使おうかとか考えていたら

「あなたは遊城 十代として転生してもらいます。」

「待てー…それはどうゆう意味だー！」

「そのままの意味です。では逝つて下さい。ちなみにあなたに拒否権はありません。」

「字が違つーつてうわあああ————?—」

突然足元にできた穴に吸い込まれ俺は意識を失った。

? ? ? s.i.d.e o.u.t

プロローグ（修正）（後書き）

第四話の投稿が遅くなるも知れませんがよろしくお願いします。

第一話 実技試験∨Sクロノス（前書き）

ヒートソウルです。第一話修正完了しました。

第一話 実技試験∨Sクロノス

十代 side

神に遊城十代として転生させられて早十五年。振り返るといろいろなことがあった。

まあ、今話している時間はない。何故なら、

「なんでこんな大事な時に限って電車が遅れるんだよーー。」

そう、遊戯王GXの第一話の時にあつた電車の遅延に巻き込まただ。俺は今デュエルアカデミアの実技試験の会場に向かつて走っている。

【まあ、十代。良かつたじやないか。カードもらえたんだし、あの会えたんだしさ。】

「それとこれは事情が違うだろ、ユベル。」

俺が走つているとユベルが話しがけてきた。何故ユベルがいるのかというと子供の頃、精霊達が見えてその中にユベルがいた。宇宙には送つていらないから、ユベルのカードは持つているし、ユベルの性格はヤンデレではない。

【誰に向かつて話しているんだい？】

「気にするな。」

ユベルが軽くメタ発言しているが気にしてない。俺はそつと走る

スピードを上げた。

やつとの思いで試験会場に着いた。ちなみに俺の受験番号は一番、てこうかなんだよあの筆記の試験問題。『青眼の白龍』に関連したものばかりだし、海馬、どんだけ嫁のこと好きなんだよ。簡単だつたから良かったけど。

【僕は十代のことが好きさ。】

聞いてない。まあ別にいいけど。

【早く行つたほうがいいんじゃないかな。】

「そうだな。よし、行くか。」

俺はステージに向かつた。それで、俺の相手は一体誰だ？

「ドロップアウトボーグ、遅刻はいけません～ガ、特別にワタクシ
ヒカルしてあげる～～ネ。」

「受験番号一一番、遊城十代です。よろしくお願ひします。」

相手はやつぱりクロノスだった。受験番号一一番がドロップアウト
て。まあ、いい。さてと

「「トコヒル...」」

クロノス LP 4000
十代 LP 4000

「ワタクシのターン、ドロー。」

クロノスがドローしたカードを手札に加えるとニヤけた。《古代の機械巨人》でも出す気が？

「ワタクシは、《トロイホース》を召喚する。」トロイホース ATK1600

「そして手札より魔法カード《一重召喚》を発動。これによりワタクシはこのターン一回まで通常召喚できます。」そりで《トロイホース》は地属性モンスターを生け贋召喚するとき1体で2体分の生け贋にすることができます。」

この流れは、やっぱり。

「《トロイホース》を生け贋に《古代の機械巨人》を召喚するね。」

古代の機械巨人 ATK3000

「ワタクシは、カード一枚伏せて、ターンエンドなーネ。」

クロノス LP 4000
モンスター 古代の機械巨人
魔法・罠 伏せ1枚

観客からは「あいつ、終わったな。」とか「可哀想に。」とか聞こえてくる。

【十代、外野がうるさいね。攻撃力が高いくらいで、しかも3000でね。】

（仕方ないだろ、ユベル。こっちでは攻撃力が高ければ勝ちは決まりていう概念が強いからな。元の世界では攻撃力1万超えることもできるし、攻撃力が高くてもそれが最強とはいわないからな。）

【そりだね、攻撃力が3000でもモンスターはモンスター、必ず倒すことはできる。】

確かにこの世界ではゲートが多くロックやバーンとかは少ないかもな。ちなみにユベルには俺が転生者だつて事は話してある。

「サレンダーするなら今の内なゾネ。」

「悪いけどサレンダーはしない。俺のターン、ドロー。」

俺はカードをドローした。そして今ドローしたカードと手札を見て、頭の中にカードが現れて光の線でカードとカードがつながり、そして

「俺は『E・HEROエアーマン』を召喚!」

俺の場に『E・HEROエアーマン』が召喚された。改めて見てソリットビジョンはすごいなあと思った。

「そして《エアーマン》の効果発動！このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、2つの効果を選択して発動することができる。俺は《デッキからHEROと名のつくモンスターを手札に加える。》の効果を発動。効果により《E・HEROフェザーマン》を手札に加える。そして手札の《沼地の魔神王》の効果を発動！このカードを手札から墓地に送り、《デッキから《融合》を手札に加え、そして発動！」

さて、これがこのデッキの真骨頂だ！！

「俺は手札の《E・HEROファザーマン》と《バーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレイム・ウイングマン》！」

俺の場に右腕が赤い竜の頭になつているフレイム・ウイングマンが現れた。

フレイム・ウイングマン ATK2100

「いくらモンスターを並べたところで攻撃力3000の《古代の機械巨人》には勝てないもん。」（それに伏せカードは《聖なるバリアーミラーフォース》、攻撃力を上げて攻撃してきても返り討ちにならね。）

「それはどうかな。手札より速効魔法を発動！伏せカードを破壊する。」

俺が発動した《サイクロン》のカードから風が起こりクロノスの伏せカードを破壊した。《ミラーフォース》だったか。

「マンマニアーア！」

「そして手札からフィールド魔法《摩天楼ースカイスクレイパー》を発動！」

デュエルフィールドが高層ビル群に変わり一番高いビルの屋上に《フレイム・ウイングマン》が腕を組んで立ち、その近くに《エアーマン》が滯空した。

「な、なんなノ～ネ？！」

「『J』がHERO達の戦いの舞台だ！そして《摩天楼ースカイスクレイパー》はE・HEROと名のつくモンスターが相手モンスターを攻撃する時、相手モンスターより攻撃力が低い場合、攻撃力が1000ポイントアップする。」

「なつ！？」

「《フレイム・ウイングマン》で《古代の機械巨人》に攻撃！スカイスクレイパーシート！」

フレイム・ウイングマン ATK2100 3100

《フレイム・ウイングマン》が右腕の竜の頭から、炎を出し《古代の機械巨人》を焼いた。

「くつ？！」

クロノス LP4000 3900

「そして、『フレイム・ウイングマン』の効果発動！相手モンスターを戦闘によつて破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。」

「パルメザンチーズ！？」

『古代の機械巨人』が崩れ、クロノスを下敷きにした。

クロノス LP3900 900

「『エアーマン』で直接攻撃！」

『エアーマン』が起こした風がクロノスに直撃した。

「ペペロンチーノ！？」

クロノス LP900 0

「スゲー！あいつ、やりやがった！」

「あのクロノス先生が負けるなんて……しかも1ターンキル。」

「フン、あんなのマグレだ。」

外野がなんか言つてるな、ていうか最後のやつ絶対万丈目かその取り巻きだな。

「ワタクシへが負けるなんて、ガックリンチョ。」

クロノスが落ち込んでいるが気にしない。

【さすがだね、十代】

「まあ、これくらいこじつひとつない。さて、帰りますか。」

俺はそのまま会場を後にした。

十代 side out

? ? ? side

なんだ、あいつ。本当に十代か。原作では受験番号1-10番だろ。なんで1番なんだ？それに『エアーマン』なんてカードも入っているしじうなつているんだ？おかしい。

まあ、いい。デュエルアカデミアで叩き潰してやるよ。

この俺、ジャック・アトラスがな！

ジャック side out

第一話 実技試験∨Sクロノス（後書き）

感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

設定（前書き）

設定です。修正しました。後々追加していく予定です。

6月10日追加しました。

設定

遊城 十代

年齢：15（第1話時）

性格：遊戯王GX初期の方の十代が2、遊戯王GX最後の方の十代が8の割合

好きな事、物、人：デュエル、デッキ構築、勉強、食事、話があう人、楽しくデュエルする人、仲間

嫌いな事、物、人：熱い食べ物、飲み物、イカサマ、カードを大事にしない人、人を見下す人

精霊：ユベル、ハネクリボー、エフェクトヴェーラー、ターボシンクロン

使用デッキ：E・HEROデッキ、天使族+時械神デッキ、機皇帝デッキ（ワイゼル、スキエル、グランエルの三種類）

備考：この作品の主人公であり転生者。神の手違いによって遊戯王GXの世界に遊城十代として転生した。前世ではデュエルは強い方だった。幼少期にユベルが精霊であることに気付き、和解してユベルのカードは持っている。デュエルは強く、よほどのことがない限り負けることはない。基本はクールかつ優しいのだが、怒ると恐い。（ユベル曰く、霸王モードになる。）得意なことは沢山あるが猫舌である。

ユベル

年齢：不明

性格：原作のユベル（ヤンデレではない）

好きな事、物、人：十代、ハネクリボー、エフェクトヴェーラー、
ターボシンクロン、十代とデュエルする事、十代の寝顔

嫌いな事、物、人：十代をバカにする人、十代を傷付ける人

使用デッキ：E HEROデッキ

備考：十代の精霊。原作とは違う宇宙には行っていない。カードのモンスターを実体化する事が出来る。自分も実体化できるのでたまに十代とデュエルしている。十代が好きなので基本的には十代の言うことは聞く。十代の仲間には優しいが、敵と認めた者には文句や愚痴を言つたり、名前で呼ばない。

ジャック・アトラス

年齢：15（第1話時）

性格：5D'sのジャックからかっこいい所を抜いて、野心や下心などを入れた性格

好きな事、物、人：自分に好意的な女子、勝つこと、自分自身、キングの座

嫌いな事、物、人：負けること、キングの座から落ちること

精霊：ダークリゾネーター

使用デッキ：ジャックのデッキ

備考：ジャック・アトラスと名乗っているが、実は転生者である。転生する時に神にジャックにしてもらつた。見た目はジャックそのものだがハーレム等の野心がある。シンクロがないGXの世界で最強になつてやるという野望もある。ジャック本人が上の上ならば、こいつは下の下である。精霊はいるが見えていない。デュエルはシンクロを使うがかつこつけようとするので、よく失敗したり、カツコ悪くなる。一ートではない。

第一話 船の中の出来事（前編）

第一話修正完了しました。

第一話 船の中の出来事

十代 side

俺は今、デュエルアカデミアに向かう船の中の部屋の中にいる。

「このカードは入れて、これは抜いて、これは、うーんどうするかな？」

俺は今、デッキの調整をしている。俺のデッキは融合を多く使うE・HEROデッキなので色々なカードにも対応出来るようにしている。

【十代、熱心にやつているね。】

「まあな、デッキの内容が全く同じじゃ、対策されたデッキに当たった時に勝てないからな。それにカードが多いから戦略の幅が広がる。」

【そりだね。しかし、不思議だねこのアタッショケース。カードがどのくらい入っているか分からないよ。】

俺の目の前にあるアタッショケースは転生させられた神から送られてきたものだ。の中には大量のカードがあり、種類もGXだけでなく、5D's、さらにはゼアルのカードまでも入っていた。だが、さすがに『青眼の白龍』や『三幻神』、『三幻魔』、『宝玉獣』などのカードはなかつた。まあ、使う人がいるから俺が使つていたらどうなるかわからないからな。チューナーやシンクロモンスター、エクシーズモンスターはあつたけど俺は使おうかどうか迷っているのでアタッショケースから出していない。あとオリジナルカードも

作ることができるので後でE・HEROのチューナーやシンクロモンスター、エクシーズモンスター、それにHERO専用の魔法や罠カードでも作るか。

「そういえば、ゴベル。なんでお前はE HEROを使っているんだ？」

【ああ、それね。三幻魔つて扱いが難しいし、これに入つてなかつたからね。まあ、E HEROは僕のお気に入りだからさ。】

「なるほどな。よし、これくらいでいいだろ。」

俺は調整し終わったデッキを腰のデッキケースに入れ、残りのカードはアタッシュケースに入れて閉めた。そしてアタッシュケースにある千年アイテムの眼みたいなマークの上に手を置いた。するとアタッシュケースが光り、光がなくなると俺の左手にブレスレットとなつて現れた。

【本当に不思議だし、便利だね、それ。】

「まあ、場所に困らないし軽くなるからな。」

本当に便利だと俺は思った。ちなみにブレスレットには小さい十字架がありその十字架の交差している所に千年アイテムの眼がある。

「さて、船の中でも探検するか。」

【そうだね。】

【クリクリ～。】

「あ、ハネクリボー。いたのか。」

【ク、クリ～！】

「冗談だよ。ごめん。」

俺はユベルとハネクリボーと共に部屋を出た。

「あっ、いたッス。」

「見つけたよ、一番君。」

「ん？」

船の中の広間みたいな場所にある椅子に座つていると、声を掛けられたので振り返ると、レッドの制服を着た丸藤翔とイエローの制服を着た三沢大地がいた。

「何か用か？」

「クロノス先生をノーダメージでワンターンキルした君に興味があ

つてね。俺の名前は三沢大地だ。三沢か大地でかまわない。

「僕は丸藤翔つて言うんだ。翔でかまわないッス。」

「俺は遊城十代だ。よろしくな。翔、三沢。」

「ところで、なんで君はオシリスレッドの制服を着ているんだ？受験番号が一番で実技試験もクロノス先生を倒したのに。」

「あつ、僕も気になつたッス。」

「あ～、それはな。」

そう、俺の着ている制服はオシリスレッドの制服。試験の結果は合格だったけど配属はレッドだった。何故かといふとクロノスをはじめエリート主義の教師達が色々としたみたいだ。遅刻を理由に不合格にしようとしたが、遅刻の理由は公共交通機関の遅延であり、筆記は一位、実技はノーダメージでワンターンキルであることが委員会で取り上げられて、ひと悶着あつた。妥協案としてオシリスレッドに配属することでクロノス達も渋々了承した。という校長の直々の電話があつた。

「なるほど、大変だつたな。」

「別にどうつてことない。」

「僕と一緒にツスね。これからよろしくッス。」

「ああ。」

翔や三沢達と一緒に学園生活が、楽しみだな。

「あー、そうそう。君の他に興味深い人がいてね。」

「興味深い人？」

気になるな、誰だ？

「ああ、とても興味深かったよ。何せシンクロ召喚という未知の召喚方法を使って試験官を圧倒していたからね。」「

「シ、シンクロ召喚！？」

「い、一体どういうことだ？三沢の発言からしてこの世界ではシンクロ召喚はないはずだ。」

「名前は分かるか？」「

「確かジャック・アトラスだつたつけな。」「

ジャック・アトラスだと!? 何故だ! 何故この世界にいるんだ?

「どんなデュエルだったか分かる範囲だけでいいから教えてくれ。」「

「ああ、分かつた。」

その後三沢がデュエルについて話し始めた。

十代 side out

三沢（空氣男） side

空氣男じゃない！誰だそれは、俺は三沢大地だ！おつと、いけない。危うく変な人に思われる所だった。今俺は『デュエルアカデミア』の試験会場にいる。俺の受験番号は一一番だった。一番は一体どんな人なんだろうか？

今俺は、他の人たちのデュエルを見ている。色々な人たちがいるな。学ぶべきことが沢山あるな。

『受験番号十番の人、ステージに来てください。』

受験番号十番が、この人も気になるな。

「君が受験番号十番のジャック・アトラス君か。緊張しないでね。」

「ふん、貴様に見せてやる。この俺キングのデュエルをな！」

「いい心構えだが、この世界はそんなに甘くないぞ。」

「「デュエル！」」試験官「P 4000
ジャック」P 4000

「私のターン、ドロー。」

おっ、デュエルが始まった。

「私は《ゴブリン突撃部隊》を召喚。」ゴブリン突撃部隊ATK2
300

「私は装備魔法、《デーモンの斧》を発動。《ゴブリン突撃部隊》
に装備する。」

ゴブリン突撃部隊ATK2300 3300

「私はターンエンドだ。」

試験官

モンスター ゴブリン突撃部隊

魔法、罠 デーモンの斧(ゴブリン突撃部隊に装備)

《ゴブリン突撃部隊》の攻击力は3300、高いな。

「俺のターン。ドロー！」

さて、このデュエルはどうなる？

「俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！」

ジャックの場に見たことがないドラゴンが現れたがすぐに半分の大きさに縮んだ。

「《バイス・ドラゴン》は、相手フィールドにのみモンスターが存在するとき、手札から特殊召喚できる。この方法で特殊召喚した場合、このモンスターの元々の攻击力と守備力は半分になるがな。」

バイス・ドラゴン ATK2000 1000 DEF2400 1
200

特殊召喚といふことは、このターンで上級モンスターを召喚するのか。

「そして、俺は魔法カード《一重召喚》を発動！ 一回目は《ツインブレイカー》を召喚！」

ツインブレイカー ATK1600

「そして一回目はチューナーモンスター、《ダークリゾネーター》を召喚！」

ダークリゾネーター ATK1300

「　「　「チューナーモンスター？？」」「　」

ジャックの場にまた見たことがないモンスターが二体召喚された。チューナーモンスター？ 聞いたことも見たこともないモンスターだ。会場も知らないモンスターが現れてざわめいている。

「チューナーモンスター？ なんだい、そのモンスターは。」「

「知らないのか。まあいい、見せてやる。キングの力を！ 俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダークリゾネーター》をチューニング！」

《ダークリゾネーター》が3つの星になると、その星が輪になり、その輪の中を《バイス・ドラゴン》が通過した。なんだ？ 何がおこ

つて いる んだ?

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

$$5 + 3 = 8$$

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》…」

ジャックの場に禍々しいドラゴンが現れた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000

「なんだそのモンスターは？それにシンクロ召喚とは一体？」

「シンクロ召喚とは、チューナーモンスター一体とチューナー以外のモンスターを一体以上墓地に送り、そのレベルの合計と同じのシンクロモンスターをエクストラデッキより召喚することだ。《バイス・ドラゴン》のレベルは5、《ダークリゾネーター》のレベルは3、よって合計は8になりレベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が召喚できるのだ！」

「な、成る程。だが私の《ゴブリン突撃部隊》の攻撃力は3300。そのモンスターでは勝てないぞ。」

「そんなことは分かつている。俺は魔法カード《攻撃封じ》を発動！《ゴブリン突撃部隊》を守備表示にする。」

ゴブリン突撃部隊 ATK 3300 DEF 0

「何！」

「《ツインブレイカー》で《ゴブリン突撃部隊》に攻撃！ダブルアサルト！《ツインブレイカー》は守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力をこえているとき貫通ダメージを与える！」

「ぐつー！」

試験官 LP 4000 2400

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で直接攻撃！アブソリュート・パワーフォース！」

「うわあああーーーー！」

試験官 LP 2400 0

ジャックはワントーンキルか、すごい。それにシンクロ召喚か、興味深い。

「君はずじにな。本当にキングになれるかもな。」

「キングになれるではない、俺はキングだ！」

と言つてジャックはステージから去つていつた。観客からは「スゲー！」や「かっこいいー！」とか聞こえてくる。確かにかっこいいかもな。

「うわ、ぐふー！」

……前言撤回、段差で派手にこけてカツコ悪い。

『受験番号』一番の人、ステージに来てください。』

あ、呼ばれた。よし、行こう。

三沢（空氣男） side out

十代 side

「だから、空氣男じゃない！」

「い、いきなりどうしたんスか、三沢君。」

「いや、何でもない。」

「セツラスか。」

確かに三沢は空氣男だからな。

「十代、いま失礼な」とを考えなかつたか？」

「いや、別に。」

「そりゃ。まあ、だいたいのことは話したよ。」

「ありがと。助かった。じゃあ、俺は部屋に戻るから。」

「ああ、わかつた。」

「僕も部屋に戻るツス。またね。」

俺はそう言って翔と三沢と別れた。

俺は部屋に戻りながら考えた。

(一体何がどうなっているんだ。なんでシンクロがあるんだ? なんでジャックがこの世界に? ジャックは未来から来たのか? 全然分からぬ。)

俺はいろいろと考えてみたが考えれば考えるほど分からなくなつた。

「……、や……。」

(ジャックがいるのなら遊星やクロウ達もいるかもしねいな。)

「……、や……。」

(仕方ない、後でユベルとハネクリボーにでも相談するか。)

「おい、貴様! 聞いているのか!」

「ん?」

考え事をしていたので話しかけられたのに気づけなかつた。振り向くとそこには、ラーエローの制服を着たジャックがいた。

「貴様が遊城十代か。」

「ああ、そうだけど、何か用か?」

「この俺とデュエ『新入生の皆さん。間もなくデュエルアカデミアに到着いたします。繰り返します。間もなくデュエルアカデミアに到着いたします。』…………。」

「……と、いうわけでデュエルはまた今度な。」

「くそ、覚えている。遊城十代!」

おい、それは悪役の言つセリフだろ。何かかつこつけているがカッソ悪い。ジャックはそのまま走り去つていった。

【クリ~。】

【十代、アイツは気をつけたほうがいいよ。アイツには僕達は見えていなきけど視線が気持ち悪かったよ。】

「そうか、分かった。」

ユベル達にそう言つて部屋に戻つた。

十代 side out

第一話 船の中の出来事（後編）

引き続も感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

第三話　真夜中のアンティデュエル▼S万丈目（前書き）

第三話修正完了しました。

第三話 真夜中のアンティデュエル✓S万丈目

十代 side

「うで、あるからして、」

俺含め新入生達は今校長からのありがたいお言葉を聞いている。はつきり言つて長い、現に何人かは寝ている。早く終わらないかな。

「畠さん、学園生活を楽しんで下さい。」

あ、やつと終わった。全く、どの世界でも校長の話が長いのは決定事項か？

校長の話が終わると新入生達はそれぞれの配属の寮に向かっていった。俺は翔と一緒にオシリスレッドの寮に向かっている。

「はあ～。」

「どうした翔。ため息何か出して。」

「アニキは何でそんなに落ち着いてられるんスか？僕達オシリスレッドなんスよ。」

「別に構わない。第一俺はデュエルアカデミアに入れればレッドでもいい。」

「セツスか。」

と言つて翔は納得したみたいだ。まあ、何故俺をアニキと呼んでいるのかは「アニキと呼ばせて欲しいツス。」と言つてきたので構わないと返したからだ。

「ボロいツスね。」

「ああ。」

改めてレッド寮を見てみると本当にボロい。確か、ブルーは豪邸、イエローはペントハウスだつたつけな。そう考えて俺達は自分達の部屋に入った。入つたらコアラがいた。

「コアラじゃないんだな。俺は前田隼人っていうだな。隼人でいいんだな。」

「誰もそんなことはいつてない。俺は遊城十代だ。十代でいい。」

「僕は丸藤翔。翔でいいよ。よろしくね隼人君。」

「さて翔、学園でも探検するか?」

「いいツスよ。」

「歓迎会までには戻つてきて欲しいんだな。」

「ああ、わかった。」

隼人にそう言つて俺と翔は寮を出た。

「ここはブルー専用のデュエルリングだ。オシリスレッドのドロップアウトが使つていい訳ないだろ！」

「そうだ！ここは俺達ブルーのデュエリストだけが使える場所だからな。」

「いいじゃん、ケチ～。」

俺と翔は今ブルーのデュエルリングにいる。気になつて近づいてみたらブルー生徒の何人かが出てきてこうなつてている。

「くだらないな。」

「なんだと！」

「くだらないからくだらないと言つたんだ。だいたい、デュエリストにブルーもレッドも関係ないだろ。」

「ドロップアウトが、いい気になるなーあ、お前遊城十代だな。」

「そうだが。」

「諸君達、何を騒いでいる。」

「ま、万丈目さん。だつてこいつが。」

出て來たよ、万丈目。じつやつたらあんな髪形にできるのか不思議だ。

「あのクロノス先生にまぐれとはいえたやつだ。」

「」「こいつですか。」

「あれくらいどうってことない。攻撃力が3000で勝った気になつて油断したから負けたんだよ。」

「ほう、あれは実力だと言いたいのか?」

「まあな。」

「その実力、ここで見せてもらいたいものだな。」

万丈目がデュエルディスクを構えようとしたら

「あなた達、何をしているの。」

「て、天上院君。」

声がした方向を向くとそこには明日香がいた。

「そろそろ歓迎会が始まる時間よ。」

「ちっ、行くぞ!お前達。」

「」「はいー」「」

そつ言つて万丈目君と取り巻き達は去つていった。

「あなた達、万丈目君の挑発に乗っちゃダメよ。」

「分かつていい。」

「あなたが遊城十代ね、私は天上院明日香よ。明日香でいいわ。」

「ああ、よろしく。十代で構わない。」

「僕は丸藤翔ッス。」

「あなた達の寮でも歓迎会が始まるんじゃないかしら。」

「あ、そつだつたッスね。アニキ、早く帰るッス。」

「そつだな、早く帰らないと始まつまつからな。じゃ、またな。」

「ええ。」

俺達はレッド寮に帰った。

十代 side out

レッド寮の歓迎会が始まつて僕達はご飯を食べている。でも、ひもじい。だってご飯と味噌汁とメザシだけだもん！隼人君曰くこれでも豪華な方だつて言つていたけど、じゃあ、いつもは何を食べているんスか！

翔 side

「翔。何を言つていいんだ?」

「あ、アニキはひもじいつて感じないんスか!」

「別に構わない。食えればそれでいい。」

「そりッスか。」

「そう、気にしない。熱つ!..」アニキが味噌汁を飲んだら熱がつた。

「大丈夫か、十代。」

「大丈夫だ隼人。しかし熱いな。」

「えつ、そんなに熱くないッスよ。もしかして猫舌なんスか?」

「そうだよ。悪いか?」

アニキにも苦手なものがあるんスね。何故味噌汁には手をつけていなかつた理由が分かつたッス。

「なあ、翔。猫舌ってどうやつたら直るか分かるか?」

「分からぬッス。」

アニキの猫舌はこのままでいいかなと僕はこの時思った。

十代 side

寮の歓迎会が終わり俺と翔と隼人は同じ部屋にいる。原作ではこの後万丈目とのアンティデュエルがあるんだよな。それより今は別のことが気になつて仕方ない。

(コベル、ちょっとといいが。)

【十代、アイツのことかい?】

(ああ、そうだ。何でジャックがいるかが分からぬ。)

【ああ、やう聞いてくると思つてみゆつと調べてきたよ。】

(本当か、教えてくれ。)

【分かつた。あのジャック・アトラスつていう男は君の知つているジャックではない。】

(あー、やっぱりか。道理で雰囲気が違つたと思つた。)

原作のジャックと違ひ王者の風格が感じられなかつた。

【あと、ハーレム作つてやるとかこの世界では最強だとか一人でつぶやいていたよ。気持ち悪いし氣味悪いよ。】

(成る程、じゃあ、あこつも俺と同じ転生者か。)

【あんなやつ、十代と同じじゃないでしょ。で、どうするんだい。】

(放つて置く。そうすれば大丈夫だと思つ。とにかくユベル、ジャックに気づかれたりしなかつたか?)

【大丈夫だよ。アイツには僕は見えていない。そういうえばそろそろ時間じゃないのかな?】

(ああ、分かった。)

俺はユベルとの会話をやめた。そのタイミングを狙っていたかのように俺のPDAが鳴つた。

「アニキ、鳴っているススよ。」

「分かつてる。」

俺は自分のPDAを開くと万丈目からのメールがきていた。

『やあ、ドロップアウトボーイ。今からあのデュエルリングに来い。互いのベストカードを賭けたアンティルールだ。勇気があるならくるんだな。』

これは、ジテ寧に場所まで指定されているな。さてと、行くか。「ちょっとトヨヘルの誘いがあるから行つてくる。」

「アニキ、僕も行つていいかな?」

「構わない。」

ガードマンに見つからないように俺達は指定されたデュエルリングに向かった。

「よく来たな！逃げなかつたことは褒めてやる。」

俺達は万丈目に指定されたデュエルリングに着いた。着いたら万丈目と取り巻き達がいて、万丈目は準備万端だった。

「別に褒められても嬉しくない。それに売られたデュエルは買うのがデュエリストだ。」

「」のデュエルはアンティルールだ。お前のベストカードを賭けてもひりひりや。」

「分かつてゐる。わかつむかひづぜ、万丈目。」

「万丈目さんだ……まあこいつ、このデュエルで身のわきまえ方を教えてやる。」

「「デュエル！」」「

万丈目 LP 4000
十代 LP 4000

「俺のターン、ドロー。」

俺の先行か、今回は手札がいい。

「俺は『E・HEROバブルマン』を召喚ー。」

バブルマン ATK800

「『バブルマン』の効果発動！このカードが召喚に成功したとき、自分フィールドに他のカードがない場合、デッキから一枚ドローする。」

この効果はアニメ効果なんだよな。OCGだと手札もゼロじゃないとドロー出来ないからこの効果は便利だ。

「そして俺は装備魔法を発動！『バブルマン』に装備する。『バブルショット』は『バブルマン』にのみ装備可能のカード。攻撃力を800ポイントアップする。」

バブルマン ATK800 1600

「さらにカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代
モンスター バブルマン

魔法・罠 バブルショット（バブルマンに装備）伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。さてと「あなた達、何をしているのー！今の時間はここは利用禁止なのよ。」て、天上院君。」

万丈目がドローしたら明日香がやつて來た。明日香の後ろからあのジャックが來た。

「来たな、ジャック・アトラス。遊城十代が終わつたらお前の相手をしてやる。」

「いいだろ、貴様にキングの『テュエル』を見せてやるから早くしろ！」

いや、お前はキングじゃないだろ。ジャック本人に謝れよ。それに明日番もお前のことを見てイラついているし。

「俺に指図するな！俺は《地獄戦士》を召喚！」

地獄戦士 ATK1200

「さりげにカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目
モンスター 地獄戦士

魔法・罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。」

伏せカードが気になるが対策は打つてある。よし、

「俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROスパークマン》と《オーシャン》を融合。来い！《E・HEROアブソルートZero》！」

俺の場に絶対零度の力を持つたHEROが現れた。ジャックが驚い

ていたが気にしない。

アブソルートZero ATK2500

「やはり融合を使つてきたか。この時を待つていた！罠カード発動！『ヘルポリマー』相手フィールドに融合モンスターが召喚された時、自分のモンスターを生け贋に捧げ、その融合モンスターのコントロールを得る！『地獄戦士』を生け贋に『アブソルートZero』のコントロールを得る。」

やつぱり融合対策のカードを使つてきたが、だが甘い！

「カウンター罠発動！『盜賊の七つ道具』。ライフを1000ポイント支払い、罠カードの発動を無効にし破壊する！」

十代 LP4000 3000

「なつ、何だと！」

万丈目の『地獄戦士』が黒いオーラに変わり『アブソルートZero』に向かうが途中で消えてなくなつた。

「くそつー！」

「さらに俺は罠カード発動！『砂塵の大竜巻』。万丈目の伏せカードを破壊する！」

「万丈目さんだ！」

『砂塵の大竜巻』が万丈目の伏せカードを破壊した。『アヌビスの

裁き》だったか。《サイクロン》や《R-ライトジャスティス》を使っていたらまずかつたな。

「これでフィールドはがら空きだ！《バブルマン》で直接攻撃！」

《バブルマン》がバブルショットで万丈目を攻撃した。

「くっ！」

万丈目 LP 4000 2400

「これで終わりだ！《アブソルートZero》で直接攻撃！瞬間氷結！」

「う、うわああ―――！」

万丈目 LP 2400 0

「アニキが勝つたッス！」

「す、すごいわね！」

翔が喜んで、明日香が驚いている。

「アンティはジャックのデュエルが終わってからでいいからな。」

「くっ、いい気になるな。まあいいだろ。ジャック・アトラス！俺とデュエルしろ！」

「いいだろ、この俺、キングのデュエルを見せた「ガードマンが

くるわ！アンティルールは校則で禁止されているし今は利用禁止の時間で使っているのがバレたら退学もあるわよ！「何！！」

あ～、もうそんな時間か。そしてジャック、またか。御愁傷様。

「遊城十代ーーこの借りは必ず返してやる。覚えていろーー！」

「あつ、万丈里さんー待って下さこよーーー！」

「俺を無視するなーーーくわーー！」

「早く僕達も逃げるツスよー！」

「皆、いひひよーー！」

「ああーー！」

俺達は明日香の案内でデコエルリングを後にした。

「どうだった、ブルーの洗礼を受けてみて。」

「どうしたことなかつた。」

「そ、そう。」

「さ、翔、戻るべ。」

「はいッス。」

俺達は寮に戻った。ジャックが落ち込んでいた。カツ「悪いな。

【万丈目つてやつ、弱かつたね。確かこの学園のトップだったつけ
?】

(違つ、この学園のトップはカイザーだ。)

【カイザーね、十代なら勝てるでしょ。】

(それは分からぬ。俺でも負けるかもしれない。この世に完璧な
人間はいないからな。)

【確かに、十代は猫舌だからね。】

(や、それは言つなよ。)

何故かユベルには勝てない気がした俺だった。

十代 side out

ジャック side

違う、何でだ。あそこは『アブソルートZero』ではなく『フレ
イムワイングマン』だろ。やはり何かがおかしい。それより、

「何で俺だけこんな扱いなんだよ。くそつー。」

十代や万丈目に勝つて女子にかっこいい所を見せよ!と思つたのに、
どうしてタイミングだけがこんなに悪いんだ。

「くそっ！絶対たおしてやる。遊城十代！」

俺はそう決めたのだった。

ジャック side out

第三話 真夜中のアンティデュエル▼S万丈目（後書き）

第四話はもう少し待ってください。

第四話 偽りのレター事件 VS 畠口香（前書き）

第四話です。今更ですがこの小説は主に十代 side で書いてます。

第四話 偽ラブレター事件VS明日香

十代 side

今は授業中。はつきり言って簡単に程がある。元の世界では小学生でも分かる内容をやっているからだ。

「セニヨール十代。フィールド魔法について説明して欲しいノーネ。

」

「フィールド魔法はフィールド上に一枚だけしか存在できず、新しいフィールド魔法が発動した場合、古いフィールド魔法は破壊されます。フィールド魔法は種族や属性などに関係しているものがあり、『草原』や『荒野』、『ガイアパワー』や『伝説の都アトランティス』、『歯車街』や『天空の聖域』などがあります。フィールド魔法にはフィールド魔法のサポートカードもあり、デッキからフィールド魔法を手札に加える魔法カード『テラフォーミング』、フィールド魔法を破壊から守り新しいフィールド魔法を発動させない魔法カード『フィールドバリア』、相手がモンスターを特殊召喚した時にフィールド魔法を発動出来る速攻魔法『終焉之地』があります。また、手札から墓地に送ることでデッキからフィールド魔法を手札に加えることが出来るモンスターも存在します。『アトランティスの戦士』は『伝説の都アトランティス』を、『天空の使者ゼラディアス』は『天空の聖域』を手札に加えることが出来ます。他には「も、もういいノーネ。」… そうですか。

一通り言つたらクロノスに止められた。まだまだ言いたいことがあるぞ。フィールド魔法が自分フィールド上に存在しなければ破壊されるモンスターがいる。『E・HERO キャプテンゴード』は『摩天楼 -スカイスクレイパー』、『天空の使者ゼラディアス』は『

天空の聖域》がないと破壊される。もういいや。簡単過ぎて授業がつまらない。

【クリ~。クリクリ~。】

【ハネクリボ~、少し落ち着きなよ。しかし本当に簡単だね。僕これ全部分かるよ。】

俺はこのまま授業を聞き流した。早く終わってくれ。

午後は体育の授業があった。体動かすことはやつぱり楽しかった。あれ、でも何かあつた気がする。何だったつけな? そういえば、翔がさつきから変だ。顔がニヤけているし、はっきり言って気持ち悪い。

「翔、大丈夫か?」

「あ、アニキ~。どうしたんスか~。僕は大丈夫ッスよ~。」

「よし、翔。保健室いくぞ。」

「だから~、アニキ~、僕は大丈夫ッスよ~。」

「な、ならいいが。」

そう言つて翔と別れた。何もなければいいが。

翔と別れて、購買でドローパンを買って食べて、レッド寮に戻ってきた。ドローパン、結構旨かった。ちなみにひいたのは黄金の卵パンだった。

「そりいえば十代、翔はどうしたんだな？」

「分からぬ。今日は何か変だつた。」

「変？」

「顔が一やけでいたり、なにを聞いても上の空だつた。」

「確かにそれは変なんだな。」

「だる。」

何だろう、何かいやら予感がする。

【十代、考え方だよ。】

【クリ~。】

ユベルとハネクリボーにそう言われた。考え方だよな。そう思つた時に俺のPDAがなつた。またか。

『丸藤翔は預かつた。遊城十代。返して欲しければ女子寮に一人で来られたし。』

あー今日は偽ラブレター事件の日だつたか、忘れてた。

「隼人、翔が拐われたみたいだ。」

「な、何でなんだな？」

「分からぬ。一人で来いつて書いているからちよつと行って来る。」

「分かつたんだな。」

隼人にそう言って俺は女子寮に向かった。

「翔、大丈夫か！」

「あ、アニキー！」

女子寮に着いた俺が見たのはジュンコとともにえに捕まえられた翔だった。

「約束道理一人で来たぞ。ところで翔が一体何をしたんだ？」

「こいつは覗きをしたのよ！」

「そうですわ。」

「だから～、誤解ツスよ。僕は手紙でここに呼ばれただけツスよ。」

「手紙？」

「そうなのよ。この手紙よ。だけど、字が汚いのよ。」

「確かに。」

明日香に手紙を見せられたが、明らかに女子が書いた字ではなかつた。

「で、どうすれば翔を返してくれるんだ？」

「私と『テュエル』してあなたが勝てば返してあげるし」のことは言わないわ。だけどあなたが負ければこの事を先生に報告するわよ。」

「明日香とか？分かつた。」

「やつをと終わらせるか。

「『テュエル…』」「

十代 LP 4000

明日香 LP 4000

「私のターン、ドロー。」

さて、どう来る？

「私は『エトワールサイバー』を召喚…」

エトワールサイバー ATK 1200

「さりに、カードを一枚ふせてターンエンドよ。」

明日香

モンスター エトワールサイバー

魔法、罠　伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。」

まずは様子見だな。

「俺は《E・HEROスパークマン》を召喚！」スパークマンATK1600

「《スパークマン》で《エトワールサイバー》に攻撃！スパークマンATラッシュ！」

「罠カード発動！《ドゥーフルバッセ》。互いにモンスターの戦闘を互いの直接攻撃に変える。さらに《エトワールサイバー》は直接攻撃する時、攻撃力を600ポイントアップするわーくつ！」

エトワールサイバー ATK1200 1800

「うっ！」

明日香LP4000 2400

十代LP4000 2200

《スパークマン》のスパークフラッシュが《エトワールサイバー》に当てようとしたがかわされ、《スパークマン》のスパークフラッシュが明日香に、《エトワールサイバー》の攻撃が俺に当たった。
「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ。」

十代

モンスター スパークマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー。私は魔法カード《融合》を発動！ファイールドの《エトワールサイバー》と手札の《ブレードスケーター》を融合。《サイバーブレーダー》を召喚するわ。」

サイバーブレーダー ATK2100

「《サイバーブレーダー》は相手のモンスターの数によつて効果が変わるモンスター。あなたの場にはモンスターは一体。よつて《サイバーブレーダー》は戦闘によつては破壊されないわ。」

『サイバーブレーダー』か。一体や二体の時の効果は何とかなるが三体の時の効果は厄介なんだよな。

「罠カード発動！《威嚇する咆哮》。相手はこのターン攻撃出来ない。」

「成る程ね。私はカードを一枚伏せてターンエンドよ。」

明日香

モンスター サイバーブレーダー

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！」

よし、これならいいけど…

「俺は魔法カード《融合》を発動！フィールドの《スパークマン》と手札の《オーシャン》を融合。来い！《E・HEROアブソルトZero》！」

アブソルートZero ATK2500

「さりに魔法カード《融合回収》を発動！墓地の《融合》と《オーシャン》を手札に加える。そして今加えた《融合》を発動！手札の《オーシャン》と《沼地の魔神王》を融合。来い！《E・HEROジ・アース》！」

ジ・アース ATK2500

「一ターンで二回も融合モンスターを…あ、あり得ない。」

「す、すごいですね。」

「な、なかなかやるわね。でもこの瞬間の効果が変わるわ。相手モンスターが一体の時、攻撃力が一倍になるわよ。」

サイバーブレーダー ATK2100 4200

「関係無い。俺は《ジ・アース》の効果を発動！自分フィールド上の《E・HERO》と名のつくモンスターを生け贋に捧げることで、《ジ・アース》の攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで生け贋に捧げたモンスターの攻撃力分アップする。俺は《アブソルートZero》を生け贋に捧げ、《ジ・アース》の攻撃力を2500ポイントアップする！」

ジ・アース ATK2500 5000

「攻撃力5000！」

サイバーブレーダー ATK4200 2100

「さらに《アブソルートZero》の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

「な、なんですって！」

《アブソルートZero》が《ジ・アース》に吸収され《ジ・アース》のオーラが強くなつたと同時に《サイバーブレーダー》が凍りついて破壊された。

「《ジ・アース》で明日香に直接攻撃。アース・マグナ・スラッシュユ！」

「罠カード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。あなたの攻撃表示のモンスターを破壊す！罠カード発動！《トラップ・スタン》。このターンこのカード以外の罠カードの効果を無効にする！」

《ジ・アース》が持つている剣で明日香を攻撃した。

明日香 LP 2400 0

「やつたー！アニキー！」

「そ、そんな！明日香さんが負けるなんて。」

「し、信じられませんわ！」

勝てたな。そういえばライフ削られたな。翔も隼人も明日香もカードを渡したり、アドバイスすれば確実に強くなれるな、うん。

「ま、まぐれで勝つたからっていい気にならない方がいいわよー。」

「ジユンコ、負けは負けよ。」

「というわけで約束通り翔は返してもいいだぞ。」

「ええ。」

「アニキー！助かったッス！」

「じゃあ、またな。」

俺は翔を連れて寮に戻った。

「翔。」

「アニキ、何スか？」

「もつ覗きはするなよ。」

「だから！覗きはしてないッス！」

「冗談だよ、冗談。」

十代 side out

第四話 偽ラブレター事件 VS 明日香（後書き）

『ジ・アース』の効果で『アブソルートZero』を生け贋 『アブソルートZero』の効果で相手モンスターを破壊 攻撃力500の『ジ・アース』で攻撃、というコンボをやってみました。

第五話　月一試験VS万丈田+轟ませ（前書き）

第五話です。長くなりました。轟ませとのトコエルがあります。S
peneちゃんの意見を参考に夢の共演をさせてみました。

第五話　月一試験VS万丈目+嘘ませ

十代 side

明日は月一試験がある。俺と翔と隼人は勉強やデッキの構築をしている所だ。

「翔にはこのカード、隼人のこのカードかな。」

「ありがとう。アニキ。」

「ありがとうございます。でも、いいのか十代。カードもらって？」

「カードはたくさん持っているからいい。でも、大事に使ってくれよ。」

「分かつたッス。」

「分かつたんだな。」

俺が翔に渡したカードは《強化支援ヘビーウェポン》や《マシンナーズギアフレーム》などの機械族のモンスター・や機械族に関連する魔法や罠、隼人には《マスター・オブ・ゾン》や《レスキュー・キャット》などの獣族のモンスター・や獣族に関連する魔法や罠を渡した。二人に共通して渡したのは《沼地の魔神王》と《融合回収》、それと、いくつかの魔法と罠カードも渡した。そういえば、《レスキュー・キャット》はこの世界では禁止カードではなかつた。元の世界では効果からレベル3以下のモンスターを一体特殊召喚して《ゴヨウガーディアン》や《氷結界の龍ブリューナグ》などの恐ろしい効果を持

つシンクロモンスターを召喚しまくって禁止カード行きになつたからな。

「アニキ、これはどうすればいいんだな？」

「これはどうすればいいんだな？」

「翔はこうで、隼人はこれだな。」

後、二人に勉強も教えている。一人とも頑張っているから、筆記ではいい点はとれると思う。

【十代はテック構築しなくていいのかい？】

(そうだな。あ、ゴベル、ちょっと頼みがあるんだけどいいか?)

【十代の頼みなら僕は何でもいいよ。で、頼みつてなんだい?】

(それはだな、…………。)

俺はユベルにあることを頼んだ。

【成る程、それは面白そうだね。でも大丈夫なのかい?】

(油断しなければ多分大丈夫だろう。)

【分かったよ。明日が楽しみだね。】

(ああ。)

さてと、俺の「デッキ」の内容の話はこれくらいにしておこう。

「翔、隼人。これくらいやればだいたい大丈夫だと思つからそろそろ寝よ。」

「え？ あつ、もうこんな時間なんだ。」

「時間が過ぎるのは早いんだな。」

俺達はきりのいい所で勉強と「デッキ構築」をやめて寝ることにした。

翌朝、俺達は遅刻せずに教室に着いた。

「ふわああ～、眠い。」

「眠いんだな。」

「二人とも、分かる範囲の問題が終わるまで寝るなよ。」

「分かつてるツス。」

「分かつてるんだな。」

「それでは、はじめてくださいこや～。」

大徳寺先生の一言でテストが始まった。

(簡単だかケアレスミスはしないようしないとな。)

二十分後

「よし、見直しも終わった。」

翔と隼人はまだテストをやっているが、一人なら半分から六割くらい出来るだろう。

(ユベル、ハネクリボー。時間になつたら起こしてくれ。)

【分かつたよ、十代。】

【クリ~。】

ユベルとハネクリボーにそいつて俺は寝た。

十代 side out

ユベル side

僕はハネクリボーと一緒に十代の側にいる。いつ見ても十代の寝顔は飽きないし触りたくなる。でも、実体化したいけど今は周りに他の人達がいるから我慢するしかない。

【クリ~?】

翔と隼人はまだテストをやっている。でも、一人は昨日の夜頑張つていたし大丈夫だと思う。

【クリ~。】

【どうしたんだい、ハネクリボー。いやな顔して。】

【クリ~。】

【ん、あー、アイツか。気にするだけ無駄だよ。アイツには僕らは見えていないからね。】

【クリ。】

それにして本当にアイツはジャック本人とは似てもつかない。ていうか、比べたらジャック本人に失礼だよね。それに考え込んでるよ、君も転生者なんだからこれくらいの問題は楽勝なはずだよね。

「時間ですニヤ~。筆記用具を置いてくださいニヤ~。」

あ、テストの時間が終わった。十代を起こさないと。十代の寝顔もつと見たかったのにな、残念。

【十代、起きなよ。もう時間だよ。】

【クリ~、クリ~。】

「…………ん、もひそんな時間か。ありがとう一人とも。」

【びひいたしまして。】

【クリ~。】

「実技試験は午後からですニヤー。皆遅れずに行くニヤー。」

大徳寺先生がそういうと大半の生徒が走つて教室から出ていった。

【どうしたんだろうね。何でみんな慌てる必要があるのかな?】

(新しいパックが入荷したから皆新しいカードが欲しいんだろ。俺は持つているからいいけど。)

【そうだね。そうだ十代、オリジナルカードやシンクロモンスターとかはどうするかは決めたの?】

(ああ、考えてみたけど、使わないし作らんことにした。俺はHEROを中心としたデッキでいくことに決めたんだ。)

【そっか、それが十代らしいよ。】

【クリ〜。】

早く実技試験の時間が来ないかな。十代のユーベルが早く見たいよ、僕は。

ユベル side out

十代 side

筆記試験が終わり皆午後の実技試験に向けてデッキの最終調整などをしている。

「二人とも、筆記はどうだった?」

「アニキのおかげで半分くらいはできたツス。」

「俺もそれくらいできたんだな。十代はどうだったんだな？」

「全部。」

「え！」

「す、すごいんだな！」

「あれくらいどうってことない。それより一人とも、次は実技試験だ。」

「わ、分かつてるツスよ。」

「分かつてるんだな。」

「二人とも気合いが入つているな。

「あら、あなた達。ここにいたの？」

「あつ、明日香か、どうしたんだ。」

俺と翔と隼人が話していると俺の後ろの方から明日香がきた。

「筆記の方のできはどうだったの？」

「僕は半分くらいツス。」

「俺もそれくらいなんだな。」

「全部。」

「ぜ、全部ですか？」

「そりゃ、全部。そうだ明日香、このカードやるよ。」

「これは、《ドレインシールド》と《レインボーライフ》？」

「ああ、明日香の『テッキにちょうどいいカードだと思うからな。』《ドレインシールド》は相手モンスター一体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分自分のライフを回復するカード。《レインボーライフ》は手札を一枚捨てて発動したターンのみ全てのダメージをゼロにして、そのダメージ分自分のライフを回復するカードだ。」

「珍しいカードね。でも、いいの？」

「大事に使ってくれればいい。」

「ありがとうございます、もう一つおくわ。」

「アニギ、そろそろ行こうよ。」

「ああ、そうだな。」

俺は翔と隼人、そして明日香と一緒に会場に向かった。

翔、隼人、明日香の試験が終わり、次は俺の番。ちなみに翔は『強化支援ヘビーウェポン』を装備し『リミッター解除』を発動した『スチームジャイロイド』で直接攻撃し、隼人は『コアラッシュ』の効果で相手モンスターの攻撃力をゼロにし、そのモンスターを『マスター・オブ・ゼロ』で攻撃して勝利した。明日香は『ドゥーフルバッセ』と『レインボーライフ』のコンボを使っていた。なかなかいい使い方だな。さて、俺の相手はというと

「遅いぞ！」

原作通り万丈目だつた。

「セニヨール十代には他のオシリスレッドの生徒では勝てないノネ。特別にセニヨール万丈目とデュエルしてもらうノーネ。」

「分かりました。」

「遊城十代！今！」お前を倒し、あの時の恨みを晴らしてやる！」

「かかつてこい、万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「「デユエル！！」

十代 LP4000

万丈目 L P 4 0 0 0

「俺のターン、ドロー。」

さてと、

「俺は《E・HEROクレイマン》を召喚!」

クレイマンDEF2000

「さらにカードを一枚伏せてターンエンダだ。」

十代

モンスター クレイマン

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターンードロー!」

万丈目は一体どんなデッキでくるんだ?

「俺は《W-タイガー・ジェットATK1600

W-タイガー・ジェットATTACK1600

このデッキは確か、クロノスが買い占めたカードを使って元のデッキの面影すらなくなつたデッキか。

「俺は永続魔法《前線基地》を発動!」このカードは、一ターン一度、手札からレベル4以下のユニオンモンスターを一体特殊召喚することができる。《前線基地》の効果により、俺は《W-ウイニング・カタパルト》を特殊召喚!」

W—ウイニング・カタパルト ATK1200

「さらに俺は《V—タイガー・ジエット》と《W—ウイニング・カタパルト》を合体させ、《VW—タイガー・カタパルト》を特殊召喚！」

《VW—タイガー・カタパルト》 ATK2000

「そして、《VW—タイガー・カタパルト》の効果発動！手札一枚捨て、相手モンスターの表示形式を変更する。俺は《クレイマン》を攻撃表示にする。」

クレイマン DEF2000 ATK800

守備表示だったクレイマンが攻撃表示になった。

「《VW—タイガー・カタパルト》で《クレイマン》を攻撃！」

「罠カード発動！《ヒーローバリア》。このカードは自分フィールド上に《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時、発動することが出来る。相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

《VW—タイガー・カタパルト》が放ったミサイルが《クレイマン》に向かうが、《クレイマン》の前に現れたバリアに阻まれた。

「くそつ、俺はカード一枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目

モンスター 《VW—タイガー・カタパルト》

魔法、罠 《前線基地》、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。俺は《E・HEROアイスエッジ》を召喚！」

アイスエッジ ATK800

「そんな雑魚に何ができる。」

「俺のデッキに雑魚なんていない！《アイスエッジ》の効果発動！手札を一枚捨てこのターン《アイスエッジ》は相手プレイヤーに直接攻撃することができる。《アイスエッジ》で直接攻撃！」

「！」のくらぐれでやる。くつー

万丈目 LP 4000 DEF 3200

「俺は《クレイマン》を守備表示に変更。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

クレイマン ATK800 DEF 2000

十代

モンスター クレイマン、アイスエッジ

魔法、罠 伏せ一枚

「いい気になるなよ。俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天よりの宝札》を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようデッキからカードをドローする！そして、《X-ヘッド・キャノン》を召喚！さらに《前線基地》の効果により《ニー・メタル・キャタピ

「ラ一》を特殊召喚する！」

X一ヘッド・キャノン ATK1800

Z一メタル・キャタピラー ATK1500

「さらに罠カード《リビングデッドの呼び声》を発動！墓地の《Y一ードラゴン・ヘッド》を特殊召喚！」

Y一ードラゴン・ヘッド ATK1400

万丈目の場に一気に三体のモンスターが召喚されたことに会場が驚いている。

「俺は《X一ヘッド・キャノン》と《Y一ードラゴン・ヘッド》、そして《Z一メタル・キャタピラー》を合体させ、《XYZ一ードラゴン・キャノン》を特殊召喚！」

XYZ一ードラゴン・キャノン ATK2800

「さりに、《VWXYZ一ードラゴン・カタパルト》と《XYZ一ードラゴン・キャノン》を合体！現れる、《VWXYZ一ードラゴン・カタパルト・キャノン》！」

VWXYZ一ードラゴン・カタパルト・キャノン ATK3000

万丈目の場に《VWXYZ一ードラゴン・カタパルト・キャノン》が召喚された。てか、合体させる前に何故《XYZ一ードラゴン・キャノン》の効果を使わないんだ？

「《VWXYZ一ードラゴン・カタパルト・キャノン》の効果発動！」

「ターンに一度、フィールド上のカードをゲームから除外ことができる。俺は《クレイマン》を除外する！」

《VWXYZ-ドラゴン・カタパルト・キヤノン》は効果は強力で攻撃力も高い。だが、

「カウンター罠発動！《天罰》。手札を一枚捨て、モンスター効果の発動を無効にし破壊する！」

「何！」

《VWXYZ-ドラゴン・カタパルト・キヤノン》が《クレイマン》に胸部のキヤノン砲を向けたが、雷が落ちてきて破壊された。

「くそ！俺はターンエンドだ！」

万丈目

モンスター なし

魔法、罠 前線墓地

「俺のターン、ドロー。俺は魔法カード《戦士の生還》を発動！墓地の《E・HEROエッジマン》を手札に加える。そして墓地の《E・HEROネクロダークマン》の効果発動！このモンスターが墓地に存在する時一度だけ、手札のレベル5以上の《E・HERO》と名のつくモンスターを生け贅なしで召喚ができる！来い！《E・HEROエッジマン》！」

エッジマンATK2600

「そんなモンスターをいつの間に、まさか…」

「そのまたがだ。」

俺は『アイスエッジ』の効果で『ネクロダークマン』を、『天罰』の効果で『エッジマン』を手札から墓地に送っていた。

「『アイスエッジ』で直接攻撃！」

F<U!

万丈目 LP3200 2400

「『エッジマン』で止めだ！パワー・エッジ・アタック！」

「うわああ――――――！」

万丈目 LP24000

『し、勝者！セニヨール十代なノーネ！（あ、あり得ないノーネ！セニヨール万丈目がドロップアウトボーカに負けるなンーテ！）』

「スゲーな、レッドがブルーに勝つたぞ！」

「十代君かつこいい！」

「あ、あり得ない。」

万丈目のJ-Pがゼロになつたと同時に他の生徒から歓声が上がつた。

「何故だ、何故この俺はこのドロップアウトに負けたんだ？」

「万丈田、お前が負けた理由は三つある。」

「三つだと？」

「ああ、一つはブレイブミス。これは召喚した《X・ヘッド・キャノン》、《Y・ラーラゴン・ヘッド》、《Z・メタル・キャタピラー》の三体で攻撃せずに《XYZ-リードラゴン・キャノン》を召喚したことだ。二つ目は俺がレッドだとここで油断したこと。ブルーは強い、レッドは弱いということくらい思い込みでお前は油断したんだ。そして三つ目は、自分が組んだデッキを信じなかつたことだ。」

「な、何を！」

「そのままのことだ。」

『遊城十代君、君のブレイブセンス、カードを信じる心、実にお見事でした。よって君はラーラゴンに昇格です。』

校長が俺のことをラーラゴンに昇格させると黙つてきたがもう俺は決めてくる。

「俺は辞退します。レッドのままで構いません。」

『えつー・じつこつ』とですか！？

「そのままです。レッドだ、ブルーだ、つていつ」と俺は興味無いですから。」

『わ、分かりました。ですが、何かこちらからしなければ気が済みません。』

「じゃあ、レジドの待遇を良くしてくだせ。校長先生、お願ひします。」

『分かりました。』

これで少しは差別が無くなると思う。良かった。

「じゃあ、俺は戻る」「セニョール十代、ちよつと待つ〜〜ネ！」何ですか？クロノス先生。」

俺が翔達の所に戻ろうとしたらクロノスに止められた。

「セニョール十代には、もう一人の生徒とテュールしてもらつ〜〜ネ。」

なんだかいやな予感がある。

「相手は誰ですか？」

「！」の俺だ！

偽物、お前かよーまあいい、戦つてみたいと思つていたからちよつといいな。

「今日！」お前を倒す「テュール！」最後まで言わせる。」

十代 LP 4000
ジャック LP 4000

俺の先行か、先行は取りたくなかったけどな。

「俺は『E・HEROバーストレーディ』を召喚！」

バーストレーディ ATK 1200

「カードを一枚伏せてターンエンダだ。」「

十代

モンスター バーストレーディ
魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン！ドロー！俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このモンスターは相手フィールド上にのみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚した時、元々の攻撃力と守備力は半分になる。」

知ってるよ、そんなこと。

バイス・ドラゴン ATK 2000 1000 DEF 2400
1200

「さりに、俺はチューナーモンスター、『フレアリゾネーター』を召喚！

フレアリゾネーター ATK 300

「そして俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《フレアリゾネーター》をチューニング！」

『フレアリゾネーター』が三つの輪になり、《バイス・ドラゴン》がその中を通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

$$5 + 3 = 8$$

「シンクロ召喚！ 我が魂、《レッド・テーモンズ・ドラゴン》！」

ジャックの場に《レッド・テーモンズ・ドラゴン》が召喚された。

「さらに、《フレアリゾネーター》をシンクロ素材としたシンクロモンスターは攻撃力が300ポイントアップする。」

レッド・テーモンズ・ドラゴンATK3000 3300

会場が《レッド・テーモンズ・ドラゴン》の攻撃力に驚いている。

「《レッド・テーモンズ・ドラゴン》で《バーストレディ》を攻撃！ アブソリュートパワーフォース！」

仕方がない、このカードを使うか。

「異力ード発動！ 《くず鉄のかかし》。相手モンスター一体の攻撃を無効にする。そしてこのカードは発動後、墓地に送らずそのままセットする！」

『レッド・テーモンズ・ドラゴン』が『バーストレイティ』に攻撃するが、くず鉄でできたかかしによつて防がれた。

「何！『くず鉄のかかし』だと！何故お前がそのカードを持つている？」

「俺に勝つことが出来たら教えてやるよ。」

「いいだろ？、俺はターンエンドだ！」

ジャック

モンスター レッド・テーモンズ・ドラゴン

魔法、罠 なし

何も伏せないつて、勝てると思つてゐるのか？

「アニキー、頑張れー！」

「きばれー、十代ー！」

「十代ー！」

「負けるな、十代！」

「あれ、三沢君。いつからいたんスか？」

「いたよー！十代と万丈田のデュエルが始まる前からー！」

「気づかなかつたツス。」

「気づかなかつたんだな。」

「気づかなかつたわ。」

「…………。」

翔と隼人と明日香が応援してくれている、頑張らないとな。それと三沢、ゴメンな、俺も気づかなかつた。後で《白魔導師ピケル》の力一ドあげるから落ち込まないでくれ。

「俺のターン、ドロー。」

よし、来た！

「Iのターンで終わりだ！」

「できるものならやつてみるー。お前では俺の《レッド・テーモンズ・ドラゴン》は倒せん！」

俺の、じゃないだろーなんか《レッド・テーモンズ・ドラゴン》が可哀想に見えてきた。早く救つてやるか。

「俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《ファザーマン》とフィールドの《バーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレイムウイングマン》！」

フレイムウイングマンATK2100

「さりに、フュージョン・ウェポン装備魔法を発動！《フレイムウイングマン》に装備する。

このカードはレベル6以下の融合モンスターにのみ装備可能。攻撃力を1500ポイントアップする！

フレイムウェーブマン ATK2100 3600

「何！だが、このターンで倒すことは無理だ！」

「まだ俺のメインフェイズは終わっていない。俺は魔法カード『ダーク・コーリング』を発動！手札または墓地から融合素材モンスターをゲームから除外し『ダーク・フュージョン』の融合召喚でのみ特殊召喚できる融合モンスターを特殊召喚する。俺は墓地の『フェザーマン』と『バーストレディ』を除外しダーク・フュージョン。来い！『E HEROインフェルノ・ワインディング』！」

「い、『E HERO』だと！」

インフェルノ・ワインディング ATK2100

俺の場に悪の心を持ったHEROが現れた。これが昨日の夜に俺がユベルに頼んだことだった。

昨晩

（ユベル、『E HERO』を貸してくれ。）

【『E HERO』を？でもどうしてだい？】

（ちょっとやってみたいことがあるんだ。）

俺がやつてみたいこと、それは、《E・HERO》と《E HERO》を同じフィールドに出すことだ。このデュエルがあつて良かつたと思った。

「《フレイムウイングマン》で《レッド・デーモンズ・ドラゴン》に攻撃！フレイムショート！」

「ぐつー！」

ジャック LP4000 3700

「《フレイムウイングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によつて破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「ぐわつー！」

ジャック LP3700 700

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を破壊した《フレイムウイングマン》がジャックの前に立ち右腕の竜の頭から炎をジャックに放つた。

「《インフルノ・ウイング》で直接攻撃！インフルノブラスト！」

「この俺が、うわああ――――――！」
ジャック LP700 0

「アニキが勝つたッス！」

「十代、凄いんだな！」

「さすがね、十代！」

「…………。」

俺が勝つたと同時に翔と隼人と明日香が歓声を上げた。そして三沢、まだ落ち込んでいるのか、元気出してくれ。

「こ、こんなことあり得ない！ キングの俺が負けるはずがない！」

「お前の負けだ、素直に認めろ。」

「認めない、俺は認めないぞ！」

「後、お前はキングなんかじゃない。」

「何だと…」

本当に本人とは違ひ馬鹿だしかっこ悪いなこいつは、ていうか比べたらジャック本人に失礼だよな。

「お前は自分の力に自惚れているだけだ。」

「くそつー！」

アイツは俺にそう言つてどつかに走り去つて行つた。もうこれから
アイツのことは本人に申し訳ないからジャックと呼ばないことにし
よ。俺はそう決めながら翔達の所に戻つた。

十代 side out

ジャック side

「くそつ！」

何故この俺が負けたんだ？何故だ！それに十代が『くず鉄のかかし
』を何故持つているんだ？分からぬ。もしかしてあの十代は俺と
同じ転生者なのか？

「まあいい、今度こそ叩き潰してやる！遊城十代！そしてキングの
座は俺のものだ！誰にも渡さないからな！」

ジャック side out

第五話　月一試験VS万丈目 + 曙ませ（後書き）

『融合』と『ダーク・コーリング』のコンボをやってみました。『ダーク・フュージョン』と『ミラクル・フュージョン』のコンボもできると思います。事故つたら大変ですが。この小説以外に他の小説も書きたいと思っているので、これから更新が遅くなるかも知れませんがよろしくお願いします。

第六話　十代の怒り、霸王モード発動！（前書き）

第六話です。十代の霸王モードをやつしてみました。

第六話 十代の怒り、霸王モード発動！

十代 side

月一試験から数日後、俺は今、レッド寮にいる。俺が校長に頼んでからレッド寮の待遇が良くなっていた。ご飯の時のおかずが前よりも増えたし、それに今はレッド寮が少しずつ改築されている。もう少しで一人部屋がいくつかできるらしい。その内の一つが俺の部屋になるみたいだ。大徳寺先生から、

「レッド寮が良くなったのは十代君のおかげだニヤー。これくらいのことしかできないけどみんなで決めたんだニヤー。」

と言われた。それを聞いてユベルが喜んでいた。相部屋の時は実体化出来なかつたからな。まあ、それは楽しみにしておこう。

後、アイツがいなくなつたと三沢から聞いた。アイツは筆記の成績が悪く、実技も結果が悪かつたのでレッドに降格になつたが、「レッドに降格するくらいなら退学した方がマシだ！」と言つて学園を自主退学したらしい。凄い行動力だと思つた。ちなみに、帰る時に三沢に『白魔導師ピケル』のカードを渡したら小躍りして喜んでいた。それと、アイツは女子から嫌われていたみたいだ。これは明日香から聞いたことだが相当嫌われていたらしい。アイツがいなくなつたことで大半の女子が喜んでいた、と明日香は言つていた。

俺個人としてはアイツが月一試験の後に俺の所にくると思っていたが杞憂だったようだ。だが、俺はアイツを許さない。ラーエローの寮から帰る時にカードを拾つたのだがそのカードがアイツのカードだと分かつたからだ。カードを大事にしないなんてデュエリスト

失格だ。まあ、そのおかげか精靈に会えたけどな。

【本当に助かりました。ありがとうございます十代さん。】

【ホントに助かつた、もうアイツの側にいるなんてまつぱらゴメン
だぜ。】

精靈は『エフェクトヴェーラー』と『ターボシンクロン』だった。
この二人はアイツのデッキに入っていたいなかつたらしい。二人は遊星
のデッキに入っていたからな、アイツは入れたくなかつたのだろう
な。

【ハハ言つのもなんだけど、君達大変だつたね。】

【クリ~。】

【ホント、大変だつたよ。アイツ、いつもなんか変な事呴いていた
からこつちが変になりそつだつたぜ。】

【私はいつも気持ち悪い視線を感じていました。あのままでいたら
大変でした。】

「成る程、で、アイツにはお前達のことは見えていなかつたんだな
？」

【はい。】

【後、俺達の他にアイツのデッキの中にも精靈がいるんだけどな。】

「誰なんだ、そいつは？」

【『ダークリゾネーター』です。】

【でも『ダークリゾネーター』はアイツの『テツキ』の中に入ったままだからアイツと一緒にだ。】

「そうか。」

俺はさらにいろいろな事を聞いたり話したりした。そして、粗方話が終わって少し散歩でもしようかと思った時だった。

「アニキー、大変ッス！」

「十代！ブルーの生徒が来たんだな！」

「やれやれ、またか。」

部屋を出ようとしたら翔と隼人が入ってきた。ここ数日何人かのブルーの生徒が俺に挑んできた。月一試験の時に万丈目の事をあんな風に言つたツケが回ってきたか。やれやれ、今度から自重することにしよう。ちなみに翔と隼人はレッドのままいる。一人に連れられて部屋を出るとブルー生徒がいた。

「遊城十代！俺とデュエルしろ！一回ブルーに勝つくらいでいい気になるなよ！」

いや、ブルーに勝つたのは一回ではないから、とは言わないでおこう。火に油を注ぐ結果になるからな。

「レッドのクセに生意氣なんだよ、お前は！レッドはレッドらしく

してればいいんだよ！」

「レッズ、ここのは?..」

「そのままだ！レッドは弱いから雑魚カードを使つていればいいだけだ！お前が勝てたのもカードが強かつたおかげなんだよ。」

こいつ、今何て言った？

「やうだ！ここと思い付いた。俺が勝つたらお前のカードを貰つてやる。そしてお前の田の前で破つてやるよ。」

ブルー生徒のその台詞を聞いた瞬間、俺の中の何かのスイッチが入った。

十代 side out

ゴベル side

やれやれ、ブルーは本当にプライドだけが高いね。万丈田つてやつは油断して負けたどこのにね。それよりこいつ、十代の前で言つてはいけない事を言つちやつたよ。僕どうなつても知らないからね。

【ク、クリ〜?】

【じ、十代さん。お、怒つてるよね?】

【お、怒つてるだろ。ゴベル、あ、あんな風になつた十代つて見た

】とあるか？】

【あるよ。あ、そつか、三人は怒つた時の十代を知らないんだよね。
あれは十代の霸王モードだよ。】

【は、霸王モードって何ですか！？】

【ああなつた十代を僕はそう呼んでいるのさ。十代はカードを大事
にしない人が大嫌いだからね。霸王モードの十代は怖いよ。】

【ク、クリ～！！】

【や、やばいじゃねえか、アイツ！！】

【な、なんか十代さんの後ろに何か見えますよ！！】

【ああ、そうだね。】

ハネクリボー達が少し混乱している。まあ、僕は大丈夫だけどね。

「は、隼人君。ア、アニキ怒つてるシスよね？」

「お、怒つてるんだな。こ、怖いんだな。」

「……おい、デュエルしないのか？」

「い、いいだろ？。俺が勝つたらカードは貰うぞ！」

「……分かった。」

「デュエル！」

「……デュエル。」

十代 LP 4000

ブルー生徒 LP 4000

「……俺の先行、ドロー。俺はカードを一枚伏せてターンエンド。」

十代

モンスター なし

魔法、罠 伏せ一枚

十代がモンスターを出さないなんて、手札が悪かつたのかな。

「モンスターを出さないなんてなめているのか！俺のターン、ドロー！俺は《ゴブリン突撃部隊》を召喚！さらに、魔法カード《二重召喚》を発動！俺はこのターン一回まで通常召喚できる。《ジャイアントオーケ》を召喚！」

ゴブリン突撃部隊 ATK 2300

ジャイアントオーケ ATK 2200

「これで終わりだ！《ゴブリン突撃部隊》で直接攻撃だ！」

伏せカードを警戒しないとはね。何考えているんだか。

「……罠カード発動。《ガードブロック》。この戦闘によって発生

するダメージをゼロにし、俺は一枚カードをドローする。」

「《ゴブリン突撃部隊》は攻撃したら守備表示になり、次の俺のターンのエンドフェイズまで表示形式を変更することが出来ない。だが、《ジャイアントオーク》で直接攻撃だ！」

ゴブリン突撃部隊 ATK2300 DEF0

「……罠カード発動。《ドレインシールド》。相手モンスター一体の攻撃を無効にし、攻撃を無効にしたモンスターの攻撃力分俺はライフを回復する。」

十代 LP4000 6200

「くそっ！命拾いしたな、ターンエンドだ！」

ブルー生徒

モンスター ゴブリン突撃部隊、ジャイアントオーカー

魔法、罠 なし

「……俺のターン、ドロー。俺は《ターボシンクロン》を召喚。」

【よ、よっしゃー、お、俺の出番だぜー】

ターボシンクロン ATK100

「そんな攻撃力が低い雑魚を出してどうにかなると思つてゐるのか！俺のモンスターに勝てる訳ないだろー。」

「……関係ないな。《ターボシンクロン》で《ジャイアントオーク》に攻撃。」

「馬鹿だなお前は！攻撃力は《ジャイアントオーク》の方が上だ！」

「…………この瞬間の効果発動。このカードがモンスターを攻撃するとき、攻撃するモンスターを守備表示にすることができる。」

「何！」

ジャイアントオーク ATK2200 DEF0

【い、行くぜ——】

『《ターボシンクロン》が《ジャイアントオーク》の足に体当たりし、《ジャイアントオーク》が転んで破壊された。凄いね。』

「……俺は魔法カード《強欲な壺》を発動。カードを一枚ドローする。カードを一枚伏せてターンエンド。」

十代

モンスター ターボシンクロン

魔法、罠 伏せ一枚

「くそ！そんな雑魚すぐ破壊してやる！俺のターン、ドロー！俺は《ゴブリン突撃部隊》を生け贋に《偉大魔獣ガーゼット》を召喚！このモンスターの攻撃力は生け贋に捧げたモンスターの元々の攻撃力の一倍になる。よつて攻撃力は4600だ！」

偉大魔獸ガーゼット ATK0 4600

「……この瞬間、手札の『エフェクトヴェーラー』の効果を発動。このカードを墓地に送ることで、相手モンスター一体の効果をエンディングまで無効にする。」

【ニ、これくらいしか出来ませんが、が、頑張ります！】

偉大魔獸ガーゼット ATK4600 0

『偉大魔獸ガーゼット』が『エフェクトヴェーラー』の羽に包まれると力が抜けて弱々しくなった。

「だがそれもその場しのぎだ、俺はカード一枚伏せてターンエンドだ！」と同時に『偉大魔獸ガーゼット』の攻撃力が4600に戻る！

偉大魔獸ガーゼット ATK0 0

「な、何故攻撃力が戻らない！？」

「……効果を無効化したからな。効果を無効化したモンスターはテキストの攻撃力になり、そのままになる。『偉大魔獸ガーゼット』の攻撃力はゼロだ。」

「何！」

ブルー生徒

モンスター 偉大魔獸ガーゼット

魔法、罠 伏せ一枚

「……俺のターン、ドロー。俺は魔法カード《融合》を発動。俺は手札の《E・HEROスパークマン》と《沼地の魔神王》を融合。現れる、《E・HEROサンダージャイアント》。」

サンダージャイアントATK2400

「……《サンダージャイアント》の効果発動。手札を一枚捨てて元々の攻撃力が《サンダージャイアント》より低いモンスターを一体破壊する。《偉大魔獸ガーゼット》を破壊。」

「何！くそ！」

《サンダージャイアント》が放った雷が《偉大魔獸ガーゼット》に当たり破壊した。

「……さらに魔法カード《O オーバーソウル》を発動。墓地の《E・HERO》と名のつく通常モンスターを一体特殊召喚する。俺は《スパークマン》を特殊召喚する。」

スパークマンATK1600

これで決まるかな。

「……《スパークマン》で直接攻撃。スパークフラッシュ。」

「やつぱりお前は馬鹿だな！伏せカードを警戒しないとはな。罠力

ード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。お前のモンスターは全滅！……罠カード発動。《王宮のお触れ》。このカード以外の罠カードの効果を無効にする。「何！くつ！」

ブルー生徒 LP 4000 2400

馬鹿は君でしょ。最初のターン伏せカードを警戒せずに攻撃したんだからね。

「……《サンダージャイアント》で直接攻撃。ボルティックサンダー。」

「うわああ——！」

ブルー生徒 LP 2400 0

デュエルが終わった。十代の勝ちだね。

ユベル side out

翔 side

アニキがブルー生徒とのデュエルに勝った、けどまだアニキは怒ってるツス。こ、怖いよー！レッドの生徒はみんな怯えているツス！だ、誰か助けてー！

「……まだやるか？」

「う、う、うわああ——！」

アーニがそういうとブルー生徒は慌てて走り去つて行つた。

「あれ、お前達どうしたんだ？」

あれ、戻つた？よ、良かったッス！みんな緊張の糸が解けて座り込んでいる。

「ゴメンな、みんな。怖がらせてしまつて。」

「あ、い、いや、アーニ。ほ、僕は大丈夫ッスよ。」

「お、お、俺も大丈夫なんだな。」

この出来事があつてから、アーニを絶対怒らせてはいけない、とうレッド寮の暗黙の了解ができたみたいッス。

翔 side out

第六話　十代の怒り、霸王モード発動！（後書き）

次はあの若本さんを登場させます。頑張って書いていきまますのでよろしくお願いします。

第七話　廃寮でのトマホル＆タイタン（前書き）

第七話です。短くなってしまった。あと若本さん口調難しいです。

第七話 廃寮でのトゥエルヴタイタン

十代 side

俺と翔と隼人の三人は廃寮の前にいる。ここに来る前にレッド寮でモンスターカードをドローしてそのレベルにあつた怖い話をしていたら大徳寺先生が来て廃寮の話をしてくれた。興味が出たので行ってみたが、

「あ、アニキ。怖いッス。」

「」、「怖いんだな。」

「怖がるなよ二人とも。」

翔と隼人が怖がっている。俺は大丈夫なんだけどな。でも何か出るかもな、と思つた時だった。

「さや——！」

誰かの悲鳴が聞こえた。

「「さや——！」」

「二人とも、驚きすぎだ。えっと、こっちから聞こえたな。」

「あ、アニキ！ま、待つて欲しいッスよ～！」

「じ、十代！待つてくれなんだな～！」

悲鳴が聞こえた方に俺は向かつた。翔と隼人はあとから着いてきた。

「「」、このカードは?！」

「アニキーーどうしたんスか?！」

「十代。そのカードは?」

「これは、明日香の『HTワールサイバー』だ!じゃあ、さつきのは明日香の悲鳴か!?」

俺はそのまま真っ直ぐ走った。そしたら開けた場所に出た。そこには若し、じゃなくてタイタンと氣を失った明日香がいた。

「こよつこよへー!わあたしはターアイタン。闇のデュウエリストだ。」

「お前、明日香に何をした!」

「くあの者の意識は闇の中だ。遊城十代!わあたしどデュウエルしてもらおう。」

「俺が勝つたら明日香は返して貰うぜ。」

「いいだろう。」

「「デュエル!」」

タイタン LP 4000

「わあたしのターン、ドロオー！私はフィールド魔法《万魔殿－悪魔の巣窟－》を発動！このフィールドは《デーモン》と名のつくモンスターをコントロールするプレイヤーはスタンバイフェイズにライフを支払わなくてよい。そして戦闘以外で《デーモン》と名のつくモンスターが破壊された時、破壊された《デーモン》と名のつくモンスターのレベル以下の《デーモン》と名のつくモンスターを手札に加えることができるのだ！さらに私は《インフェルノクイーンデーモン》を召喚！そしてカードを一枚伏せてターンエンド。」

インフェルノクイーンデーモン ATK 900

タイタン
モンスター インフェルノクイーンデーモン

魔法、罠 万魔殿－悪魔の巣窟－、伏せ一枚

デーモンか、厄介だな。眠いしさを終わらせるか。

「俺のターン、ドロー。俺は魔法カード《ハリケーン》を発動！フィールド上の魔法、罠カードを全て持ち主の手札に戻す。」

「な、何！」

不気味だったデュエルフィールドが元に戻った。

「俺はフィールド魔法《摩天楼－スカイスクレイパー》を発動！そして《E・HERO キャプテンゴールド》を召喚！」

キャプテンゴールド ATK2100

「レベル4で攻撃力2100だよ！」

「『キャプテンゴールド』は『摩天楼－スカイスクレイパー』がフ
ィールド上に存在しない時、破壊されるモンスターだ。そして魔法
カード『HERO-sボンド』を発動！このカードは『E・HER
O』と名のつくモンスターが存在する時に発動することができる。
手札からレベル4以下の『E・HERO』と名のつくモンスターを
一体特殊召喚する。『ヒーロー』と『スパークマン』を特殊召喚
する！『ヒーロー』の効果は発動しない。」

ヒーロー ATK1800

スパークマン ATK1600

「『キャプテンゴールド』で『インフルノクイーンモン』を
攻撃！」

「ぐううー！」

タイタン LP4000 2800

「『スパークマン』と『ヒーロー』で直接攻撃！」

「うわああーーー！」

タイタン LP2800 0

呆気なく終わつたな。

「く、くそー。」

タイタンは走り去つて行つた。闇のゲームやらなかつたな、まあいいか。

「明日香、大丈夫か！？しつかりしろ。」

「……十代、なんでここに？私は一体？」

「氣を失つていたんだらう、立てるか？」

「ええ。」

俺達は寮に帰つた。

第七話　廃寮でのトコヘル／Sタイタン（後書き）

次は制裁テュエルまで時間を飛ばします。

第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟（前書き）

第八話です。遅くなつてすいません。

第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟

十代 side

廃寮でタイタンとデュエルした翌朝、俺と翔は倫理委員会に連れていかれ、退学と勧告された。まあ、クロノスが制裁タッグデュエルで勝つことが出来たら退学は無にしてくれると言った。

その後、翔とデュエルして翔が行方不明になったり、カイザーとデュエルしたりなどあつたけど何とか制裁タッグデュエル当日を迎えた。カイザーとのデュエルはカイザーを追い詰めたものの、最後は『サイバー・エンド・ドラゴン』に『パワー・ボンド』と『リミッターリー解除』を発動し、攻撃されて負けた。リスクペクトデュエルといながら本気と感じたのは俺だけか？

話がそれたな。俺と翔のデッキはこの日のために調整している。ちなみに、神からもらったアタッシュケースを漁つていたら、あるカードが出てきたのでびっくりした。そのカードを中心にもうひとつデッキを作つて、今は持つている。

「今回一ハ、不届き者を倒すべく、伝説のデュエリスト武藤遊戯と戦つたデュエリストを呼んでいるゾーネ。」

クロノスがそう言つと会場の端から一人の男がバク転しながら出できた。

「我ら流狼の番人。」

「迷富兄弟。」

「お主達に恨みはないが」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さなければ」

「道は開けん。」

「「いざ、尋常に勝負！…」」

来たな、迷富兄弟。息合いすぎだろ。あの双子姉妹も驚くだろうな。

「あ、アニキ。伝説のデュエリストと戦つた人達に、僕達勝てるかな？」

「翔、何弱気になつているんだ。そんなんじゃ勝てないぜ。落ち着いてやれば大丈夫だ。」

「う、うん。」

翔が弱気になつていたが、俺の言葉で何とか持ち直したみたいだ。

「タッグデュエルのパートナーへの助言は禁止なゾネ。ライフは共通で8000、パートナーのフィールドと墓地は自分のフィールドと墓地として使用可能なゾネ。それでは始めなゾネ！」

「「「「「「トコトコルー...」」「」「

十代、翔 LP8000

迷富兄弟 LP8000

「僕のターン、ドローー。」

ちなみに順番は翔 迷富兄 僕 迷富弟の順番で最初のターンは全員攻撃できない。

「僕は《サブマリンロード》召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

サブマリンロード ATK800

十代、翔

モンスター サブマリンロード

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドローー私は《地雷蜘蛛》を召喚!」

地雷蜘蛛 ATK2200

「ターンエンドだ。」

迷富兄弟

モンスター 地雷蜘蛛

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROフォレストマン》を召喚！」

フォレストマンDEF2000

「カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代、翔

モンスター サブマリンロイド、フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《カイザー・シー호ース》を召喚！」

カイザー・シー호ースATK1700

「さらに、私は魔法カード《生け贋人形》を発動！自分の場のモンスターを一体生け贋にして、手札の通常召喚可能なレベル7のモンスター一体を特殊召喚する。私は兄者の場の《地雷蜘蛛》を生け贋に《風魔神 ヒューガ》を特殊召喚！」

風魔神 ヒューガATK2400

さつそく、三魔神の一体を出してきたか。

「すまぬ、兄者。」

「構わぬ、お前のためならば犠牲にでもなろう。」

「それでは私の気がおさまらぬ、私は兄者を対象に魔法カード『闇の指名者』を発動！ カード名を一枚選択し、そのカードが相手のデッキに入つていれば相手はそのカードを手札に加える。私が選択するのは『雷魔神 サンガ』。」

「ありがたい、勿論私のデッキには『雷魔神 サンガ』は入っている。」

『闇の指名者』ってタッグデュエル専用のカードだな。

「私はターンエンドだ。」

迷宮兄弟

モンスター 風魔神 ヒューガ、カイザー・シーホース

魔法、罠 なし

「僕のターン、ドロー！ 僕は『スチームロイド』を召喚！」

スチームロイド ATK 1800

「バトル！ 『サブマリンロイド』は直接攻撃することができる！ 『サブマリンロイド』で直接攻撃！」

「バトル！ 『サブマリンロイド』は直接攻撃することができない！ 『

「「Jのくらこ、くつー。」

「兄者ー。」

『サブマリンロイド』が地面に潜り、そのあと兄の田の前の地面から魚雷が飛び出して兄に当たった。

迷宮兄弟 LP 8000 7200

「『サブマリンロイド』は攻撃したあと、守備表示にすることができる。そして、『スチームロイド』で『カイザー・シーホース』に攻撃！この瞬間の効果発動！『スチームロイド』が相手モンスターを攻撃するとき攻撃力を500ポイントアップする。」

サブマリンロイド ATK 800 DEF 1600

スチームロイド ATK 1800 DEF 2300

「Jの瞬間、『風魔神 ヒューガ』の効果発動！相手モンスターの攻撃力を一度だけ0にすることができる！ストーム・バリケード！」

「しまつたー。」

スチームロイド ATK 2300 0

『スチームロイド』が『カイザー・シーホース』に向かうが『風魔神 ヒューガ』の起こした風によつて止まり、『カイザー・シーホース』に攻撃され、破壊された。

十代、翔 LP8000 6300

「……アニキ、ごめん。」

「翔、気にするな。まだまだデュエルは始まつたばかりだ。」

「う、うん。僕はターンエンド。」

十代、翔

モンスター サブマリンロイド、フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は魔法カード『天使の施し』を発動！デッキからカードを三枚ドローし、その後カードを一枚墓地に送る。そして、『ガイザー・シーホース』は光属性モンスターを生け贋召喚するとき、一体で二体分の生け贋にすることができる。私は『ガイザー・シーホース』を生け贋に『雷魔神 サンガ』を召喚！」

雷魔神 サンガ ATK2600

「さらに、魔法カード『死者蘇生』を発動！墓地の『水魔神 スーガ』を特殊召喚！」

水魔神 スーガ ATK2500

迷宮兄弟の場に三魔神が揃つた。

「えっ！？そんなモンスターいつの間に！」

「『天使の施し』の時だな。後、まだ何かやる気だな。」

「いかにも、我等兄弟の場に三魔神が揃つた！」

「今こそ見せてしんぜよう、我等兄弟の究極のモンスターを！」

「私は『雷魔神 サンガ』、『風魔神 ヒューガ』、『水魔神 スーガ』を生け贋に、出でよ！『ゲート・ガーディアン』！！」

ゲート・ガーディアン ATK3750

『ゲート・ガーディアン』の出現に会場がざわめいている。…しかし、何か微妙。『ゲート・ガーディアン』ってただ単に三魔神が重なつただけだし、攻撃力が7500から半分の3750になつたらな。

「さらに私は装備魔法^{メテオ・ストライク}を発動！『ゲート・ガーディアン』に装備する。このカードを装備したモンスターは、守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力を上回つていればその数値分相手にダメージを与える。バトル！『ゲート・ガーディアン』で『サブマリンロイド』に攻撃！魔神衝撃波！」

「させない！ 戦力ード発動！『和睦の使者』。このターン、俺達のモンスターは戦闘によつて破壊されず、俺達が受ける戦闘ダメージは0になる。」

『ゲート・ガーディアン』が『サブマリンロイド』に攻撃するが、『和睦の使者』によつて防がれた。

「アニキ！何でそのカードを《スチームロイド》の時に使ってくれなかつたの！」

「『めんな、翔。忘れてた。』

「ちょっとー何で忘れてるんスか！」

「まあ、いいじゃないか。《ゲート・ガーディアン》の攻撃を防げたんだし。」

「そ、そうスね。」

「ふん、たかがその場しのぎのことー。」

「我等兄弟の《ゲート・ガーディアン》は倒せん！」

「私はターンエンドだ。」

迷宮兄弟

モンスター ゲート・ガーディアン

魔法、罠 メテオ・ストライク（ゲート・ガーディアンに装備）

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《フォレストマン》の効果発動！デッキまたは墓地から《融合》を手札に加えることができる。俺はデッキから《融合》を手札に加える。」

そう言えば、翔は《フォレストマン》の効果を使つていなかつたが、融合素材となるモンスターが揃つていなかつたみたいだな。

「俺は魔法力ード《融合》を発動！手札の《バブルマン》とフィールドの《フォレストマン》を融合。来い！《E・HEROガイア》！」

ガイア ATK2200

「そんなモンスターを出したところで！」

「我等兄弟の《ゲート・ガーディアン》は倒せんぞ！」

「『J』のターンで倒せるぜ。」

「何だと！？」

「《ガイア》の効果発動！このモンスターが融合召喚に成功した時、相手モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力を半分にし、このターンのエンドフェイズまでその半分にした攻撃力分の攻撃力をアップする。俺は《ゲート・ガーディアン》を選択する！」

「何！！」

ゲート・ガーディアン ATK3750 1875

ガイア ATK2200 4075

何か、中途半端な攻撃力になつたな。別に構わないけど。

「《サブマリンロイド》を攻撃表示に変更、そしてバトル！《ガイア》で《ゲート・ガーディアン》に攻撃！コンチネンタルハンマー

!

גַּת־עֲמָקָם

『ガイア』が右手を振りかざし『ゲート・ガーディアン』に叩きつけて破壊した。

迷宮兄弟 LP7200 5000

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ଏବଂ ମହାନ୍ ମହାନ୍ ମହାନ୍

『ガイア』が『ゲート・ガーディアン』を破壊したと同時に観客から歓声が上がった。

「アサヒ日刊」で直接攻撃！

۱۰۷

迷宮兄弟 P 50000
42000

「俺は魔法カード『融合回収』を発動！墓地の『融合』と『フォレストマン』を手札に加える。そして、『融合』を発動！『サブマリノロイド』と『ガイア』を融合。来い！『E・HEROアブソルートZero』！さらに『フォレストマン』を召喚！」

アブソルートZero ATK2500

フォレストマンDEF2000

「俺はターンエンドだ。」

十代、翔

モンスター

アブソルートZero

フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「…油断したな。」

「…まさか、我らの《ゲート・ガーディアン》が敗れるとはな。」

「「だが！」」

「「…？」」

「我らの切り札を使わせてもらおう。私のターン、ドロー！私は魔法カード《ダークエレメント》を発動！このカードは墓地に《ゲート・ガーディアン》が存在する時、発動することができる。ライフを半分支払い、デッキから《闇の守護神ダーク・ガーディアン》を特殊召喚する！」

迷宮兄弟 LP4200 2100

闇の守護神ダーク・ガーディアン ATK3800

「！」 攻撃力3800！！

「翔、何驚いているんだ？」

「だつてアニキ！《ゲート・ガーディアン》より攻撃力が高いんだよー！」

「……攻撃力3800だぜ、大丈夫だろ。攻撃力がそれくらいで驚いてどうするんだ。」

「えつーー！」

「「何ーー！」

俺の発言に翔や迷宮兄弟だけでなく会場全体が驚いている。迷宮兄弟はともかく、翔、お前はこの前攻撃力16000の《サイバー・エンド・ドラゴン》を見ていたんだろ！

「そんなことを言えるのも今のうちだー！」

「《闇の守護神ダーク・ガーディアン》は戦闘によつては破壊されない！」

「「！」のモンスター」そ、我ら兄弟の切り札だーー！」

戦闘によつて破壊されないなら、効果によつては破壊されるよな。

「《闇の守護神ダーク・ガーディアン》で《アブソルートZero》に攻撃！ダーク・ショック・ウェーブーー！」

「罠カード発動！《くず鉄のかかし》。相手モンスターの攻撃を無効にする！そしてこのカードは発動後墓地に送らずそのままセットするー！」

「毎ターン使用できる通常罠だと！」

『ダーク・ガーディアン』が放った衝撃波が『くず鉄のかかし』によって防がれた。

「くつ、私はカード一枚伏せてターンエンドだ！」

迷宮兄弟

モンスター　闇の守護神ダーク・ガーディアン

魔法、罠　伏せ一枚

「翔、次はお前のターンだぜ、頑張れよ！」

十代 side out

翔 side

「翔、次はお前のターンだぜ、頑張れよ！」

アニキが僕のことを応援してくれる、けど最初は僕で大丈夫か不安だった。でもアニキと一緒に勝てるかもしれない、僕はそう思った。

「僕のターン、ドロー！（」「このカードは…？）」

僕は引いたカードを見て戸惑った。

「翔！」

アーチキが叫んで僕がアーチキの方を見ると、頷いていた。分かつたよ、アーチキ。行くよ！

「僕は魔法カード『パワー・ボンド』を発動！このカードは機械族専用の融合カード。手札の『コーカスロイド』とフィールドの『アブソルートZero』を融合。『コーカスロイド・ファイター』を召喚！」

『コーカスロイド』に『アブソルートZero』が乗ったモンスターが僕たちの場に召喚された。

コーカスロイド・ファイター ATK?

「攻撃力が決まっていない！？」

「『コーカスロイド・ファイター』の攻撃力は融合素材としたモンスターの攻撃力の合計した数値となる。『コーカスロイド』の攻撃力は1200、『アブソルートZero』の攻撃力は2500、『コーカスロイド・ファイター』の攻撃力は3700になる。さらに、『パワー・ボンド』の効果により攻撃力は二倍になる。よつて『コーカスロイド・ファイター』の攻撃力は7400になる！」

コーカスロイド・ファイター ATK? 7400

「「」、攻撃力7400だと！！」

「それだけじゃないぜ、『アブソルートZero』の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊す

る
!
」

「何！」

迷宮兄弟の『ダーク・ガーディアン』が凍りついて破壊された。

「さらに、僕は魔法カード『ハリケーン』を発動！互いのフイールドの魔法、罠カードを全て持ち主の手札に戻す。」

「」

よし、これで！

「《コーコロイド・ファイター》で直接攻撃！フォーチュン・ブリザード！」

「うあああ――！」

迷宮兄弟 LP21000

やつたー！勝つた！

「素晴らしいデュエルでした。遊城十代君、丸藤翔君。」「じゃあ、僕達は？！」

「君達の退学は取り消します。よろしいですね、クロノス教諭？」

「……か、構いませんー。」

良かつた！頑張った甲斐があつたよ。

翔 side out

十代 side

良かった、退学にならなくて。ちなみに迷宮兄弟は去っていった。
会場を見ると隼人や明田香、三沢達は喜んでいる。逆に万丈田やそ
の取り巻き、俺のことを良く思っていない生徒達は悔しがっている。

【クリ〜!】

【やつたな、十代!】

【やりましたね、十代さん!】

【僕は十代なら勝てると思つていたよ。】

(みんな、ありがとな。あ、そういうばいのドッキ使わなかつたな。

)

【別にいいんじゃないかな。】

(そうだな、機会があつたら使つか。)

俺は喜んでいる翔の所に行つた。

十代 side out

第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟（後書き）

もうひとつの方程式は後々使います。十代にはいくつかの方程式を使わせてみたいと思っています。

第九話 予想外のデュエル、十代の第一のトッキ（前書き）

第九話です。グダグダです。十代がE・HERO以外のデッキを使います。

第九話 予想外のデュエル、十代の第一のトッキ

十代 side

制裁デュエルから数日後、俺は翔と一緒に三沢の部屋にいる。三沢の部屋から机などを運びだし、壁をペンキで塗っている。三沢が

「明日、寮の入れ替え試験があるんだ。部屋を掃除したいから手伝ってくれ。」

と俺と翔に言つてきたからだ。

「……しかし三沢、何で壁に数式を書いたんだ？」

「これくらい書かないと気がすまないからな。」

「三沢君は勉強熱心だね。」

「そつといえば三沢、今夜はどうするんだ？」

「それなんだが、十代の部屋に泊めさせてくれないか？」

「俺の部屋に？」

ちなみにレッド寮の改築は粗方終わつていて、俺は一人部屋に移動している。だけどな、

「『めんな、まだ俺の部屋の整理が終わつてないんだ。』

「あ、じゃあ三沢君、僕達の部屋に来ればいいよ。アニキが一人部屋に移動したからベッドが一つ空いているんだ。」

「済まないな。ありがとう。」

部屋の整理が終わってないのは事実だが、本当は別の理由があるんだよ。三沢、ごめんな。その後俺達は、壁のペンキ塗りを終えた。

「さて、終わったことだしレッド寮に戻るか。」

「そうだね、アニキ。」

「今夜はお世話をなるよ。」

「そうだ、三沢。デッキは持っているか?」

「ちょっと待ってくれ、えっと、確か……あ、あった!」

三沢が外に出してあつた机の引き出しからデッキを取り出した。

「三沢君、そのデッキは何スカ?」

「これが?これは調整用のデッキだよ。ありがとう十代。危うく死れるところだったよ。」

「盗まれたら大変だからな。三沢、カードは大事にしないとね。」

「分かつてる。」

「…………そ、そうだよ三沢君、か、カードは大事にしないとね。」

「わ、分かつてるが翔、大丈夫か？」

「ほ、僕は大丈夫だよ。」

まあ、これで万丈目にカードを捨てられることはないな。良かつた。

「三沢、デッキの調整に付き合つていいか？」

「構わない。いや、むしろ助かるよ。」

俺は翔と三沢と一緒にレッド寮歩いて行つた。レッド寮に戻つた後、大徳寺先生に事情を話したら了承してくれた。その後は、翔達と三沢のデッキ調整に付き合つたりなどして、寝る時間になり俺は部屋に戻つた。

【お帰り、十代。】

「ただいま。あれ、ハネクリボーラは？」

【ハネクリボーラはもう寝てるよ。】

俺が部屋に入るとコベルが実体化していた。

「そういえばこの部屋に誰か来たか？」

【誰も来ていないよ。】

「分かつた。じゃあ、俺は寝るから。」

ゴベルにさう言つて着替えてベッドに入つて寝た。が、

「…………ゴベル。」

【十代、何かな?】

「…………分かつて言つてるだろ。」

【ナウだけど。】

「…………あのは、何で入つて来てるんだよ。」

【こいじやないか、別に。アカデミアに入る前まで」ひつじてたんだ
からさ。】

「…………もう勝手にしてくれ。」

【分かつたよ。】

これが三沢を部屋に入れられなかつた本当の理由だ。俺が一人部屋に移動してからゴベルが俺と一緒に寝てくるようになつた。まあ、ゴベルには今まで実体化するのを我慢してたからな。ちなみに翼は俺の邪魔にならないようにしてくれている。ゴベルなりの配慮なんだろうけど、やっぱり何故か勝てない気がした俺だった。

十代 side out

「だから！俺は空氣男じゃない！！」

「三沢君、今は夜遅いツスから静かにして！」

「う、ごめん。」

「俺は空氣男じゃない、三沢大地だ！あれ？俺は一体誰に言つているんだ？」

「三沢君、大丈夫？」

「俺は大丈夫だ。そういうえば聞きたいことがあるんだが。」

「何スか？」

「十代は何であんなに強いんだ？」

「それは分からぬッス。」

「俺も分からぬんだな。」

「そりゃ。」

十代の強さは一人でも分からないのか。でもいつか十代を倒してみせる。そのためには明日の万丈目との『テュエル、絶対に負ける訳にはいかない！

「だから、空氣男じゃない！」

十代 side

翌日

俺が三沢の調整用のデッキを三沢に持たせたので万丈目がカードを捨てるとはしなかつたみたいだ。そういうえば昨日の夜、何か聞こえたが気のせいか？それよりも、

「…………ゴベル、起きてくれ。」

【…………ん~、…………。】

「…………ね~い。」

【…………ん、あ、十代おまよつ。】

「おまよつ、じやなべておまよつ離れてくれ。」

【…………分かったよ。】

俺が起きたらゴベルが抱きついていた。ゴベルと寝るとゴベルが俺に抱きついてくることが多い。もう慣れたことだけだ。

【…………そりゃねば今日は向かあるの？】

「今日は三沢の寮の入れ替え試験があるんだ。」

【じゃあ、今日は観戦するんだね。】

「そうこうひとつ。」

俺は着替えて部屋を出た。

その後は、三沢と万丈目がデュエルし三沢の『ウォーター・ドラゴン』が攻撃力が0になつた万丈目の『炎獄魔神ヘル・バーナー』に攻撃して三沢が勝つた。デュエルが終わつた後のセリフまでカードを捨てたことを指摘した以外は原作と同じだつた。まあ、俺も三沢とデュエルしたいし、負ける気はない。そう思つて帰ろうとした時だつた。

「遊城十代！」「で俺とデュエルしろ！」

「せ、セニョール万丈目！いきなりどうしたノーネ！」

「クロノス先生！お願いです。遊城十代とデュエルさせて下さい！」

俺が帰ろうとしたら万丈目がデュエルしろと言つて來た。

「…し、しかし、セニョール万丈目、あなたはセニョール三沢に負けたノーネ。」

「クロノス先生、俺は構いませんよ。」

「で、ですか、」

「じゃあ、セカンドチャンスということです。万丈目が勝つたら退学は取り消すということです。」

「……セニョール万丈目、どうするノーネ？」

「俺は構いません！遊城十代！今度こそ貴様を倒してみせる！」

「EJの万丈目とのデュエルは予想外だったが、ちょうどいい。もうひとつデッキを使つことができる。」

「俺は今回は、HERO以外のデッキでいかせてもらひます。」

「えっ！アニキがE・HERO以外のデッキを！」

「これは興味深いな。」

「何！まあ、いいだろ？。」

俺がE・HERO以外のデッキで戦うと言つたら万丈目達が驚いていた。だが、万丈目はすぐに笑った。E・HERO以外のデッキならば俺に勝てると思つていてるんだろうな。

「「デュエル！」」

十代J P 4000
万丈目J P 4000

「俺の先攻、ドロー！俺は『地獄戦士』を召喚…さらにカード一枚伏せてターンエンドだ！」

地獄戦士 ATK1200

万丈目

モンスター 地獄戦士

魔法、罠 伏せ一枚

『地獄戦士』を一ターン目で出してくるとはな。

「俺のターン、ドロー！俺はファイールド魔法『天空の聖域』を発動！モンスターをセットし、カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター セット一枚

魔法、罠 天空の聖域、伏せ一枚

「十代のデッキは天使族デッキだな。」

「三沢君、何で分かるんスか？」

「『天空の聖域』は天使族モンスターをコントロールするプレイヤーへの戦闘ダメージを0にするのよ。」

そう、三沢の言つ通りこのデッキは天使族デッキだ。だが、ただの天使族デッキじゃないからな。

「俺のターン、ドロー！俺は《地獄戦士》を生け贋に《地獄將軍メフィスト》を召喚！」 地獄將軍メフィストATK1800

攻撃力が微妙だな。

「バトル！《地獄將軍メフィスト》でセットモンスターに攻撃！このモンスターは貫通能力を持つている！」

「俺のセットモンスターは《ジエルエンデュオ》。このモンスターは戦闘によつては破壊されない。俺がダメージを受けた時に破壊される。だが《天空の聖域》が発動しているので俺が受ける戦闘ダメージは0になる。」

《地獄將軍メフィスト》がセットモンスターを切り裂くが、光の粒子が集まり一一体の小さな天使が現れた。

ジエルエンデュオDEF0

「くそ！俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」
万丈目

モンスター 地獄將軍メフィスト

魔法、罠 伏せ三枚

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、罠カード発動！《砂塵の大龍巻》。《天空の聖域》を破壊する！」

『天空の聖域』が『砂塵の大竜巻』によつて破壊された。だが、予想の範囲内だ。さて、あのカードを出す時が来た！

「『ジエルエンデュオ』は天使族モンスターを生け贋召喚する時、一体で二体分とすることができます。俺は『ジエルエンデュオ』を生け贋に、降臨せよ、『時械神ラフィオン』！」

俺の場に神の名を持つ天使が現れた。その天使は金属の鎧と翼を持ち、胴体に鏡があり、その鏡に顔が写っているが、その写っている顔こそ、この天使の本体。俺が見つけたあるカードとは、5D・Sでゾーンが使っていた全ての時械神と関連するカードだった。ちなみに地縛神や機皇帝のカードなどもあったがそのデッキは作っていない。使って大丈夫なのかと思っていたが、同じく見つけた神からの手紙に「使っても問題ないです。」と書いてあつたから大丈夫だと思つ。

時械神ラフィオンATKO

「な、何だそのモンスターは！ レベル10で攻撃力0だと…？ ふざけているのか！」

「ふざけてなんかない。バトル！ 『時械神ラフィオン』で『地獄將軍メフィスト』を攻撃！」

「あ、アニキ！ 何してるの！？」

「攻撃力0のモンスターで攻撃を！？」

「馬鹿だな！ 迎撃しろ！」

『時械神ラファイオン』が『地獄將軍メフィスト』に向かつて風を放つがあつさりと消され、逆に『地獄將軍メフィスト』が『時械神ラファイオン』に斬りかかるが弾かれた。

「な、何故だ！何故破壊されない！？」

「『時械神ラファイオン』は戦闘及びカード効果によつては破壊されない。また、このカードが表側攻撃表示で存在する限り、このモンスターによつて発生する俺への戦闘ダメージは0になる。」

「ならば何攻撃した！？」

「そして、『時械神ラファイオン』は戦闘後、このモンスターと戦闘した相手モンスターを手札に戻し、戻したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。」

「何だと！？くつ！」

『時械神ラファイオン』が風を起こし『地獄將軍メフィスト』を吹き飛ばして、その風が万丈目を直撃した。

万丈目 LP 4 000 2200

「俺はターンエンドだ。」

十代

モンスター 時械神ラファイオン

魔法、罠　伏せ一枚

「くそ、ならば戦闘を行わなければ良いことだ！俺のターン、ドロード！俺は罠カード『リビングデッドの呼び声』を発動！墓地の『地獄戦士』を特殊召喚する！さらに、装備魔法『団結の力』発動！『地獄戦士』に装備する。『団結の力』を装備したモンスターは俺のフィールドのモンスター一体につき、攻撃力が800ポイントアップする。そして攻撃力2000となつた『地獄戦士』とこのカード以外の全ての手札を生け贋に『炎獄魔神ヘル・バーナー』を特殊召喚！『炎獄魔神ヘル・バーナー』は相手モンスター一体につき、攻撃力が200ポイントアップする。」

炎獄魔神ヘル・バーナー ATK2800 3000

「俺はターンエンドだ！」

万丈目

モンスター 炎獄魔神ヘル・バーナー

魔法、罠　一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに『時械神ラファイオン』の効果が発動する。このカードは俺のスタンバイフェイズにデッキに戻る。」

『時械神ラファイオン』が光の粒子となつて消えた。

炎獄魔神ヘル・バーナー ATK3000 2800

「レベル10で一ターンしか存在出来ないとはな。」

三沢が何か言つてゐるが仕方のないことなんだよ。まあいい、次だ。

「俺は罠カード『虚無機アイン』を発動する。」

「何だその罠カードは！？」

「そして俺は『虚無機アイン』の効果を発動！このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札のレベル10以上のモンスター一体を生け贋なしで召喚することができる。降臨せよ、『時械神サンダイオン』！『虚無機アイン』の効果で召喚したモンスターは攻撃力が0になる。」

時械神サンダイオン ATK4000 0

「またそのふざけたモンスターか、いいかげんにしろ！俺を舐めているのか！」

「だから、ふざけてなんかいないつて言つただろ。バトル！『時械神サンダイオン』で『炎獄魔神ヘル・バーナー』に攻撃！」

「この瞬間、罠カード発動！『攻撃の無力化』。攻撃を無効にしバトルフェイズを強制終了させる！」

「それにチーンしてカウンター罠発動！『トラップ・ジャマー』。バトルフェイズに発動した罠カードの発動を無効にし破壊する！」

『時械神サンダイオン』が雷を『炎獄魔神ヘル・バーナー』に放つが、これもまたあっさりと消え失せ、『炎獄魔神ヘル・バーナー』が炎を出すが『時械神サンダイオン』に当たる前に消えた。

「そして『時械神サンダイオン』の効果発動！このモンスターは戦

闘後、相手プレイヤーに4000ポイントのダメージを取れる!」

「何!?ぐわああ——!!」

万丈目 LP2200 0

『時械神サンダイオン』が放った雷が万丈目を直撃し、ライフを0にした。

「まさか、十代がE・HERO以外のデッキを使うとはな。」

「悪いな。まだ他のデッキもいくつか作っているところだ。」

「面白い。この七番目のデッキはE・HEROだけでなく複数のデッキにも対応できる様にする。そのデッキが完成したら本気で勝負だ!」

「いいぜ、俺もだ!」

三沢はいつたいどんなデッキを使うのか楽しみだ。

十代 side out

第九話 予想外のデュエル、十代の第一のトリッキー（後書き）

色んなトリッキーを使わせてみたいと思います。

第十話 外休みの日常（前書き）

第十話です。短いです。

第十話 冬休みの日常

十代 side

万丈目とのデュエルがあつた後、いろいろなことがあつた。万丈目がアカデミアを出でていつたり、ジュンコとももえがSALに誘拐され、俺がそのSALとデュエルしたり、『人造人間サイコショック』とデュエルしたりなどあつたりして、俺は冬休みを過ごしている。

で、俺は今自分の部屋にいる。何をしているかといつとユベルとデュエルをしているんだけど、

【十代、早くしてよ。】

ユベルがせかしているのだが、何せ場が悪い。ユベルの場にはモンスターが『E HEROワイルド・サイクロン』と『E HERO マリシャス・デビル』の一體、魔法、罠は伏せ一枚。対して俺の場にはモンスターはあるが、魔法、罠カードもない。ライフはユベルが4000だけどころちはたつたの400。

俺が先行で『E・HEROエアーマン』を召喚し、効果で『E・HEROクレイマン』を手札に加えカードを一枚伏せてターンエンディングしたのだが、ユベルが『天使の施し』を発動し、『ダーク・フュージョン』で『ワイルド・サイクロン』を、『ダーク・コーリング』で『マリシャス・デビル』を召喚した。ちなみに『マリシャス・デビル』の融合素材は『マリシャス・エッジ』と『ユベル』だった。一ターン目でこの展開はありか？

バトルは《ワイルド・サイクロン》で《エアーマン》が攻撃され、効果で伏せカードが破壊され、その後は《マリシャス・デビル》に攻撃された。カードを一枚伏せてターンエンドなのだが、これ詰んでるよな？次の俺のターンでモンスターを召喚しても《マリシャス・デビル》の効果で必ず攻撃しなければならないし、魔法、罠カードを伏せても相手のバトルフェイズでは《ワイルド・サイクロン》の効果で使えなくなるし破壊される。今の俺の手札には罠カードは一枚あるけど《魔法の箇》、魔法カードは《ツイスター》と《〇 オーバーソウル》の二枚。最初に伏せた一枚は《くず鉄のかかし》と《聖なるバリアーミラーフォース》だった。次のドローでどうなるかが決まるな。

「俺のターン、ドロー。」

俺はドローしたカードを見た。よし、《命削りの宝札》だ、これで何とかなる！

【罠カード発動、《はたき落とし》。そのドローしたカードを墓地に捨ててもういいよ。】

「ちょ、ちょっと待てユベル！？」

【十代、待ったはなしだよ。】

そ、それはないだろ……。この『ユエル俺の負けだな。

「…………お、俺はカードを一枚伏せてターンエンド。」

【僕のターン、ドロー。バトル。《ワイルド・サイクロン》で十代に直接攻撃。《ワイルド・サイクロン》の効果発動。このモンスターが攻撃するとき相手はダメージステップ終了時まで魔法、罠を発

動することは出来ない。僕の勝ちだね。】

負けた。俺もまだまだだな。

【ゴベルさん、強いですね。】

【今日は運が良かつたからね。】

良すぎだろ。

「ゴベル、伏せてあつたもう一枚のカードは何だったんだ？」

【《神の宣告》だよ。】

「…………《はたき落とし》を使わなくとも俺は負けてたのかよ。」

【やうだよ。】

強力なドロー補助カードが無効化されると、精神的に辛いよな。

【クリ~。】

【十代、大丈夫か?】

「…………大丈夫だ。」

本当は大丈夫じゃないけどな。

こうして冬休みの一日が過ぎていった。

十代 side out

第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場（前書き）

第十一話です。噛ませを処分します。

第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場

ユベル side

デュエルアカデミアは今は冬休み、だいたいの生徒は家に帰っているけど何人かの生徒はアカデミアに残っている。十代はアカデミアに残っている。十代とデュエルしたり、テレビを見たりして冬休みを過ごしていた。

【暇だね。】

「確かにな。」

僕達は今は十代の部屋にいるけど、暇だよ、何か起こらないかな。

【そういえば《ダークリゾネーター》は今頃どうしているんでしょうか?】

【確かに、《ダークリゾネーター》は大丈夫なのか?】

【クリ~。】

そういうえば確かにアイツには《ダークリゾネーター》の精霊がいたんだよね。アイツには見えていなかつたけど。

「助けたいけど、アイツは今ビニにいるか分からぬからな。」

【そうなんだよな。】

【クリ~。】

『ダークリゾネーター』、君は不憫だね、と思つていた時だつた。

「ん?」

【どうしたの十代。】

「メールが来てる。」

【本当だ、誰から?】

「え~と、『遊城十代、今すぐ灯台に来い!待つているからな!』
…だって、差出人は分からぬけど。」

差出人が不明だなんて怪しいね。

「ちよつと行つてくる。」

【僕も行くよ。】

【私も行きます。】

【俺も行くぜ。】

【クリ。】

十代が外に出て行つて、僕達はついていった。もちろん実体化はしていなければ。

しばりくして僕達は指定された灯台についたけど、誰もいない。

「呼び出したのは一体誰なんだよ、あー、寒い。」

十代が寒がつてゐる、早く出て来なよ。

「来たな、遊城十代！」

「お、お前は！？」

そんな声がして灯台の方を見ると影から何故かアイツが出てきた。

「お前は偽者！」

「誰が偽者だ！？」

「お前以外いないだろ！？」

何でここにアイツがいるの？確かにデュエルアカデミアを自分から退学した筈だよね？しかも、服が所々ボロボロになつてゐるし。

「……成程、やつぱりな。」

「何がだ？」

「お前、俺と同じ転生者だろ。」

「……………」

「そうだが。」

「ちよ、ちよつと十代！それを言つて大丈夫なの！？秘密にしてたことでしょ！？周りに他の人がいないから良かつたけど。

「何故遊城十代になつてるんだよ！？」

「……………十代として転生させられたんだよ。ところで、アカデミアに一体何の用だ？」

「お前を倒す、それだけだ！！！」

「成程、分かつた。」

「「「デユエル！…！」」

「十代」LP 4000

「偽者」LP 4000

「俺のターン、ドロー。俺は魔法カード《融合》を発動！手札の『E・HEROフォレストマン』と『沼地の魔神王』を融合。来い！『E・HEROジ・アース』…さらに『E・HEROエアーマン』を召喚！効果で『E・HEROファザーマン』を手札に加える。俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

ジ・アースATK2500

エアーマン ATK1800

十代

モンスター エアーマン、ジ・アース

魔法、罠 伏せ一枚

十代はいつも通りだね。

「俺のターン、ドロー！」

さて、アイツはどう動くのかな？

「そんなモンスターなど蹴散らしてやる、俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！さらに魔法カード《サンダー・ボルト》を発動！お前のモンスターをすべて破壊する。」

「おい！《サンダー・ボルト》は禁止カードだろ！」

《サンダー・ボルト》は禁止カード、アイツ、勝つために手段を選ばなくなつたね。

「さりに魔法カード《ハーピィの羽根箇》を発動。お前の伏せカードをすべて破壊する！」

「《ヒーローシグナル》と《リミットリバース》が、てか《ハーピイの羽根箇》も禁止カードだろ！」

まずい、これじゃあ十代の場はがら空きだ！

「俺は《ダークリゾネーター》を召喚ー！」

ダークリゾネーター ATK1300

【はあー、何でこいつみたいなのに使われなきゃなんないんだよ。】

あ、《ダークリゾネーター》だ。見た感じ疲れきってるね。

「俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダークリゾネーター》をチューニング！」

《ダークリゾネーター》が三つの輪になりその中を《バイス・ドラゴン》が通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

$$5 + 3 = 8$$

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000

「バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で直接攻撃ー！アブソリュートパワー！」

「うわああーーー！」

十代 LP4000 1000

偽者の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が十代に炎を放つた。

【ゴベルさん！十代さんが！】

【な、何で服が焦げているんだよー。】

「何でダメージが実体化してるのー？これは闇のゴベルではないはず。もしかして、アイツはサイコテコヒリストなのか？」

「…………う、ビ、ビ、ダメージが？」

「俺のデュエルディスクはダメージを実体化させることができんだよー！俺はカードを一枚伏せてターンエンドだー！」

偽者

モンスター レッド・テーマンズ・ドラゴン

魔法、罠 伏せ一枚

「…………そ、そんなことまでして、俺に勝ちたいのかよ、お前は。」

「俺はお前に勝てればいい、それだけだ！」

「いいつ、デュエリスト失格だよ。」

【…………十代。】

【クリ~。】

「…くつ、このくらい大丈夫だ。俺のターン、ドロー！俺は魔法力一ド《強欲な壺》を発動！カードを一枚ドローする。そして、《フレンドック》を守備表示で召喚！カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

フレンドックDEF1200

十代

モンスター フレンンドック

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は永続罠《王宮のお触れ》を発動。このカード以外の罠カードの効果を無効にする！」

「くつ、《ガードブロック》が。」

「そして、《ランサー・デーモン》を召喚！《ランサー・デーモン》の効果発動！自分のモンスターに貫通能力を与えることができる。俺は《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を選択する！そしてバトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で《フレンドック》を攻撃！灼熱のクリムゾンヘルフレア！」

「うつ、うわあ―――！」

十代LP1000 0

十代のライフが〇になつた。

「ふん、終わりだな。」

「…………お前、こゝんなことして、ひ、嬉しいのかよ。」

「当たり前だ！お前に勝てたのだからな！今俺は『テュエルアカニ』ア、いや、この世界最強の『デュエリスト』だ！」

何だよ、アイツ。一回勝ったぐらうあんなこと書つて。

「やうこえはお前、俺のことを偽者と書いてたな。」

「…………そ、そうだが。」

「偽者はお前なんだよ。」

「…………お、俺が……偽者……。」

「やうだ！」

「…………。」

十代が黙つてしまつた。

「お前は最低なやつだなー！アカニアの全員を騙してくるんだからなーおい、何か言つてみろよー。」

「…………。」

「あ～そ～だよな。自分で騙してこる」とを分かつてゐるんだよな

！――」

もう我慢の限界だ！」こいつだけには僕の姿を見せたくないかったけど仕方ない！

【違う！十代は偽者なんかじゃない！】

「お、お前はユベル！？何でここにいるんだよーお前は宇宙に行つたはずだろ！」

【悪いけど僕は宇宙には行つていないよ。】

「成程な、この偽者【十代は偽者じゃないって言つてるだろ！】な、何を！？」

「…………ゅ、ユベル。俺は…………。」

【十代、僕は十代が転生者で良かつたと思つてゐるよ。こうしてみんなに会えたからね。】

十代の他に、翔や隼人、三沢に明日香、ハネクリボーにター・ボシン・クロンにエフ・エクト・ヴェーラー達に会えたから僕は嬉しかった。仲間といふことがこんなにも楽しいことが分かつたからね。

「…………ユベル…………。」

【十代、君は君でしょ。】

【やうですよ。十代をさは十代をさです！】

【アイシの言ひてゐ」となんか気にすんな！】

【クリー】

「…………みんな…………」

僕の言葉に実体化したハネクリボー達が続く。

「『ハネクリボー』に『エフェクトヴェーラー』、それに『ターボシンクロン』の精靈だと！？そんな雑魚ばっかりとは笑えるな！」

「…………俺の仲間は雑魚じやない！」

「雑魚を雑魚と言つて何が悪いんだよ！？」

「…………成程、俺の偽者がこんなにも馬鹿とはな。」

「え？この声つてまさか！？」

「誰だお前は！」

「…本人か。」

ジャック・アトラス、確かに本人だね。でもどうしてここに？

ユベル side out

十代 side

何でここに本人がいるんだ？ここは5D-sの世界ではないはずだよな、それにアイツのことを知っているみたいだ。

「何でお前がここにいるんだよ！？」

「お前を倒してくれと頼まれたのでな。」

「まあいい、この俺に勝てると思つくなよ！」

「「デュエル！…」」

ジャック LP4000

偽者 LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《マジド・デーモン》を召喚…カード一枚伏せてターンエンドだ！」

マッド・デーモンATK1800

ジャック

モンスター マッド・デーモン

魔法、罠 伏せ一枚

「そんなモンスター、出したところで意味はねえよー俺のターン、ドローー！ちっ、俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！そして『ダークリゾネーター』を召喚！」

バイス・ドラゴン ATK2000 DEF1000
1200 DEF2400

ダークリゾネーター ATK1300

【また俺かよ！あー、もういやだ！何で俺だけいつひいて会つんだよーーー！】

.....『ダークリゾネーター』、後で必ず助けてやるからな.....。

「俺はレベル5の『バイス・ドラゴン』にレベル3の『ダークリゾネーター』をチューニング！」

【俺は行きたくねーよーあつ、か、身体が勝手にーーー！？】

.....。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

$$5 + 3 = 8$$

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・テーモンズ・ドラゴン》……」

レッド・テーモンズ・ドラゴンATK3000

「《レッド・テーモンズ・ドラゴン》で《マッド・テーモン》を攻撃！アブソリュートパワー・フォース！」

「『』の瞬間、《マッド・テーモン》の効果発動！このモンスターが攻撃対象になつた時に守備表示にする。」

マッド・テーモン ATK1800 DEF0

《レッド・テーモンズ・ドラゴン》が放つた炎が《マッド・テーモン》を破壊した。

「お前じゃ俺には勝てねーよ！ターンエンドだ！」

偽者

モンスター レッド・テーモンズ・ドラゴン

魔法、罠 なし

身体中が痛いがジャック本人に言わなきゃならないことがある。

「……氣をつけろ！そいつは禁止カードを使つぞ！あと、ダメージ

が実体化するぞ！」

「お前、余計なことを言つんじゃねえよ……。」

「……成程な、俺のターン、ドロー！俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！さらに《トラスト・ガーディアン》を召喚！そしてレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《トラスト・ガーディアン》をチューニング！」

『トラスト・ガーディアン』が三つの輪になり、その中を《バイス・ドラゴン》が通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

$$5 + 3 = 8$$

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・テーモンズ・ドラゴン》！」

レッド・テーモンズ・ドラゴンATK3000

お互いの場に《レッド・テーモンズ・ドラゴン》が現れた。

「おい！俺のまねすんな！」

「それはこっちの台詞だ！さらに俺は手札の《バリアリゾネーター》を捨て、《パワー・ジャイアント》を特殊召喚！このモンスターはレベル6だが手札のモンスターカード一枚を墓地に捨てるごとに特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、墓地に捨てたモンスターのレベル分のレベルが下がる。《バリアリゾネーター》のレベルは1、よつて《パワー・ジャイアント》のレベルは5になる。」

パワー・ジャイアント ATK2200 LV6 5

「バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で貴様の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を攻撃！」

「迎え撃て、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

お互いの《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が殴り合ひが偽者の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》だけが破壊された。

「なつ、何でお前の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》は破壊されないんだよ！」

「《トラスト・ガーディアン》をシンクロ素材としたシンクロモンスターは、一ターンに一度まで、戦闘によつては破壊されない。だが、攻撃力が400ポイント下がる。そして、《パワー・ジャイアント》で直接攻撃！」

「ぐつー！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 2600

偽者 LP4000 1800

「俺はターンエンドだ！」

ジャック

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻撃力2600）、
パワー・ジャイアント

魔法、罠　伏せ一枚

「ふざけやがって、俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする。やつと来たか！俺は魔法カード『サンダー・ボルト』を発動！お前のモンスターをすべて破壊する。」

『サンダー・ボルト』がジャック本人の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』と『パワー・ジャイアント』を破壊した。

「そして魔法カード『死者蘇生』を発動！俺の墓地の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を墓地から特殊召喚する。バトル！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で直接攻撃！」

「ぐわあ―――！」

ジャック LP 40000 1000

偽者の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がジャック本人に攻撃した。

「……くつ、どうやら、ダメージが実体化するのは本当のようだな。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

偽者

モンスター　レッド・デーモンズ・ドラゴン

魔法、罠　伏せ一枚

「俺の勝ちは決まりだなー。わざとカレンダーしやー。」

「……これくらいで勝つた氣でいるとは笑わせてくれる。」

確かに、ジャック本人はあきらめていない。むしろ楽しんでいる。

「俺のターン、ドローー。」

「！」の瞬間、永続罠発動！《王宮のお触れ》。このカード以外の罠カードの効果を無効にする…

このタイミングで何でアイツは《王宮のお触れ》を発動するんだ？

「お前の伏せカードは罠カード《ロスト・スター・ディセント》だつてことは分かっているんだよー。俺のデュエルディスクは相手の伏せカードが分かるようにできているからな。」

「卑怯だぞ、それは…」

「勝てればいいんだよー。」

「こいつ、どじまで卑怯な手を使つ氣だよー。」

「フン、俺はお前の《王宮のお触れ》を墓地に送り、《トライプ・イーター》を特殊召喚…」

偽者の《王宮のお触れ》のカードが《トラップ・イーター》に食われた。

「何！」

「さらに《アタック・ゲイナー》を召喚！そして罠カード《ロスト・スター・ディセント》を発動！自分の墓地のシンクロモンスター一本をレベルを一つ下げる、守備力を0にして、守備表示で特殊召喚する！甦れ、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン DEF 2000 0 LV 8 7

この展開は、あのモンスターが来るな。

「どうやらモンスターを並べるだけで精一杯のようだな、俺のタン、『……誰がターンハンドだと言った！』な、何だよ！《セイヴアー・デモン・ドラゴン》以上のシンクロモンスターなんかお前は持つていないだろ！」

えつ？この展開を知らないのかよ。

「見せてやろう、荒ぶる魂！バーニングソウル！俺はレベル7となつた《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1の《アタック・ゲイナー》とレベル4の《トラップ・イーター》をダブルチューニング！」

《アタック・ゲイナー》と《トラップ・イーター》が5つの炎の輪になり、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が通過した。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よー天地創造の叫びをあ

げよ！」

7 + 1 + 4 = 12

「シンクロ召喚！ いでよ、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》！」
ジャック本人の場に禍々しい竜、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》が現れた。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン ATK3500

「な、何だよそのモンスターは…？ 僕は知らねーぞ！」

ま、まさかアイツ、《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》を知らないのかよ！」

「《アタック・ゲイナー》の効果発動！ このモンスターがシンクロ素材として墓地に送られた時、相手モンスター一体を選択し、このターンのエンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！ 僕はお前の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を選択する！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000 2000

「さらに《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は墓地のチューナーモンスター一体につき、攻撃力を500ポイントアップする！ 僕の墓地のチューナーモンスターは四体、よって《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は2000ポイントアップする！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン ATK3500 5500

「攻撃力5500!!（だが大丈夫だ。伏せカードは《炸裂装甲》、
返り討ちだ！）」

「行くぞ、偽者！バトル！《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》で
《レッド・テーモンズ・ドラゴン》を攻撃！バーニング・ソウル！
！」

「罠カード発動！《炸裂装甲》。攻撃したモンスターを破壊する！
お前は終わりだ！！」

終わるのはお前だよ。

「甘い！《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》は相手の魔法、罠、
モンスター効果によつては破壊されない。消え去れ、偽者！！」

「うわあ――――――――――の俺が――――――――――！」

《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》が炎をまとい、《レッド・テ
ーモンズ・ドラゴン》に体当たりし、そのまま偽者を焼き尽くした。

偽者 LP 1800 0

炎が消えるとアーツのカード以外消えていた。

「……貴様が遊城十代だな、お前に一つだけ言つておく。」

「……何だよ。」

「お前はお前だ！」

ジャックは俺を指を差してそう言った。その後、腕の赤き龍の痣が光り、ジャックは光りに包まれて消えていった。

「…………俺は俺、か。」

そうだよな、俺は俺だ。俺はこの世界に転生した時から十代として生きていくと決めていたのを忘れていたよ、ありがとな。…………さてと、

「…………カード、拾つておいつ。」

俺はアイツのカードを拾つて中身を確認した。…………だが、

「…………あれ？おかしいな？」

【十代、どうしたんだ？】

【クリー？】

「…………いや、…………ないんだ。」

【何がないんですか？】

「…………《ダークリゾネーター》のカードだけがないんだ！」

【え――――――――ほ、本当にですか―？】

「…………ま、まさか、…………《スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン》の

攻撃で、アイツと一緒に……。」

【…不憫だね。】

確かに、不憫だな。

「……そうだ、みんな。」

【十代、どうしたの?】

「これからもよろしくな。」

【クリクリ～。】

【はー。】

【ああ。】

【もちろんだよ。】

俺はこの時、仲間の大切さを改めて感じた。

十代 side out

おまけ

「そういうえばアイツ、5D・Sはどこまで知っているか分かるか?」

【……え?】と、確かにWRGPでチーム5D・Sがチームカタストロフと戦った所と言っていたような気がする。】

「あ~、だから『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を知らない訳だ。」

第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場（後書き）

ジャック本人はゾーンとの戦いが終わり、武者修行中にGXの世界に来た設定です。

番外編 翡翠VS魔王+（前書き）

番外編です。コタさんの小説『遊戯王／幻想を抱きし者』より、
なのはと転生者の暁高谷を出演させました。コタさんから出演と痛
めつける許可はもらっています。

冬休みのある日の出来事

十代 side

「…………はあ～、なかなかこのカード達は癖があるな。デッキを組むのが難しい。」

【十代さん、考え方でどうしたんですか?】

「あ～、『Hフュクトヴェーラー』か、今デッキを作っているんだけどな。」

【どんなデッキですか?】

「機皇帝デッキ。シンクロ召喚を使う転生者とかが現れてもいいようにな。」

【あの～、機皇帝って?】

【機械族のモンスターだよ。本体の（インフィニティ）、T、A、G、Cの五体のモンスターが合体するんだよ。三種類あって効果はパーティによって違うけど、の共通した効果は相手のシンクロモンスターを自分に装備することができる。いわば、シンクロモンスターを吸収するのや。】

【つまり、対シンクロモンスターのモンスターってことだな。】

「やつこつ」と。

こうすれば、シンクロモンスターに対して大丈夫だと思つ。ただ、俺が転生者だつてバレることは確実だけどな。コベル、説明ありがとう。その後は悩みながらも何とか機皇帝『テツキ』を三種類組むことができた。

その後、俺達は気分転換に海岸に来ていた。海風が気持ちいいと感じた。

【ねえ、実体化してもいいかな?】

「…………（小声）誰かが見ていたらどうするんだよ…………。」

【そりだね、ごめん。】

今は冬休みだから生徒は少ないけど、ここにコベル達が見られたら大変だからな。そう思つて少し歩いつとした時だつた。

「止まりなさい…」

誰だよ、つて思いながら後ろから声がしたので振り返ると、

「えつ！？十代君？」

何故か俺を見て驚いているのは（魔王）がいた。腕にはデュエルディスクをつけて、バリアジャケットだつける展開していた。て

か、驚くのは「ひだよー何でこの世界にお前がいるんだよー

「何で俺の名前を知っているんだ?... とかお前は誰だよ。」

「わ、私は時空管理局の高町なのはです。あなたの持つているロストロゴギアを渡して下れこ。」

じ、時空管理局!?

「…………悪いけど俺はロストロゴギアっていう物は持つていない。」

「あなたの持つているカードから4つほど反応がありました。それは危険なんです!渡して下れこー!」

4つ?……まさか、ユベル達がロストロゴギアだと!?

「…………何で渡さなきゃいけないんだよ。」

「それは危険な物なんです。私達、時空管理局がそれを保護し保管します。だからこちから渡して下れこ。」

「…………くだらない。」

「えつ?」

「くだらないって言つたんだ。だいたい、ロストロゴギアってなんだよ。何の基準でロストロゴギアって決めつけるんだ?」

「や、それは反応があつたからですー。」

…………た、たつたそれだけ？

「……俺が持っているこのカードのどじが危険なんだ？」

「そのカードは危険ですから早く」さうに渡して下さい。」

…………話を聞けよ…………。

「分かった。デュエルをしてお前が勝てたら渡してやるよ。俺が勝つたら素直に諦めろよ。」

「わ、分かりました。」

そして、なのははどんなデッキを使うんだ？

(みんな、俺は絶対に勝つから安心してくれ。)

【分かったよ。】

【クリ~。】

【頑張って下せご。】

【絶対負けんなよ。】

「「デュエル……！」

十代LP4000
なのはLP4000

「私の先行、ドロー。私は《神獣王バルバロス》を召喚！」このモンスターは生け贅なしで召喚できるの。この効果で召喚した場合、元々の攻撃力は1900になるよ。」

神獣王バルバロス ATK 3000 1900

「私はカードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

なのは

モンスター 神獣王バルバロス

魔法、罠 伏せ一枚

バルバロスか、ということはデメリットを消していくパターンか？
それとも、

「俺のターン、ドロー！俺は《グランド・コア》を召喚！」

グランド・コア ATK 0

「E・HEROじゃない！？」

悪いけど俺は他にもいくつかのデッキを持っている。てか、なのは
は別の世界の俺のことを知っているみたいだ。

「俺はカードを三枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター グランド・コア

魔法、罠　伏せ三枚

「（十代君がHERO以外の『テッキ』を使うなんて驚いたの。でも、それなら勝てる！）…私のターン、ドロー！『スタンバイフェイズ』に罠カード発動！『霸者の一喝』。相手はこのターン攻撃できない。」私は『魔導騎士ブレイカー』を召喚！このモンスターが召喚に成功した時、このカードに魔法カウンターを一つのせるよ。そして『魔導騎士ブレイカー』の効果発動！このカードにのっている魔力カウンターを一つ取り除くことで相手の魔法、罠カードを一枚破壊する。私は右の伏せカードを選択します！」

「チエーンして罠カード発動！『ボム・ブラスト』。自分フィールドの機械族モンスターを三体まで破壊し、破壊したモンスターの数×400のダメージを相手プレイヤーに与える。俺は『グランド・コア』を破壊する！」

「きやーー！」

なのはLP 40000 3600

『魔導騎士ブレイカー』が俺の伏せカードに魔法を放つが、その前に伏せカードが発動して『グランド・コア』が爆発し、その爆風がなのはに当たった。

「じ、自分のモンスターを破壊したの！？」

「そしてこの瞬間、『グランド・コア』の効果発動！このモンスターがカード効果によつて破壊された時、自分フィールドのモンスターをすべて破壊し、自分の手札、『テッキ』、墓地より、『機皇帝グラ

ンエル》、《グラランエルT》、《グラランエルA》、《グラランエルG》、《グラランエルC》を特殊召喚できる！俺はデッキから特殊召喚し、そして、合体し現れる、《機皇帝グラランエル》！！

俺の場に五個のパートが現れ合体し、《機皇帝グラランエル》となつた。

「《機皇帝グラランエル》の攻撃力は自分のライフと同じ数値になる。よつて、《機皇帝グラランエル》の攻撃力は4000になる！」

機皇帝グラランエル ATK0 4000

「一、攻撃力4000！－！」

攻撃力4000は確かに高いほうだが、5D-Sでは《機皇帝グラランエル》は攻撃力20000になつたことがあるぞ。

「わ、私は魔法カード《二重召喚》を発動します。私はチューナーモンスター《カオスエンドマスター》を召喚！」

カオスエンドマスター ATK1500

チューナーモンスター、ということはシンクロ召喚か！

「私はレベル4の《魔導騎士ブレイカー》にレベル3の《カオスエンドマスター》をチューニング！外套に刻まれしは大魔術師の証！悪を貫くは魔力の弾丸！シンクロ召喚！打ち碎いて、《アーカナイト・マジシャン》！」

アーカナイト・マジシャン ATK400

やつぱりシンクロ召喚を使つてきたか。それより、魔法の法つて法律の法であつてゐるよな？砲撃の砲に見えたのは俺だけか？

「《アーカナイト・マジシャン》の効果発動！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを二つのせるよ。《アーカナイト・マジシャン》はこのカードにのつてゐる魔力カウンター一つにつき攻撃力が1000ポイントアップするの。」

アーカナイト・マジシャン ATK 400 2400

「（攻撃できないし、伏せカードが気になるの。《アーカナイト・マジシャン》の効果を使いたいけど攻撃力は下げたくない。）：私は魔法カード《魔力掌握》を発動します。魔力カウンターをのせることが出来るカードに魔力カウンターを一個のせ、その後同名カードを手札に加える。私は《アーカナイト・マジシャン》にのせます。カードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

アーカナイト・マジシャン ATK 2400 3400

なのは

モンスター 神獣王バルバロス、アーカナイト・マジシャン

魔法、罠 伏せ一枚

さてと、フェイトやはやて達が来る前に終わらせないとな。いろいろとやらじしくなるし。

「俺のターン、ドロー！伏せてある魔法カード発動！《大嵐》。フィールド上の魔法、罠カードをすべて破壊する！」

「《魔法の筒》と《聖なるバリアーミラーフォース》が！！」

「バトル！《機皇帝グランエル》で《アーカナイト・マジシャン》を攻撃！グランド・スローター・キャノン！」

「あ、《アーカナイト・マジシャン》が！！」

なのは LP 3600 3000

《機皇帝グランエル》に合体している《グランエルA》のキヤノン砲からレーザーが発射され、《アーカナイト・マジシャン》を攻撃した。

「《グランエルA》の効果発動！と名のつくモンスターがシンクロモンスターを戦闘によつて破壊した時、そのシンクロモンスターを装備する！」

《機皇帝グランエル》の本体の部分が開き、中から光の触手が飛び出し、《アーカナイト・マジシャン》を捕まえて、自分の中に閉じ込めた。

「そんなん！」

「そして、《機皇帝グランエル》は装備しているシンクロモンスターの元々の攻撃力分、自分の攻撃力がアップする！..」

機皇帝グランエル ATK 4000 4400

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター 機皇帝グランエル、T、A、G、C

魔法、罠 伏せ一枚、アーカナイト・マジシャン（装備カード扱い）

「私のターン、ドロー！私は魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動します。手札を一枚捨てて、相手モンスターをすべて破壊します！」

逆転の一手か、だが、容赦はしない！

「カウンター罠発動！『マジック・ジャマー』。手札を一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし破壊する！」

次のターンで終わるな。

「……わ、私は『神獣王バルバロス』を守備表示に変更して、ターンエンド。」

なのは

モンスター 神獣王バルバロス

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー！バトル！『機皇帝グランエル』で『神獣王バルバロス』を攻撃！グランド・スローター・キャノン！」

『機皇帝グラントル』が『神獣王バルバロス』にレーザーを放ち、破壊した。

「『グラントルA』の効果発動！ と名のつくモンスターが守備表示のモンスターを戦闘によつて破壊した時、もう一度攻撃することができる。とどめだ！ 『機皇帝グラントル』で直接攻撃！ グラント・スローター・キャノン！」

「あやあああ……」

なのは LP 3000 0

『機皇帝グラントル』が攻撃して、なのはのライフを0にした。

「…………さて、約束通り諦めてもいいぞ。」

俺がそう言つとなのはは俺にデバイスを向けてきた。

「どういづつもりだ？」

「あ、あなたを公務執行妨害、及び口ストロギア不法所持の罪で拘束します！！」

呆れた。約束は守らない、公務員でもないのに公務執行妨害って言ひ、ロストロギアは持つていないので不法所持、おまけに非殺傷という名の暴力

……もつい。

(……ユベル、モンスターを実体化させてくれ。)

【（霸王モードになる寸前まで来てるね。これは容赦はしないみた
いだ。）…分かつたよ。どのモンスターがいい？】

（……ゴベルに任せる。）

十代 side out

ゴベル side

そりと、どのモンスターを実体化をしようかな？

【…………十代さん、霸王モードになつたんですか？】

【なりかけてるんだよ。ヒルク、どのモンスターを実体化をせ
る？】

【俺は何でもいい。とにかく強い奴であいつをぶつ飛ばしたいんだ
ー】

【クリー】

【私もです！】

【みんなも？…………よし、これがな。十代、決めたよ。】

（……ああ。）

僕が選んだモンスターを実体化させようとした時だった。

「なのはー！大丈夫かー！」

「高谷君ー！」

いつの間にか変な男がなのはの隣に現れていた。あれ？何か変な感じがする。

「……転生者か。」

高谷つて奴も転生者なんだね。

「なのはー、こは俺にまかせらるー。」

「どうしたの、高谷……くん……。」

二人とも十代を見て怯え出してるね。

(……ユベル。)

【分かつてるよ。現れる！】『E・HEROフレイム・ウイングマン』！『E・HEROアブソルートZero』！『E・HEROマリシャス・デビル』！『時械神サンダイオン』！『機皇帝グランエル』！

さてと、これくらいでいいかな。ちなみに『機皇帝グランエル』は全てのパーティと合体しているから。

「じ、十代だとーそれに、き、機皇帝に時械神ー！」

「……お前達、おとなしく帰るなら攻撃はしない。……どうする？」

二人とも、まだ間に合うよ。

「誰が帰るか！！」

あ、何かスイッチが入った音がした。終わつたね、あいつら。

「...攻擊。」

二人が逃げようとしてるけど逃がさないよ。

【闇カード一枚発動！『デモンズ・チヨーン』。】

「なんだこれ！」

「う、動けない！」

一人は飛んで逃げようとするが鎖が一人を拘束した。攻撃がもう少しで当たるね。

數分後

攻撃が終わって一人を見るとあちこち傷だらけで、高谷は気絶していた。非殺傷？なにそれ？死なないように本気は出さなかつたから大丈夫。本気を出せばあいつらなんか消せるけど僕が疲れるから。

「……おこ、まだやるか？」

「ひい……」めんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごり
めんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごり
めんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごりめんなしゃごり

この後、二人は消えた。絶対トラウマになつたね、あれは。

「ふう~、帰ったか。俺達も帰るとするか。」

【 そ う だ ね 】

ユベル side out

番外編 眇王VS魔王+（後書き）

コタさんの小説『遊戯王／幻想を抱きし者』も面白いので読んでみて下さい。

第十一話 テッキ盜難事件∨S神楽坂（前書き）

第十一話です。 いつの間にかお気に入り登録が300件を越えていました。 これからも頑張つて書いていきますのでよろしくお願いします。

第十一話 デッキ盗難事件VS神楽坂

十代 side

いろいろあつた冬休みが終わり、アカデミアが始まった。明日は武藤遊戯のデッキの展示会。で、俺は今、どこにいるかというと、

「アニキ、いいのかな?」
「んないとして。」

「大丈夫だ、明日の朝は混むし、今の時間ならデッキは展示されて
いるはずだ。」

「なんか、楽しみなんだな。」

俺は翔と隼人と一緒に展示室の近くにいる。フライングでデッキを見ようとしていた。以前あのデッキを作つて回してみたが、難しかつた。種族や属性やバラバラだったりとか。まあ、遊戯さんが一生懸命考えて組んだデッキだから俺は何とも言えないけど。ちなみに俺は『ブラック・マジシャン』と『ブラック・マジシャン・ガール』のカードは持つてない。

「あら、あなた達も来ていたのね。」

「あ、明日香さんにお兄さん。」

俺達が話していると、明日香と亮が出てきた。

「ソルジャーに来たということは、考えていることは一人も同じか。」

「ああ、わかった。」

「みんな、覚えてる」とは同じなんだな。」

まあ、明日は混むし、もつもつ見る」とができないからうらやましいな。と、思つていたら、

「マンマミーア……」

「今の声は……。」

「クロノス先生の声だ!」

展示会場からクロノスの悲鳴が聞こえた。……ってあれ?

「三沢君、いつからそこへ?」

「いたよー。明日香とカイザーと一緒に……。」

「いたの?私は気づかなかつたわ。」

「済まない。俺も気づかなかつた。」

「俺もなんだな。」

「…………。」

三沢、落ち込むな。……元気になるまで放つておけ。三沢

を置いて展示会場に入ると割れたガラスケースとクロノスがいた。

「クロノス先生…どうして…」「…？」

「ガラスケースが割られているわ！」

「あー…デッキがないんだな！」

「……まさか、クロノス教諭が…？」

「ち、違うノーネ！私じゃないノーネ…！」

この状況では真っ先に疑われるのは確実だな。まあ、身から出た錆だな。でも仕方ないから助けるか。

「……クロノス先生、ガラスケースの鍵は持つてますか？」

「か、鍵ならここにあるノーネ。」

「鍵を持っているクロノス先生ならこんな荒っぽいことはしない。」

「じゃあ、誰が…。」

「みんなで探そう！」

「まだ近くにいるはずだ！クロノス先生はこの部屋の付近をお願いします。」

「…………わ、分かりましたノーネ。あなた達だけが頼りでスーザ。

「

あ、三沢が復活した。回復するのが早いな。その後、俺達は別れて犯人探しをした。

【十代、どこだったか覚えてないの?】

「海の近くだったことは覚えているんだけど、同じところがたくさんあるから探さないと分からなに。」

【確かにそうだな。】

しばらく探したが見つからなかつた。何でこいつ時に限つて思い出せないんだよ!』

【十代さん。こいつなつたらじらみ潰して探しはじもう!】

「…………いや、今やつてゐからな。」

早くしなこと大変なことになる。そつ思つて走り出した時だつた。

「うわあ————!」

「——この声はまさか!?」

【今の声ついでー!?】

「翔の声だー!あつひだー!」

俺は声のした方へ走つた。

俺が着いた時には、落ち込んでいる翔と高笑いしている神楽坂がいた。手遅れだつたか……。

「翔、大丈夫か！」

「…………あ、アニキ！ごめん、犯人を見つけたんだけど…………」

「ああ、大体分かった。」

翔が神楽坂を見つけて、デッキを取り返すためにデュエルしたが負けたみたいだ。

「これが俺の求めていたデッキだ！このデッキさえあれば武藤遊戯のデュエルを100%再現できる！俺は最強だ！」

神楽坂がなんか言つているが、あいつは自分が何をしているのかが分かつていないうつだな。目を覚まさせるには勝つしかない。

「神楽坂、俺とデュエルしろ。俺が勝つたらそのデッキをおとなしく返してもらひうだ。」

「！」俺に勝てるのか？

「あ、アニキ無理だよ！いくらアニキでもあのデッキには勝てないよー！」

「…………大丈夫、勝てるさ。他人のデッキを盗んで勝つた奴なんか

に、俺は負けない！」

俺は俺の信じたデッキで勝つ、それだけだ！！

「『デュエル！』」「

十代 LP4000

神楽坂 LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROザ・ヒート》を召喚！効果で《E・HEROザ・ヒート》を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

エアーマン ATK1800

十代

モンスター エアーマン

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《幻獣王ガゼル》と《バフオメット》を融合。出でよ、《有翼幻獣キマイラ》！」

有翼幻獣キマイラ ATK2100

1ターン目からいきなり正規融合か、俺も人のこと言えないけど。

「バトル！《有翼幻獣キマイラ》で《エアーマン》を攻撃！」

『有翼幻獣キマイラ』が『エアーマン』に体当たりして破壊した。

十代 LP4000 3700

「くつ、だが、この瞬間罠カード発動！『ヒーローシグナル』。『E・HERO』と名のつくモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル4以下の『E・HERO』と名のつくモンスターを一体特殊召喚する。俺は『E・HEROオーション』を特殊召喚！」

オーション ATK1500

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター 有翼幻獣キマイラ

魔法、罠 伏せ一枚

「アニキ！」

「翔、俺は大丈夫だ。俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに『オーション』の効果発動！フィールドか墓地のHEROと名のつくモンスターを一体、手札に戻すことができる。俺は墓地の『E・HEROエアーマン』を手札に戻す。俺は『エアーマン』を召喚！効果発動！自分フィールドのこのカード以外のHEROと名のつくモンスターの数だけフィールド上の魔法、罠カードを破壊することができます。俺のフィールドには『E・HEROオーション』が存在する。俺は左の伏せカードを破壊する…」

『ヒーマン』が起こした風が神楽坂の伏せカードを破壊した。
……『魔法の筒』だつたか、危なかつた。

「魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札を一枚墓地に送り『デッキからレベル1のモンスターを一体特殊召喚する。俺は『デッキから『ターボシンクロン』を特殊召喚する！』

ターボシンクロン ATK100

【十代、あいつが犯人か！】

(そうだ。)

【……で、俺は何をすればいいんだ？……十代はシンクロは使わないんだろ。】

(ああ、だけどお前の力を貸してくれ！)

【分かつたぜー】

「そんなモンスターを出してどうするつもりだ？」

「こうするのや、俺は魔法カード『融合』を発動！手札の『E・HEROザ・ヒート』とフィールドの『ターボシンクロン』を融合。来い！『E・HERO Great TORNADO』！」

Great TORNADO ATK2800

『Great TORNADO』の効果発動！融合召喚に成功した時、相手フィールドに存在する全てのモンスターの攻撃力と守備

力を半分にする。タウンバースト！

「何だと…？」

下降気流が発生し、《有翼幻獣キマイラ》の動きが鈍くなつた。

有翼幻獣キマイラ ATK2100 1050

「バトル！《Great TORNADO》で《有翼幻獣キマイラ》を攻撃！スーパーセル！」

「くつ！」

神楽坂 LP4000 2250

「だが、この瞬間《有翼幻獣キマイラ》の効果発動！墓地の《幻獣王ガゼル》か《バフォメット》を特殊召喚できる！俺は《バフォメット》を守備表示で特殊召喚する！」

バフォメット DEF1800

ブレイブミスしたか……、先に《エアーマン》か《オーシャン》で《有翼幻獣キマイラ》を攻撃すれば良かつたな。まあいいか。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代
モンスター Great TORNADO、エアーマン、オーシャン

魔法、罠　伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は《バフォメット》を生け贋に《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚！」

ブラック・マジシャン・ガールATK2000

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》だ！…………ビうじょう、ジよじうべ、僕、アニキには勝つて欲しいけど…………あっちを応援しようかな……。」

翔、お前はどういちの味方なんだよ……！

「さりに魔法カード《賢者の宝石》を発動！テッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！」

ブラック・マジシャンATK2500

《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》、良くな出したな。

「俺は伏せてある魔法カード《千本ナイフ》を発動！このカードは自分フィールド上に《ブラック・マジシャン》が存在する時に発動することができる。相手モンスターを一體破壊する。《Great Tornado》を破壊する！」

《ブラック・マジシャン》の周りに現れたナイフが《Great Tornado》を貫き破壊した。

「バトル！《ブラック・マジシャン》で《エアーマン》を、《ブ

ック・マジシャン・ガール》で《オーシャン》を攻撃！ブラック・マジック！ブラック・バーニング！」

「くっ、うわあ！」

十代 LP3700 2500

「俺はターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガール

魔法、罷 なし

まずいな、……だけど諦めたりはしない！

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《命削りの宝札》を発動！手札が五枚になるようにドローする。五ターン後に手札を全て墓地に送る。俺には手札はない、よつて五枚ドローするー！」

「！」で強力な手札補助カードだと…？」

自分でも驚いたよ。まさか！」で来るのは思っていなかつたからな。

「俺は魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを一枚ドローする。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだー！」

十代

モンスター なし

魔法、罠　伏せ三枚

ここが正念場だ。

「俺のターン、ドロー！バトル！《ブラック・マジシャン》で直接攻撃！」

「この瞬間、手札の《バトル・フェーダー》を効果発動！このモンスターは相手が直接攻撃した時に手札から特殊召喚できる。そしてバトルフェイズを強制終了させる。」

バトル・フェーダー ATK 0

《ブラック・マジシャン》が魔力を自分の杖に集中させるが、俺の場に《バトル・フェーダー》が現れ鐘をならし、《ブラック・マジシャン》が魔力を集中させるのを中断した。

「くそっ！ターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター　　ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガール

魔法、罠　　なし

「…………神楽坂、言い忘れたがお前が遊戯さんのデッキを使つても最強にはなれない。」

「どういう意味だ！俺は武藤遊戯のデュエルを研究しつづけている。」

「このデッキがあれば俺は最強なんだ！」

……分かつていな。

「それはお前のデッキではないからだ！そのデッキは遊戯さんが悩んで、考えて、いろんなことを乗り越えてできたデッキだ！お前が使つても本来の力は發揮できない！」

「ならば、俺に勝つてみろ！」

「勝つてやるよ、俺のターン、ドロー！永続罠発動、《コナミッドリバース》。俺は墓地の《E・HEROフュザーマン》を攻撃表示で特殊召喚する！」

フェザーマンATK1000

「そんなモンスター、いつの間に墓地に送ったんだ！？」

「《ワン・フォー・ワン》の時だ。そして罠カード発動！《ギブ&テイク》。俺は墓地の《E・HEROオーシャン》をお前のフィールドに守備表示で特殊召喚し、《フェザーマン》のレベルをエンドフェイズまで《オーシャン》のレベル分アップする。」

フェザーマンLV3 7

「何がしたいんだ！？」

「面白いものを見せてやるよ、俺は速攻魔法《超融合》を発動！手札を一枚墓地に送り、自分フィールドのモンスターと相手フィールドのモンスターを融合する。俺は俺のフィールドの《フェザーマン

』とお前のファイールドの『オーシャン』を融合！来い、『E・HE ROアブソルートZero』！」

「あ、相手モンスターを融合素材に！まさか、このために自分のモンスターを…？」

『超融合』は使いづらいが、『アブソルートZero』や『ガイア』などの比較的融合素材の縛りが緩い融合モンスターを融合召喚するには使いやすい。

アブソルートZero ATK2500

「そして『アブソルートZero』を生け贋に『ターレット・ウォーリア』を特殊召喚！」

俺のファイールドの『アブソルートZero』が消え、『ターレット・ウォーリア』が現れた。

ターレット・ウォーリア ATK1200

「『ターレット・ウォーリア』は戦士族モンスターを一体生け贋にすることで手札から特殊召喚できる。そして、生け贋にした戦士族モンスターの元々の攻撃力分、『ターレット・ウォーリア』の攻撃力がアップする！」

ターレット・ウォーリア ATK1200 3700

「そして、『アブソルートZero』の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手ファイールドのモンスターを全て破壊する…」

神楽坂のフィールドの《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》が凍りつき破壊された。

「…………さよなら、《ブラック・マジシャン・ガール》…………。」

「…………進めよ。」

「バトル！《ターレット・ウォーリア》で直接攻撃！」

「俺は手札の《クリボー》の効果発動！このカードを墓地に送り、この戦闘によつて発生するダメージを0にする！」

「させるか！罠カード発動《威風堂々》。バトルフェイズに発生したモンスター効果の発動を無効にし破壊する！」

「うわあ————！」

《ターレット・ウォーリア》が肩にあるバルカン砲で神楽坂を攻撃した。

神楽坂 LP 2250 0

「…………負けた。…………強いデッキを使っても俺は勝てないのか…………。
俺には才能がないんだ。」

「…………そのデッキは遊戯さんが使ってこそ、眞の力を發揮することができる。お前はただ遊戯さんの真似をしているだけだ。それはお前の本当の強さじゃない。」

「俺の……、本当の強さじゃない……。」

「ああ、でもあのデッキをあんなにも使えたのはすこかつたぜ。俺でも難しかったからな。…………といひで、こつまで隠れているつもりだよ。」

俺がそいつと一緒に番や二沢、亮に他の生徒達や先生達が出てきた。

「なんで止めなかつたんだ？」

「止めるに惜しかつたデュエルだつたからな。」

「…………確かにな。」

その後、神楽坂はデッキを盗んだことを謝り、校長先生は許してくれた。

「せういえば十代、ひとつ気になつたんだが。」

「三沢、どうした？」

「あのデッキを使ったことがあるのか？」

「あるぞ。あと、『ブラック・マジシャン・ガール』のカードは一枚持つてゐるから…………あ。」

し、しまつた……口が滑つた……！

「本当か!?俺のカードと交換してくれー!」

「何十枚でも出すから俺と交換してくれ！」

「僕のカードと交換してください！お願いします！」

や、やばい！なんか命の危機を感じる！

「あ、明日なー明日にしてくれー！」

そうこうで、この場は何とかしのいだ。

翌日

遊戯さんの展示会は問題なく行われた。が、アカデミアの男子生徒の多くはレッド寮の前にいる。

「それでは、ただいまより《ブラック・マジシャン・ガール》争奪トーナメントを始めるにやーーー！」

「…………」「うおおおおおおおおおおー…………」「…………」

「

あまりにも人数が多くだったのでトーナメント戦にして優勝した一人に《ブラック・マジシャン・ガール》のカードをあげることにした。ちなみにこのトーナメントの司会は大徳寺先生。しかもノリノリで自分からやりたいと言つてきた。

「……あの～、大徳寺先生。部屋に戻つてヨ「ダメです」やア……
ですよね。」

口は禍の元、だな。あ～、言わなきゃよかつた！――

【あーじ熱氣ですね～。】

【クニ～。】

もうこい、ビリでもなつてくれ。

「…………不幸だ。」

やつ脇くしかできなかつた。ちなみにトーナメントを優勝したのは
神楽坂だつた。後でどんなテッキを作るのか聞いたら、

「自分にしか出来ない」テコエルが出来るようなテッキを作つてみせ
る。――

と語っていた。

十代 side out

第十一話 テッキ盜難事件VS神楽坂（後書き）

最後の方は面白そうだったので書いてみました。

第十二話 恋する乙女の登場（前書き）

第十二話です。 今回は「トコヘルはあります」。

第十二話 恋する乙女の登場

十代 side

俺は今、レッド寮の食堂にいる。大徳寺先生から編入生がレッドに来たと言っていたが、確かレイが亮に会いたいがために男の格好をしてアカデミアに来るんだよな。で、今は大徳寺先生から紹介されているところだ。

「この度、編入テストを受けてオシリスレッドに編入してきた早乙女レイ君だにや。」

「…………。」

大徳寺先生がレイのことを見つける。まあ、あまり喋ると自分が女の子だってバレる可能性が高くなるからな。

「女の子みたいに綺麗なこなんだな。」

「そうだね。」

隼人、女の子みたい、じゃなくて正真正銘女の子だからな。って、今レイが女の子だつて分かつてるのは俺だけか。

【十代さん、あのレイって子は男の子ではないですよね。】

(そりだ。)

「…………レイ君。十代君を見てどうしたんだにやー?」

「あ、い、いえ、何でもないです。」

「何で俺のことを見ていたんだ?…………まあ、別にいいけど。そのあたりは何事もなく進んでいった。レイは翔達の部屋に泊まることが多い。」

時間は飛んで次の日の夜、昼間は全校集会があり、校長先生からノース校との友好デュエルがあることを告げられた。このままでいけば亮が選ばれるけど辞退して俺と三沢がデュエルして代表を決めることになるはずだ。

【僕は十代なら選ばれると想つよ。】

まあ、選ばれたなら選ばれたで頑張るしかないけど。

【選ばれたとしたらどうのデッキで行くんだ?】

「俺が信じるデッキだ。」

【クリ。】

さてと、デッキの調整でもしますか。

【…………十代さん、レイさんが部屋を出ましたよ。】

「…本当か？分かった。」

俺は部屋を出た。

俺はブルー男子寮の近くで隠れているレイを見つけた。

「レイ、 こんなとこに何してんのだ？」

「十代！な、 なんで！」

「レイが部屋を出たのを見ていたから気になつてな。」

レイが動搖してくるな、 なんか見ていて面白い。

「じ、 十代には関係ないだろ。」

男の子の口調で話してくるが俺には無理をしてくるのが分かるんだよね。

「…………全く、 こんな時間にブルーの男子寮に入らうなんて変な趣味してるな。 それでも男か？」

「ほ、 ボクは男じゃない！あ！」

自分から男じゃないって言つたな、 今。

「…………やっぱりな、道理でなんか変だとと感つたよ。」

「…………こつから氣づいていたの？」

「最初っから。」

本当のことだ。レイが驚いてるが氣にしない。そのあとはレイの話を聞いた。やつぱり亮に会いたくてアカデミアに来たみたいだ。

「…………全く、自分が何をして居るのか分かっているのか？・親とか友達とかが心配しているんじやないのか。いくら子供だから、恋だからいつてやっていいことと悪いことがあるだ。」

「…………う、『あなたさー』。」

「『』あなたさーで済めば警察も裁判所も拘置所もいらない。」

【…拘置所は別にいいんじゃないのか？】

【その前に裁判所も別にいいと思こます。…………それよつも十代さん、そろそろ許してあげた方がいいと思こますよ。】

(ナツだな。)

そろそろ可哀想になつてしまつたし許してやるか。

「レイ、これへりこでおへり反省しておけよ。」

「…………う、分かったよ。」

れじと、レッド寮に戻るとするか。

「ねえ、十代。」

「レイ、どうした?」

「やつ あからになつてこたんだけど、十代の肩の辺りここのひ
て誰?」

「えつ? まさか! ?

「まさかレイもみんなが見えるのか! ?」

「うそ。」

「マジかよ、まさかレイがカードの精霊を見る」とがで
れるなんてな。

「紹介しておくよ、ユベルとハネクリボーとHフュクトヴォーラー
ヒターボシンクロンだ。」

【クヨ~。】

【よひしぐ。】

【ほじぬましで。】

【よひしぐ。まさか十代の他に僕達が見えるなんて驚いたよ。】

後で万丈田も精霊が見えるようになるからな。

「そういうえば、レイには精霊はいるのか？」

「いや、いなこよ。」

「さうか、それよりレッド寮に戻らうぜ。」

「うん、分かった。」

十代 side out

レイ side

まさかボクが女の子ってバレるとは思つてもいなかつた。でも十代は、次の定期船で帰ることを条件にそれまではみんなには黙つてくれるって言つてくれた。…………でもなんだろう、十代がかっこよく見える。

「『恋する乙女』は光属性で魔法使い族だからこのカードを中心として行くなら……、『魔導騎士ディフェンダー』の効果は使えるし、表側攻撃表示では戦闘によつては破壊されないから、『魔法族の里』の効果で相手に魔法カードを使わせないことも簡単にできる。ただ、攻撃力が低いから『レインボーライフ』などのライフを回復するカードも入れておいた方がいいし、魔法使い族で行くなら、『マジシャンズ・ヴァルキリア』の一體でロックもできるし、魔力カウンターを貯めたいなら『魔法都市エンデュミオン』や『魔力掌握』、『漆黒のパワーストーン』のカードが使える。それに『魔導騎士ブレイカー』や『神聖魔導王エンデュミオン』はアタッカーになるし、『ディメンション・マジック』とかで特殊召喚が可能だし、

自身の効果で相手フィールド上の魔法、罠カードを破壊する」ともできる。他には、…………どうしたんだ?」

「…………え、な、なんでもないよ。」

今は十代の部屋にいる。ボクのデッキを見せて、ボクのデッキに会いそうなカードをボクに見せてくれた。

「ねえ、十代って本当にオシリスレッドなの?」

「もうだけど、俺がレッドじゃいけないのか?」

「いや、別に……。」

十代ならプロのデッキリストにも勝てる気がするのはボクだけかな?
?それより、

「こんな珍しいカードをたくさんもらつていいの?」

「大切に使ってくれればそれでいい。…………そうだ、あとこれも
やるよ。」

十代が渡してくれたカードを見てみた。…………ってこれはー?

「エー、エー、これって、ふ、『ブラック・マジシャン』ー?」

「レイ、声が大きい。」

「うー、うめんど。」

な、なんで十代が『ブラック・マジシャン』を持つてるのー? 確かこれって武藤遊戯しか持っていない筈だよね。本当に十代って何者なのかな?

「あ、ありがとう。」

……十代なら『青眼の白龍』も持っているのかも。

「ちなみに『青眼の白龍』は持っていないからな。」

「ええ! ? 何で分かったの?」

「やつ思つてると困つたから。」

そ、そりなんだ……。

「ボクはそろそろ部屋に戻るから。」

「ああ、分かつた。」

そう言つてボクは部屋に戻つた。……十代、カッコいいし優しかったな。

レイ side out

ユベル side

レイが部屋に戻つていったあと、気になることがあった。

【十代。】

「ゴベル、どうかしたのか？」

【レイは十代に惚れたのかもね。】

「…………本當か？まあ、確かに顔が少し赤かったなよつな気がする。

」

【十代、これだけは言つておくれよ。】

「何だよ。」

【十代が誰かを好きになるのなら僕は誰でもこいナビ、一緒に寝ることだけは譲らないからね。】

「それかよ。まあ、自重はしてくれよ。」

十代が誰かを好きになるのは僕にはどうする事もできないうたどりされだけは譲れないことだ。でも、十代が困らない範囲でね。

「…………眠いし寝るか。」

【そりだね。そういうえばさ、《ブラック・マジシャン》のカードはあれだけだったの？】

「…………探したら一枚あった。あの一枚は後で神楽坂にあげるか。

」

【《ブラック・マジシャン・ガール》は？】

「あれだけ。」

まあ、もう一枚ある」とがアカデミアに知れたら大変なことになるね。そんなことより早く寝よう。もしかん十代と一緒にね。

翌日

レイが部屋に訪ねてきた。ビーフやら精霊がいたみたいだ。

「《カードエクスクルーダー》と《マジシャンズ・ヴァルキリア》か。」

【うとう、よろしくね。】

【……よろしく。】

精霊つてたくさんいるんだね。

【あのね、レイはね、じゅうだいのことがすきになつたんだよ。】

「ちよ、ちよっとー。」

【……黙田でしょ、マスターを困らせてはいけなって言つたでしょ。】

】

【だつて、ほんとのことだもん。】

【…全く。】

「うつ見ると一人は姉妹だね。物静かな姉と天真爛漫な妹って感じの。

「十代、ボクは……。」

「……分かつてるよ。」

何かいい雰囲気だね。

「……今度はきちんと受けてくれるから、待つてね。」

「……あ、ああ、待ってるからな。」

【アツアツでラブラブだ。】

【…お仕置き。】

グリグリグリグリグリグリ。

【いたいいたいたいたいたい！やめて！あたまグリグリはいたいからやめて～～！】

【…私は痛くないから大丈夫。】

グリグリグリグリメキヨゴリグキグリ。

【メキコとか、パコとかいつへるよ~~~~~！？】

【……氣にしなー。】

…………凄く痛やう。

「カラルキリア、ヤレヤドリしてあざけ。」

【……はー。】

【ハハハ~~~~、頭が痛いよ~~~。】

やれやれ。

「…………こつぱい勉強して早く来れるよつじゆるから。」

「…………トイなら出来ねた。」

「ひひはっこ霧岡氣だね。

【二人きつこわすかよつむか。】

【やうですね。】

【クコ~~。】

【……どんだけの~】

【外にだよ。】

【あたまいたい～～、あ、まつてよ～～。】

ユベル side out

十代 side

数日後、レイが戻る日が来た。少し名残惜しいが仕方のないことだ。でも、レイなら本当に早く来れそうだ。で、今は翔や明日香達とレイを見送っている。一人きりになつた時に俺が「亮に会わないのか？」と聞いたら、「ボクは十代がいいの！」って言われた。俺もレイがいいし、それに好きになつちましたからな。あと、『カーディスクルーダー』がいろいろと茶化してくるが、その度に『マジシャンズ・ヴァルキリア』にグリグリ攻撃を受けていた。その時にメキヨとかゴリとか変な音が聞こえていたが多分氣のせいだろう。

「十代、待つててね――――！」

「ああ、待つてるからな――――！」

レイ達は船に乗つて帰つていった。さてと、俺達も戻るとする……ん？

「あ、明日香さん？」

「じ、ジュン！」やさ。明日香さんがな、何か変ですわ。」

なんだらか、明日香から物凄い殺氣を感じる。……いやな予感が……。

「……十代、そういうことなのね。」

………… 明日香の田から光が消えた！？

「…………お、おい、明日香！？い、いつたいじうしたんだよーつ
て、翔達がいない！？」

に、逃げたのか！？

「…………。」

「あ、明日香。ま、まずは話を聞こへ「問答無用よーー」ぐぶつ！
！」

が、顔面ーしかもグーで殴られた！

「もう知らないーー！」

そう叫んで明日香は走り去っていった。あれ？まさかこの展開つて

【十代！アイツが！】

【ちよっとゴベルさん！落ち着いてトセー。】

【ゴベル！少し落ち着けよー。】

【クソーーーー！】

ユベルが明日香を追いかけようとしているが、ハネクリボー達が必死に止めている。

(………… ユベル、俺は大丈夫だからな。)

【十代が大丈夫でも僕は嫌だよ！】

【…………その前に十代、顔がすごいことになつてるんだ。】

(え?)

明日香に殴られた所を触ると凄く腫れていた。…………それより、明日香は俺のことが好きだったのか。

【十代さんは罪な男ですね。】

【十代に罪はないよ！罪があるのはアイツだよ！！】

【だから落ち着けって！！】

【クリ～～！～！】

…………混沌だ。
カオス

そのあと、ユベルと明日香をなだめるのに結構疲れた。ユベルは何か危ないことをしようとしていたし、明日香は明日香で本当に大変だった。いろいろと奢られたから。それより、ジュンコやももえ

はともかく、何で翔や隼人や亮にまで奢らなきやなんないんだよー。

「アニキ、ゴチになるツス。」

「ありがとうなんだな。」

「…………済まない。」

「明日香さんを怒らせたんだから当然のことでしょう。」

「そうですねー!」

「…………俺に拒否権はあるわけないよな。」

「もつこいー!自棄だ自棄!」

「…………勝手にしてくれ。」

その後、明日香と話し合って何とか許してもらえた。明日香は俺のことが好きになっていたのだが、俺は断った。明日香も分かってくれたみたいだ。

十代 side out

第十二話 恋する乙女の登場（後書き）

ヒロインはレイになりました。レイは十代達が一年生になつたり合流
ხელმისა.

第十四話 代表決定戦ＶＳ三沢（前書き）

第十四話です。デュエル内容を濃くするのは難しいですが頑張りました。

第十四話 代表決定戦ＶＳ三沢

十代 side

レイがアカデミアを去つてから数日後、ノース校とのデュエルがあるのでその代表を決めるために、俺と三沢がデュエルすることになった。

「本来なら確実に『封魔の呪印』で『融合』を防ぐはずなんだけど、『時械神』を出したから変わるかもな。…………でも、これでいいか。」

【決まつたんだね。】

「ああ、明日はこれでいく。」

とりあえず大丈夫だと思う、三沢がどんなデッキでくるのかは分からぬが自分の信じたデッキでくるだろう。

【…………ねえ、そういうばあ、他にも転生者っていうのかな?】

「…………分からない、それより、いきなりどうしたんだ?」

【何だかここ最近変な感じがするんだ。】

「変な感じって?」

【詳しく述べ分からぬけど変な感じなんだ。】

ユベルがそう言つなら一応警戒はしておいた。この世界は平行世界だからどんなイレギュラーが発生してもおかしくはない。

「そんな詳しく分からぬ」とはいいながら、まずは明日だ。

【そうだね。十代、頑張つてね。】

「分かつてるよ。」

明日が楽しみだ。

翌日

代表決定戦の日が来た。準備は万端、後は全力でデュエルするだけだ。

「それデーハ、ただいまより、代表決定戦を始めるノーネ！」

時間になりクロノスが現れて司会を始めた。

「ラーアイエローからはセニヨール三沢大地、そしてオシリスレッドからはセニヨール遊城十代なノーネ。」

なんかやる気がないな。

「三沢、七番田のデッキは完成したのか？」

「ああ、自分がもつとも信じじるトック、これこそが七番田のトックだ！」

台詞が変わってるな、別にいいけど。

「十代、勝つても負けても恨みっこなしだ！」

「分かってる、俺も全力でいくぜ！」

「「デュエル…」「

十代 LP 4000
三沢 LP 4000

「俺の先行、ドロー！俺は《ハイドロゲドン》を召喚！」

ハイドロゲドン ATK 1600

「カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

三沢

モンスター ハイドロゲドン

魔法、罠 伏せ一枚

俺はいつも通りにいくか。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！」

「戻力ード発動！《封魔の呪印》。手札の魔法カード一枚捨てて、魔法カードの発動を無効にし破壊する。そしてその魔法カードはこのデュエルでは使用できない！」

三沢の『テッキは俺のE・HERO』テッキを研究して作ったものだな。

「十代、これで君の融合モンスターはこのデュエルでは現れることはない！」

「…………それはどうかな。俺はフィールド魔法、《フュージョン・ゲート》を発動！」

「このフィールド魔法は！？」

「《融合》が使えない他のカードで融合召喚をすればいい。《フュージョン・ゲート》は《融合》のカードを使わなくても融合モンスターを融合召喚することができる。だが、融合素材となつたモンスターはゲームから除外されるけどな。俺は手札の《E・HEROレディ・オブ・ファイア》と《E・HEROボルテック》を融合。来い！《E・HEROノヴァマスター》！」

ノヴァマスター ATK2600

「バトル！《E・HEROノヴァマスター》で《ハイドロゲドン》を攻撃！瞬間炎上！」

《ノヴァマスター》の放つた炎が《ハイドロゲドン》を蒸発させた。

「『ノヴァマスター』の効果発動！このモンスターが戦闘によつて相手モンスターを破壊した時、デッキからカード一枚ドローする。魔法カード『天使の施し』を発動！カードを三枚ドローし、その後、一枚墓地に捨てる。そしてカード一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター ノヴァマスター

魔法、罠 フュージョン・ゲート、伏せ一枚

やつぱり手札の消費が激しいな。

「俺のターン、ドロー！魔法カード『強欲な壺』を発動！デッキからカード一枚ドローする。もう一体の『ハイドロゲドン』を召喚！カード一枚伏せてターンエンドだ！」

三沢

モンスター ハイドロゲドン

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！」

……難しいな。

「バトル！『ノヴァマスター』で『ハイドロゲドン』を攻撃！」

「罠カード発動！『和睦の使者』。このターン僕のモンスターは戦闘によつては破壊されず、戦闘によつて発生するダメージは0になる。」

再び《ノヴァマスター》が《ハイドロゲドン》に向けて炎を放つが防がれた。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

十代

モンスター ノヴァマスター

魔法、罠 フュージョン・ゲート、伏せ一枚

十代 side out

三沢 side

やはり一筋縄ではいかないか。だが、負ける訳にはいかない！

「俺のターン、ドロー！」

勝利の方程式の一つが完成した。

「俺は《オキシゲドン》を召喚！さらに罠カード発動！《リビングデッドの呼び声》。墓地の《ハイドロゲドン》を特殊召喚する。そして、魔法カード、《ボンディングH2O》を発動！僕のフィールドの《ハイドロゲドン》一体と《オキシゲドン》一体を墓地に送り、《ウォーター・ドラゴン》を特殊召喚する！」

俺のフィールドの水素の《ハイドロゲドン》一体と酸素の《オキシゲドン》が合わさり、《ウォーター・ドラゴン》が現れた。

ウォーター・ドラゴン ATK2800

「『ウォーター・ドラゴン』の効果により、フィールド上の炎属性及び炎族モンスターの攻撃力は0となる。」

「くつ、『ノヴァマスター』は炎属性のモンスターだから効果は受けれる。」

ノヴァマスター ATK2600 0

「バトル！『ウォーター・ドラゴン』で『ノヴァマスター』を攻撃！アクア・バニッシャー！」

「うわああーーーー！」

十代 LP4000 1200

『ウォーター・ドラゴン』が津波を起こし、その津波に十代の『ノヴァマスター』が巻き込まれた。『ノヴァマスター』の攻撃力は0だからほぼ直接攻撃が通ったのと同じだ。

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

三沢

モンスター ウォーター・ドラゴン

魔法、罠 伏せ一枚

三沢 side out

十代 side

やつぱり三沢は強いな。
でも、絶対に勝ちたい！

「俺のターン、ドロー！俺は伏せてある速攻魔法、《クリボー》を呼ぶ笛》を発動！デッキから《ハネクリボー》を守備表示で特殊召喚する！頼むぜ、ハネクリボー！」

【クリクリ～！】

ハネクリボー DEF 200

「さりに《フュージョン・ゲート》の効果でフィールドの《ハネクリボー》と手札の《E・HERO ザ・ヒート》をゲームから除外し融合。現れる、《E・HERO Theシャイニング》！」

Theシャイニング ATK 2600

「《Theシャイニング》の攻撃力はゲームから除外されているE・HEROと前のつくモンスターの数×300ポイントアップする！」

Theシャイニング ATK 2600 3500

「攻撃力3500！？」

デュエルの後半になればもっと攻撃力をあげられるんだけどな、《フュージョン・ゲート》を使うと簡単に攻撃力をあげられるけど手

札の消費が激しいのが欠点だ。

「バトル！『The シャイニング』で『ウォーター・ドラゴン』を攻撃！オプティカル・ストーム！」

「罠カード発動！『聖なるバリア・ミラーフォース』。相手の攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

「JUで『ミラーフォース』かよ！？」

「…………ターンエンドだ！」

十代
モンスター なし

魔法、罠 伏せ一枚

「JUのままだとアーチキが負けちゃうよー！」

「十代！諦めちゃだめなんだなー！」

二人とも、分かつてるよ。

「俺のターン、ドロー！バトル！『ウォーター・ドラゴン』で十代に直接攻撃！」

そのまま攻撃してきたが、俺にとつては好都合だ！

「手札の『速攻のかかし』のモンスター効果を発動！相手が直接攻撃してきた時、手札のこのカードを墓地に捨てることでバトルフェ

イズを強制終了させる。」

危なかった、さっきの俺のターンでドローしたカードがこれだったから助かったぜ。

「そんなカードがあつたとはな、だけど十代、次のターンがラストだ！俺はターンエンド！」

三沢

モンスター 《ウォーター・ドラゴン》

魔法、罠 なし

さてと、このドローで全てが決まる。次のドローはまあとにかくステイ一ードローってやつだな、…………頼むぜ！

「俺の、ターン、ドロー……！」

会場全体が静寂に包まれた。そして、ドローしたカードをゆっくりと見た。

「俺は魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを一枚ドローする。」

来たぜ！

「…………三沢、このデュエル、俺の勝ちだ！」

「何ー？」

会場全体が驚いている。まさか、この状況をひっくり返すことはできないと思っているのだろうな。

「俺のHERO達の絆を見せてやるぜー！俺は魔法カード、『平行世界融合』を発動！ゲームから除外されている『E・HEROザ・ヒート』と『E・HEROレディ・オブ・ファイア』をデッキに戻し融合。来い！『E・HEROフレイム・ブラスト』！」

フレイム・ブラスト ATK2300

「十代、そのモンスターも炎属性みたいだな。よって、『ウォータードラゴン』の効果によつて攻撃力は0になるぞ！」

フレイム・ブラスト ATK2300 0

「分かつてゐるさ、手札より装備魔法、『ジャンク・アタック』を発動！『フレイム・ブラスト』に装備する。そして永続罠、『幻想の呪縛』を発動！俺は『ウォーター・ドラゴン』を選択する！選択されたモンスターは攻撃力が500ポイント下がり、効果は無効化される！『ウォーター・ドラゴン』の効果が無効化されたことにより『フレイム・ブラスト』の攻撃力は元に戻る！」

「それは！一番最初に伏せてあつたカードか！？」

ウォーター・ドラゴン ATK2800 2300

フレイム・ブラスト ATK0 2300

「さらに墓地の罠カード『スキルサクセサー』をゲームから除外して発動！自分フィールドのモンスターを一体選択し、このターンの

「エンドフェイズまで攻撃力を800ポイントアップさせる。」

「その黒カードはいつ墓地に送ったんだー!?」

「《天使の施し》の時だ。」

ちなみに、もう一枚は『E・HEROネクロダーキマン』だ。

フレーム・ブラストATK2300 3100

「バトル！『フレイム・ブラスト』で『ウォーター・ドラゴン』を攻撃！バーニング・ファイア！そしてこの瞬間、『フレイム・ブラスト』の効果が発動する！『フレイム・ブラスト』が水属性モンスターを攻撃する時、攻撃力が1000ポイントアップする！」

フレーム・ブラスト ATK3100
4100

『フレイム・ブラスト』の炎が三沢の『ウォーター・ドラゴン』を蒸発させた。……すごい水蒸気の量だな。

三沢 LP 3000 1200

「くつ！だが、《ウォーター・ドラゴン》は戦闘によつて破壊された時、墓地の《ハイドロゲドン》一体と《オキシゲドン》一体を特殊召喚でき」「《ジヤンク・アタツク》の効果発動！装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によつて破壊した時、そのモンスターの元々の攻撃力の半分の数値の分だけ相手ライフにダメージを与える。《ウォーター・ドラゴン》の元々の攻撃力は2800、よつて1400のダメージを受けてもらひぜ！」「何！？うわあ――

! !

三沢 L P 1 2 0 0 0

十代 side out

ユベル side

決着がつくと会場から歓声が上がった。

「おめでとう！遊城十代君！君が我がアカデミアの代表です！」

校長がそう告げると歓声がさらに大きくなつた。

「十代、俺の完敗だ。まさか逆転されるとは思つていなかつた。」

「三沢もす」かつたぜ、俺も負けると思つてたからな。でもこれだけは言わせてもらひや。」

「なんだ？」

「自分が望みやえすればテッキは必ず自分に答えてくれるさ。」

なかなかいいこと言つね。

【流石、十代さんですね。】

【俺は勝てると思ってたぜ。】

【クリ。】

見ると十代と三沢が固く握手していた。そして、僕達も……誰かに見られてる感じがする。

【コベル、どうしたんだ?】

【…………今、誰かに見られてなかつた?】

【そりか? 気のせこじやないのか?】

【…………そうだね。】

『氣のせい、と思いたいけどなんか氣になる。まあ、いいか。』

コベル side out

? ? ? side

十代君強くてかっこよかつたな。この世界に来て正解だつたよ。
でも、なんで? なんでなの? なんでコベルが十代君の側にいるの?
おかしいでしょ、コベルは宇宙にいったはずなの。どうして?

「それに《Hフュクトヴィーラー》と《ターボシンクロン》は5D
-sから出でてくるはずなの。どうしてこのGXの世界にいるの?」

なんで? なんでなんでなんで?

「…………そつか、そういうのなんだね! 十代君! 」

私に救つて欲しいからゴベルがいるんだね、そうだよね。だから待つってね、十代君。私があのヤンデレ悪魔から必ず救つてあげるからね。

? ? ? s . i d e o u t

第十四話 代表決定戦ＶＳ三沢（後書き）

最後に出てきたキャラはセブンスターズ編でテュエルをせます。

第十五話 ノース校とのデュエル VS 万丈目（前書き）

第十五話です。少しあり過ぎたかもしません。

第十五話 ノース校とのデュエル VS 万丈目

十代 side

いよいよ明日はノース校とのデュエルの日だ。代表は多分万丈目だと思つ、だが、どん底から這い上がってきたから強くなっているのは確実だ。俺も負けないようにしないとな。…………でも、何かとてつもなくどうでもいいようですぐ大事なことを忘れている気がする。

【……十代、取り込み中悪いけどいいかい?】

「ユベルか、どうしたんだ?」

【(+)最近僕達は誰かに見られてる感じがするんだ。】

「ユベル達が、か?でも、翔達は見えていないし、人前では実体化してはいけないから大丈夫だと思うが。」

【違うよ。僕達が精霊化しても見えるやつがいるんだ。】

精霊が見える人はあまりいないが、一体誰なんだ?

「…………まあ、警戒はしておこうつな。」

【分かったよ。】

さてと、明日の準備の続きをしないとな。

翌日

港にノース校の移動手段である潜水艦が現れ、その中からノース校の校長先生や生徒が出てきた。

「よくこらしたな、一之瀬校長。」

「しばらくの間うちの悪童共々お世話をになりますよ。……ところでトメさんはいますかな？」

「もちろんですとも。」

「この一人、何を話しているんだ？」

【何でトメさんが出てくるんですか？】

【さあな。】

その後、黒い制服に身を包んだ万丈田が現れ、それとほぼ同時に万丈田の一人の兄がTV局と現れた。このデュエルを生中継するみたいだ。そうだ、レイに連絡しておこう。

少し時間は進んで対抗デュエルの時間の直前になつた。その後、レイに連絡したら、『絶対に見るから頑張り応援するね！』と嬉しそう

に言っていた。

【レイ、嬉しそうだつたね。】

「そうだな。」

【負けるわけにはいきませんね。】

【クリ~。】

対抗デュエルの時間になり、アカデミア本校、ノース校の校長先生の二人による開会宣言が行われた。デュエルリングの周りには何台ものカメラがスタンバイしている。生中継というのは嘘じやなかつたのか。

『ま、まず紹介するノ~ハ、アカデミア本校代表、遊城~十代なノ~ネ。』

クロノスの何かぎこちない紹介がされ、本校生徒のボルテージが高まる。……緊張するのは無理はないか。俺は大丈夫だけど。

『対するノース校の代表』は、「要らん！俺の名は俺自身で告げる！引つ込んでいろ！」「な、何をするノ~ネ！』

万丈目がクロノスからマイクを奪つた。

「お前達、俺のことを覚えているか！俺が消えて清々したと思ってる奴！俺が退学になつたことを自業自得だと思っている奴！知らない奴には聞かせてやるー地獄の底から不死鳥の如く復活した俺の名はー！」

万丈目が右手を天に上げる。

「一！」

卷之三

「万丈目サンダーツ！！」

万丈目サンターッッ!!!!」

ノース校の生徒はすぐテンション高いな……。そういえば、潜水艦で現れた時からだつたな。「最初から最後までクライマックスだぜ！」ってやつか？

「行くぞ十代！俺はこのデュエル、負けるわけにはいかない！」

—ああ、かかるてこい万丈目！」

万丈目サンタリツ!

「デュエル！！」

十代 L P 4 0 0 0
万丈目 L P 4 0 0 0

「俺の先行、ドロー！俺は『仮面竜』を守備表示で召喚！」

デラゴン族専用のリクルーターか。

「ターンヒンドだ！」

万丈目

モンスター 仮面竜

魔法、罠 なし

……無警戒だな。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、《テイクオーバー・ファイブ》を発動！デッキの上からカードを五枚墓地に送る。」

「自分のデッキを自分で削るのか！？」

生徒からは「何やつているんだ？」とか聞こえてくる。……無視しよう。墓地に行つたカードは、《E・HEROワイルドマン》、《E・HEROクスノペ》、《E・HEROレディ・オブ・ファイア》、《E・HEROオーシャン》、《聖なるバリアーミラーフォース》の五枚。《ミラーフォース》が落ちたのは痛いな。

「俺は《E・HEROバブルマン》を守備表示で召喚！効果発動！《バブルマン》が召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードが存在しない場合、デッキからカードを一枚ドローできる。」

「魔法カード、《融合》を発動！手札の《E・HEROフュザーマン》と《E・HEROバーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレイム・ウイングマン》！」

フレイム・ウイングマンATK2100

「バトル！《フレイム・ウイングマン》で《仮面竜》を攻撃！フレイムシユート！」

「ぐつー！」

「《フレイム・ウイングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！《仮面竜》の攻撃力は1400、その分のダメージを受けてもらうぜ！」

「ぐわあ——！」

万丈目LP4000 2600

「だがこの瞬間、《仮面竜》の効果発動！デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！俺は《アームド・ドラゴンLV3》を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV3ATK1200

レベルモンスターか。

「あ、あのカードは！？」

「今年の褒美は私の物だ！！」

「負けるな十代君！今年も褒美は私の物だ！」

「…………わ、分かつてますよ。」

「褒美つて何だっけ？」

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター フレイム・ウイングマン、バブルマン

魔法、罠 伏せ一枚

「強がれるのも今のうちだ！俺のターン、ドロー！くくくくく、これから恐怖のターンが始まる。俺のスタンバイフェイズに《アームド・ドラゴンLV3》の効果発動！自分のスタンバイフェイズにフィールド上に存在するこのカードを墓地に送ることで、手札・デッキから《アームド・ドラゴンLV5》を特殊召喚する。」

アームド・ドラゴンLV5 ATK2300

「進化したのか……。」

『アームド・ドラゴンLV5』が召喚されたことによりノース校の生徒のテンションが上がった。

『アームド・ドラゴンLV5』の効果発動！手札のモンスターカード一枚墓地に捨てて、そのモンスターカードの攻撃力以下の表

側表示で存在する相手モンスターを一体破壊する。俺は手札の《仮面竜》を墓地に捨てる。《仮面竜》の攻撃力は1400、よって俺は攻撃力800の《バブルマン》を破壊する—デストロイド・パイル！

『アームド・ドラゴンLV5』の体にある棘が発射され《バブルマン》を破壊した。

「バトル！『アームド・ドラゴンLV5』で《フレイム・ウイングマン》を攻撃！アームド・バスター！」

「ぐつー！」

十代LP4000 3800

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！そしてこの瞬間、《アームド・ドラゴンLV5》の効果が発動する！このカードがバトルによって相手モンスターを破壊したターンのエンドフェイズにこのカードを墓地に送ることで、手札又はデッキから《アームド・ドラゴンLV7》を特殊召喚できる！俺はデッキから特殊召喚する！現れろー！『アームド・ドラゴンLV7』！」

『アームド・ドラゴンLV5』が消え、代わりに成長した《アームド・ドラゴンLV7》が出現した。

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

「「「「「サンダー！サンダー！」」」」

「……………万丈目サンダー……」「……………」

「どうした十代、俺の《アーミド・ドラゴン》を見て怖じ気づいたか？」

「……………万丈目、レベルモンスターって珍しいのか？」

「万丈目サンダー！ そうだ、これは伝説のレベルモンスターなんだ！」

「……………俺、《サイレント・ソードマン》とか《ホルスの黒炎竜》などのレベルモンスターは全部持っているんだよな。

「……………氣を取り直して、俺のターン、ドロー！ スタンバイフェイズに墓地の魔法カード、《ティクオーバー・ファイブ》の効果発動！ 」このカードがスタンバイフェイズに墓地に存在する時、このカードをゲームから除外することでデッキからカードを一枚ドローする！ さらに魔法カード、《天使の施し》を発動！ デッキからカードを三枚ドローし、その後二枚墓地に送る。」

墓地に送つたのは《E・HEROネクロダークマン》と《E・HEROアイスエッジ》だ。

「手札の《沼地の魔神王》の効果発動！ このカードを墓地に送ることでデッキから《融合》を手札に加える。そして発動！ 手札の《E・HEROヒジマン》と《E・HEROフォレストマン》を融合。来い！ 《E・HEROガイア》！」

「だが、俺の《アームド・ドラゴンレバ》の攻撃力は2800、そんなモンスターを出したところで無意味だ！」

「…………どうかな？《ガイア》の効果発動！融合召喚に成功した時、相手モンスターを一体選択し、その選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にし、その半分にした数値の分だけ《ガイア》の攻撃力がアップする。俺は《アームド・ドラゴンレバ》を選択する！」

ガイアATK2200 3600

アームド・ドラゴンレバATK2800 1400

「何！？」

「バトル！《ガイア》で《アームド・ドラゴンレバ》を攻撃！コンチネンタル・ハンマー！」

「うわあ――――！」

万丈目LP2600 400

「十代君！その調子だ！！」

「十代、きばるんだな！」

「アニキー！」

校長、なんでそんなに興奮しているんだ？

「立て！立つんだ！サンダー！！」

「…………立つんだ！！サンダー－アアツツ－－－」「…………

結束力が高いな。それだけノース校の皆は万丈田を信頼しているつてことだな。

「……俺は、……負けるわけには行かない！」

「俺はターンエンド！そして《ガイア》の攻撃力は元に戻る。」

ガイア ATK 3600 2200

十代

モンスター ガイア

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、《強欲な壺》を発動！デッキからカードを一枚ドローする！そして魔法カード、《四次元の墓》を発動！墓地のレベルモンスターを一体選択し、デッキに戻してシャッフルする。《アームド・ドラゴンLV3》と《アームド・ドラゴンLV7》をデッキに戻す。そして永続罠発動！《リビングデッドの呼び声》。墓地の《アームド・ドラゴンLV5》を特殊召喚する！」

『アームド・ドラゴンLV5』、どうするつもりだ？

「手札より魔法カード、《レベルアップ》を発動！自分のフィールドに存在するレベルモンスターを一体墓地に送り、手札又はデッキ

からそのレベルモンスターより上のレベルモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する！《アームド・ドラゴンレベル5》を墓地に送り、デッキより《アームド・ドラゴンレベル7》を特殊召喚する。」

アームド・ドラゴンレベル7 ATK2800

「そして《アームド・ドラゴンレベル7》を生け贋に《アームド・ドラゴンレベル7》を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンレベル10 ATK3000

《アームド・ドラゴンレベル10》…マジかよ。」

「これが《アームド・ドラゴン》の究極体だ！《アームド・ドラゴンレベル10》は《アームド・ドラゴンレベル7》を生け贋にした時の特殊召喚できる！そして《アームド・ドラゴンレベル10》の効果発動！手札を一枚墓地に送ることで、相手モンスターをすべて破壊する！俺はこの雑魚を墓地に送り、貴様の《ガイア》を破壊する！」

まずこ！

【アニキ～、おこうをもつとがまほてくわよ。】

「えーい、早くいけ！」

【あ～れ～～】

あ、《おジャマ・イエロー》だ。……って、そんなことを考へていろ
場合じゃない！

「バトル！『アームド・ドラゴン』×10』で直接攻撃！アームド・
ビック・バニッシャー！」

「うわあ――――――！」

十代 LP3800 800

「ふふふははははははは！十代、これで貴様の負けは決まりだ！今ならサレンダーしてもいいんだぞ！ふふふふふははははははははははははは！」

誰がするか！

まだ俺が負けたとは決まってないだろ。

「貴様に俺の『アーマード・ドラゴン』を倒す術はない！ 諦めろ！ 僕はターンハンドだ！」

万丈目

モンスター アームド・ドラゴンLV10

魔法罷なし

「俺のターナー・ロード」

来てくれたか！

「俺は『E・HEROプリズマー』を召喚!」

プリズマー ATK1700

「《プリズマー》の効果発動！融合モンスターを一体相手に見せ、その融合モンスターに記されている融合素材モンスターを一体墓地に送り、このターンのエンドフェイズまで、《プリズマー》は墓地に送ったモンスターと同名カードとして扱う。俺は《E・HEROダーク・ブライトマン》を選択し、デッキから《E・HEROスパークマン》を墓地に送る。そして《プリズマー》は《スパークマン》として扱う。リフレクト・チヨンジ！」

これで準備は整った！

「そんなモンスターを出したところで無意味だ！」

「そして俺は魔法カード、《ミラクル・フュージョン》を発動！フィールドの《スパークマン》として扱う《プリズマー》と墓地の《沼地の魔神王》をゲームから除外し融合。来い！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK2500

「伏せてある速攻魔法、《異次元からの埋葬》を発動！ゲームから除外されている《E・HEROプリズマー》を墓地に戻す！そして、《シャイニング・フレア・ウイングマン》の攻撃力は墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイントアップする。俺の墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターは15体、よって攻撃力は4500ポイントアップする！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK2500 7000

「…、攻撃力が7000だと…？」

「ちょっとやり過ぎたかな……。会場がざわめいているし、でか、俺もこの攻撃力を出したのは始めてだ。」

「バトル！『シャイニング・フレア・ウイングマン』で『アームド・ドラゴン』Ｖ10』を攻撃！シャイニング・シユート！…！」

『まあい！カットだ！カット…』

「うわあ――――――！」

万丈目 LP 400 0

『シャイニング・フレア・ウイングマン』が『アームド・ドラゴン』Ｖ10』を攻撃し、万丈目のライフを0にした。

十代 side out

レイ side

「ちょっと…！十代はどうなったの……」

【ハハハ】

何でいことじりで画面が切り替わるの…？

【…マスター、落ち着いて下さ…。】

「でも～。」

【…十代さんなら勝つたと思こます。】

そんなこと分かってるよ。

【…後で連絡してみたらどうですか?】

「…………やうすむよ。」

よし、それまで勉強しよう!

レイ side out

十代 side

決着がついた後は原作通りだった。で、今は表彰式が行われている。

『これよ～り、表彰式を始めまス～ノ～！ 勝者の校長はひび～へ。
そして、褒美をあげる～ハ、ミス・デュエルアカデミー～アな～
ネ～。』

クロノスの声とともに現れたのは、トメさんだつた。…………しかも、
何故か《ブラック・マジシャン・ガール》の格好で……。

「なんでトメさんが？」

「ミス・デュエルアカデミアっていたんだ。」

トメさんが鮫島校長にキスをした。……………ほ、褒美つてまさか！？

「アニキ、どうしたの？」

「……………」
「かよ。たのむつたのかよ。」

「えつ？」

「褒美つてこれだつたのかよ—————！」

やうにばれにはこられなかつた。

十代 side out

第十五話 ノース校とのデュエル VS 万丈目（後書き）

次からはセブンスターズ編に入ろうと思います。

第十六話 セブンスターZ編始動！そして現れる転生者（前書き）

第十六話です。セブンスターZ編が始まります。ラストは大変なことになります。

第十六話 セブンスターズ編始動！そして現れる転生者

十代 side

俺は毎晩三沢や万丈田達と共に校長に呼び出され、この島に眠る二
幻魔、七星門の鍵、そしてそれを狙うセブンスターズについて話さ
れた。ついに来たか。これからセブンスターズとデュエルす
る際にはダメージが実体化する闇のデュエルが行われることが多く
なるから気をつけないとな。

【十代さん。】

【誰かが後をつけてくるわ。】

(…………分かつてゐるよ。)

放課後、レッド寮に戻っている途中のことだった。誰かが俺達のこ
とをつけていることが分かった。

【…………クリ~。】

(…………ハネクリボ~、心配するな。)

この時期だとセブンスターズの誰かだな。俺はしづら歩き、俺達
以外は誰もいないことを確認した。

俺はしづら歩き、俺達以外は誰もいないことを確認した。

「…………とにかく、ここまで俺についてくるつもつだよ。」

「……へえ～、よく分かったね。」

俺が振り返つてそう言つと木の陰からオベリスクブルーの制服を着た女子が出てきた。

「始めてかな～、遊城十代君。私はね、原田真理奈つていうの！よろしくね。」

「…………で、何か用か？」

原田真理奈か、髪の色は紫でポニー・テールだ。…………でも、なんだこの気味悪い感じは？

「十代君にはね～、すゞぐ危険な悪魔が憑いているの。だから、その悪魔を私が追つ払おうと思つてね。」

「俺に悪魔が憑いているのか？」

「うん、そうだよ。…………十代君の隣にいるゴベルがねーーー

「こいつ、ゴベル達が見えるのかー？」

【十代、最近僕達を見ていたのは多分あの女だよ。】

「…………成程な。」

何言つてこるんだ？

「十代君、君の側にゴベルがいるとね、君は不幸になるんだよー。」

「どういふ意味だ？」

「ユベルがいるとね、ユベルが他の人達を傷つけてね、その人達が十代君から離れていつちゃうんだよ。」

「なんだ、……それだけのことか。」

俺はそつまつとレッヂ寮に向かおうとした。

「待つてよー！」

真理奈に呼び止められた。

「これは本当のことなんだよー！」のままだと十代君は本当に不幸になるんだよー！」「

…………馬鹿馬鹿しい。

「…………じゃあ俺はどうすれば幸せになれるんだ？」

「簡単なことだよ。私といえば幸せになれるんだよー！十代君に危害を加える奴は私が懲らしめるから十代君は何も心配しなくていいんだよー！」

本当に馬鹿馬鹿しい。

【十代、こいつ何言つてるんだい？】

「…………一つだけ分かる、馬鹿馬鹿しいことだ。」

【……馬鹿なんだね。】

ユベルが呆れている。無理もないか。

「馬鹿じゃないよ！」

相手にするだけ時間の無駄になるな、早く戻つて休みたいし。

「…………私とデュエルしてよ。『デュエルくらいならいいでしょ！』

デュエルくらいなら構わないか、そう思つてデュエルディスクを構えようとした時だった。

【十代、こいつの相手は僕にやらせてくれないかな？】

突然ユベルがそう言つてきた。

「…………別にいいけど。」

【ありがとう。】

そう言つてユベルは実体化した。ちなみに左腕には自分の腕から出したデュエルディスクがある。

「本当にユベルなんだね。十代君から離れてよーこの悪魔ーー。」

【まあ、否定はしないよ。僕の種族は悪魔族だからね。】

確かに本当のことだ。

【「テュエル！！」】

ユベル L P 4 0 0 0

真理奈 L P 4 0 0 0

十代 side out

ユベル side

さてと、あの女はどんなテッキを使つてくれるんだろうか？

「私のターン、ドロー！私は《キラー・トマト》を呑嚥するよ！カードを一枚伏せてターンエンドだよ！」

キラー・トマト ATK 1400

真理奈

モンスター キラー・トマト

魔法、罠 伏せ一枚

【僕のターン、ドロー！僕は魔法カード、《ダーク・フュージョン》を発動！手札の《E・HERO フュザーマン》と《E・HERO バーストレディ》をダーク・フュージョン。現れる！《E・HERO インフェルノ・ウイング》！】

「い、《E HERO》！？」

インフェルノ・ウイング ATK2100

【バトル！『インフェルノ・ウイング』で『キラー・トマト』を攻撃！インフェルノブラスト！】

「くうう！」

真理奈 LP4000 3300

【『インフェルノ・ウイング』の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに『える！】

「あやあ！」

真理奈 LP3300 1900

「『キラー・トマト』の効果発動！戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の闇属性モンスターを一体攻撃表示で特殊召喚できる。私は『クリッター』を特殊召喚するよ！」

クリッター ATK1000

【僕はカードを一枚伏せてターンエンド。】

ユベル
モンスター インフェルノ・ウイング

魔法、罠 伏せ一枚

十代があの女と『コール』する時に対策が出来ぬつておかないとね。

「何でユベルが『HERO』を使っているの？」

【知る必要はないと思ひけどね。】

「別にいいよ！私が勝つんだから私のターン、ドロー！私は魔法力一ド、『苦渋の選択』を発動！選ぶのはこの五枚だよー。」

えーと、《シャイン・エンジェル》が一枚、《「ーリング・ノヴァ》『が一枚、《キラー・トマト》が一枚、か。この女は何がしたいんだ？

【じゃあ、僕は《シャイン・エンジェル》を選択するよ。】

「残りは墓地に送るよ。そして墓地に存在する光属性の《シャイン・エンジェル》と闇属性の《キラー・トマト》をゲームから除外して《混沌帝龍 終焉の使者》を特殊召喚ー！」

「か、《混沌帝龍 終焉の使者》だとー？」

確か禁止カードだったはず、こいつもあの偽物と同じく勝つためには手段を選ばないのか。でも、よりによつて《混沌帝龍 終焉の使者》とはね。

【それは禁止カードのはずだよ、何で入れているんだい？】

「禁止カード？禁止カードってこつのは私以外は使っちゃいけないカードのことなんだよー。」

…………何言つてるんだい、こいつは？

「『混沌帝龍 終焉の使者』の効果発動！ライフを1000ポイント支払つて自分と相手の手札とフィールドのカードを墓地に送り、その枚数×300ポイントのダメージを相手に与える。墓地に送るカードの枚数は10枚だから30000ポイントのダメージだよ！」

「ぐわああ――――！」

『混沌帝龍』が咆哮を上げると全てのカードが破壊された。

真理奈 LP1900 900

ユベル LP4000 1000

「そして『クリッター』の効果で私はテックから『ハ汰鳥』を手札に加えて召喚するよ！」

確かこのパターンって、ハ汰ロックだね。

「バトル！『ハ汰鳥』でユベルに直接攻撃！」

【墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで攻撃を無効にする。】

『ハ汰鳥』が僕に攻撃してくるが、半透明になつた『ネクロ・ガードナー』が現れ、攻撃を防いだ。

「ちょっとー？いつ墓地に送ったのよー！」

「…………《混沌帝龍》の効果の時だな。」

「十代君、君はどっちの味方なのー!?」

「俺はユベルの味方だよ。」

「十代君ー田を覚ましてよー君はユベルに騙されているんだよー!..」

「…………あのな、お前さつきから何言つてるんだよ。」

十代が怒りを通り越して呆れているね。

「私はターンヒンドー!」

【そして《ハ汰鳥》はエンドフェイズにお前の手札に戻る。】

真理奈

モンスター なし

魔法、罠 なし

【僕のターン、ドローー!】

『混沌帝龍』を使って来たことには驚いたけど、この女は所詮卑怯者だ。

【僕は《E・HEROバブルマン》を特殊召喚!《バブルマン》は手札がこのカードのみの場合、手札から特殊召喚することができる。そして《バブルマン》の効果発動!《バブルマン》が召喚、反転召

喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードがない場合、『テッキからカードを一枚ドローする。】

「これで終わりだ。

【僕は魔法カード、『ダーク・コーリング』を発動！手札の『E HEROマリシャス・ヒッジ』と墓地の『E HEROインフェルノ・ウイング』をゲームから除外し、ダーク・フュージョン。来い！『E HEROマリシャス・デビル』！】

【マリシャス・デビル ATK3500

【バトル！『マリシャス・デビル』でお前に直接攻撃！ヒッジ・ストリーム！】

「あやあ――――――！」

……終わった。

真理奈 LP900 0

「ユベル、お疲れ様。」

【『やつ』といふなもんだよ。……でもなんか満足できない。】

「お前は鬼柳か。」

【別にいいじゃないか、それより早く戻るわよ。】

「ああ、分かった。」

ユベル side out

十代 side

さて、戻るとしますか。

「待つてよー！」

……ああ、もう！

「待たない。」

「だから待つてよー！」

真理奈がいつの間にか田の前に来ていた。

「だから何なんだよー！」

そう言つと真理奈は俺に近づいてきた。
「な、何するつもりだよ？」「…………」

「……………」

「ブスッ！グチュードスッ！」

「…………えつ？」

何かが刺さる音がしたと同時に腹に痛みが走った。

「…………な、何を……、したんだ……。」

「…………十代君がいけないんだよ。…………私の言つことを聞かないからなるんだよ。」

真理奈の手には血の付いたナイフがあり、俺の腹から血が流れていった。

「…………う、これは……、俺の……、血?」

しかも……、量が多い……。

「…………う、…………はあ、…………くつ…………。」

まづこ…………、意識が…………。

【お前……よくも十代を……】

【ユベルさん!十代君を助けるのが先ですよ!】

【クコ~、クリ~!】

【十代が死んだらどうするんだ!】

…………みん……な。

「アニキ……どうしてやるの……!」

「十代…ど！」こるんだ、返事をしろー。」

「…………まわい！誰か来たー！」

「…………ひー、まんじゅうひーめ…………。」

「…………＼＼めん。」

俺の意識は途切れた。

十代 side out

第十七話　冥府の官吏者と新たな転生者（前書き）

第十七話です。ナハトさんよりオリキャラの提供がありましたので
出してみました。

第十七話　冥府の官吏者と新たな転生者

万丈目 side

校長からセブンスターZについて聞いた。どんな奴等かは知らんがこの万丈目サンダーが蹴散らしてくれる！

「万丈目君、ちゃんと探してるツスか？」

「万丈目サンダー！今探してるだろ！」

全く……、十代の奴はどうしているんだ？

「アニキー……どうしているの……！」

「十代……どこにいるんだ、返事をしろ！」

森の中まで俺達は探しに来ているが、十代は見つからない。
全く、どこに……ん？なんだ、この臭いは？
……

「なんか臭うッスね。」

「これは……血の臭いだ！」

まさか、もう1人の島にセブンスターZが！？あっちから臭うな。

「な、なんだこれは！？」

「アニキー。しつかりして……」

血の臭いがした方に向かうと十代が腹から血を流して倒れていた。

「万丈目君、どうしよう…？」

「お前は鮎川先生にこのことを知らせて来い！」

「う、うん、分かったよ！」

「そつ、出血の量が多い……おかしい、何故傷がないんだ！？
……この手紙は？」

『十代君の傷は何か消しましたが血の方は無理なので早く輸血してください。それと後は死なないで下さい。それとおまけで大自然の加護も渡しときましたので悪意ある人間には大自然が少しいたらりますので、その間に逃げるなり何なりして下さい。レイちゃんに渡しとくと言つよりも十代君が選んだ好きな人なら加護はもらえますが、その分闇の存在などの戦いにはきつくなるかもしけれませんね。』

……途中から訳の分からんことが書いてあるが早くすれば助かる
といふことだな。

【万丈目のアニキー。】

「この大変な時に出てくるな！？」

【おこりと同じ精霊がいるんだよ～。】

「何だとー?」

周りをよく見ると確かにいた。十代の精霊か?

【あ、あの～、私達が見えるんですか?】

「ああ、一体何があつたんだ!?」

【後で何があつたか話すからまずは十代を助けて!!--】

【クリ～!!】

【頼むー!】

「言われなくとも分かっている!」

十代、死んだら許さんぞ!!

その後、十代は一命をとりとめた。鮎川先生によると「万丈目君達があと少しでも遅かつたら助からなかつた。」らしくとても危ない状態ということだった。その後、俺は人気のない所に行き、十代の精霊達に話を聞くことにした。十代のデッキは俺が持つている。こうしなければ精霊と話すことが出来ないからな。

「……さて、何があつたか詳しく聞かせてもらひや。」

【…………分かったよ。君は原田真理奈っていう女を知っているかい？】

「知つてこるが……。」

【知つているなら話が早いよ。…………あの女が十代を刺したんだ！】

「何！それは本当か！？」

【その人とデュエルをしたんですけど、《混沌帝龍 終焉の使者》を使っていたんですよ。】

「《混沌帝龍 終焉の使者》だと！？それは禁止カードのはずだ！？」

【それが、禁止カードは私以外が使っちゃいけないカードだ、って言つていたんだ。】

【…………クリ~。】

【…………何だ、その言い訳は？】

「…………とにかく、真理奈といつ女が十代を刺したのは本当のことなんだな？」

【…………そうだよ。】

くそつー！見つけたらただじや おかない！

【万丈目さん、頼みます！】

「任せろー……………そりいえば、十代の傷を治したのは誰なんだ？」

【……………それが、十代の傷を治した後、すぐटビツカに行つたから分からんんだ。】

【……………あの女じゃないからね。】

「……………そつか。十代が持つてゐる鍵は俺が預かる。ところでお前達はどうする？」

【十代が目覚めるまで僕達は十代の側にいるよ。】

「じゃあ、ここの十代の『テッキは鮎川先生に預けておく。』

万丈目 side out

? ? ? side

俺は天川零、元人間で今は冥府の官吏をやつてゐる。簡単に言つて地獄の門番だ。年は確か一五〇〇歳だった氣がする。まあ、んなことはどうでもいい。

「……………で、あの転生者がやり過ぎでいるから俺が直々に行つてこい、つて訳だな。」

「は、はい！」

「……………つたぐ、テメヒら頭の中は空っぽかー俺の仕事を増やすん

じせきねーよ!

す、すみませんでした！い、以後、気をつけます！」

「テメエ、そのセリフ何回も俺の前で言つてるよな？」

【まあ、まあ御主人。そこまでにしてあげて下さいよ。】

「チツ、分かつたよ。テメエ、俺が行つてやるからひとつと帰りやがれ！」

「モニ！」

そう言つと神の使いは帰つていつた。

「……全く、あのジジイやババア達は何やつてたんだよー。あいつらの頭は動物以下かー?」

【……自分の上司達に容赦ないですね。でも御主人、よく仕事引き受けましたね。】

「俺の仕事だからだよ。まあ、後でジジイやババア達からボロ雑巾になるまでいろいろと絞りとつてやるがな。」

【あの、顔が怖いんですけど。】

【カイエン、主人はいつものことだ、
気にしたら負けだ。】

【グルウ。】

俺の部下は《冥府の使者ゴーズ》と《冥府の使者カイエン》、《冥王竜ヴァンダルギオン》の三人。三人とも精霊だ。二人と一緒にやねーぞ。間違えんなよ。

「最近は馬鹿な転生者どもが原因でアテムとのデュエルがろくに出来てねーんだよな。」

【でも御主人、その原因の根本は上ですよ。】

【確かに。】

【グルウ。】

ちなみに三幻神とかの全てのカードは持つている。アテムに見せた時の驚いた顔は面白かつたぜ！

【主人、アテムとのデュエルの勝敗数は？】

「確か、140勝140敗20引き分けだ。次は俺が勝つ！」

【僅差ですね。】

「アテムはチートドローを持つてるからな。」

俺も持ってるけど、アテムは元祖チートドローなんだよ。俺なんか一番煎じだ。

「さて、長話もこれくらいにして、お前ひさつと仕事に行くぞー。」

【【はいー】】

【グルウ！】

仕事しますか。

零 side out

? ? ? side

私は早乙女ユキ、レイの姉で転生者です。前の世界では交通事故にあつたことまでは覚えているけど気づいたらこの遊戯王の世界にいたんです。最初は楽しめると思っていました。…………でも小さい頃、お父さんとデュエルした時に、自分がサイコデュエリストだということが分かると状況が変わってしまいました。私の力でお父さんや友達を傷つけてしまいお父さんとお母さんは私のことを嫌いになり、友達はみんな私から離れて行きました。でも妹のレイだけは私のことを嫌いにはなりませんでした。……で今はレイとデュエルしています。

「私は魔法カード、『闇の誘惑』を発動。デッキからカードを一枚ドローして、その後、手札から闇属性モンスターを一体ゲームから除外する。私は『ネクロフェイス』をゲームから除外する。『ネクロフェイス』の効果発動。このカードがゲームから除外された時、お互いのプレイヤーはデッキの上からカードを五枚ゲームから除外する。ゲームから除外されたもう一体の『ネクロフェイス』の効果を発動するよ。」

「ボクのデッキがなくなっちゃたよ。」

「私の勝ち、だね。」

私のデッキは除外とデッキ破壊を組み合わせたデッキにしている。最初は植物族バーンなどのデッキを使っていたけど、サイコデュエルリストの力に気づいた後、私はこのデッキに変えた。私はいろんなカードは持っているけど、『宝玉獣』とかの特定の人しか持っていないカードはなかった。

「…………ねえ、レイ。」

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「そのカードって前に話してくれた人から貰ったの？」

「うん、そうだよ！十代はね、デュエルは強いし頭もいいし、かっこいいんだ！」

「…………そりなんだ。」

「…………おかしいな？原作では十代はデュエルは強いけど学力は低いはず。…………なんでだろう？」

「…………ねえ、何かされなかつた？」

「大丈夫だよ。もう、お姉ちゃんつてば心配しちゃう。」

「…………」めん。「

レイがアカデミアから帰つて来た時はレイを抱きしめて、一緒に風呂に入つたり、寝たりもした。

「お姉ちゃん、謝るのはボクの方だよ。」

「レイが無事でよかつたから大丈夫。」

「…………お姉ちゃん、ボクはどんなことがあってもお姉ちゃんの味方だからね。」

「…………レイ、ありがとね。」

ユキ side out

第十七話　冥府の官吏者と新たな転生者（後書き）

次はオリキャラの設定を書きます。ナハトさん、十代の治療とオリキャラの提供ありがとうございました！

オリキャラ設定（前書き）

出てきたオリキャラの設定です。

オリキヤラ設定

天川零 （ナハトさん提供）

性別：男

年齢：1500歳（本人曰く）

性格：完璧な仕事主義、仲間思い

使用デッキ：カウンター罷主体

精霊：冥府の使者ゴーズ、冥府の使者カイエン、冥王龍ヴァンダルギオン

備考：元人間で現在は冥府の官吏者。見た目はグレンラガンのカミナ。カードは全て持っている。転生者ではなく、もともと遊戯王の世界にいた人物。冥府の官吏者の仕事は現世に迷い込んだ悪性の鬼を元の場所に戻したり、地縛霊や浮遊霊などを輪廻の輪に入れたりなど色々な仕事をする。それに関した書類を作成して上司（閻魔大王）に提出しているが、最近は上（神とか）が色々とやらかしているため仕事が多くなっている。やり過ぎた転生者にはデュエルを申し込み、彼に負けたものは地獄に行くか輪廻の輪に強制的に入れられ、全ての記憶を無くされてから転生させる。が、たまに無罪放免もある。上司には容赦なく毒舌を吐くが、実は仲間思いで仲間が傷つくぐらいなら自分が傷ついた方がいいと思っている。仕事の合間に冥界にいるアテムとデュエルしているが、勝敗数は僅差である。チートドローは持っている。

早乙女ユキ （ナハトさん提供）

性別：女

年齢：13歳（初登場時）

性格：物静か、心配性

使用デッキ：デッキ破壊+除外、植物族デッキ

精霊、（）内は呼び名：ブラック・マジシャン・ガール（マナ）、
ブラック・ローズ・ドラゴン（サクヤ）、凛天使クイーン・オブ・
ローズ（ユウカ）、魔天使ローズ・ソーサラー（マリサ）

備考：レイの姉で転生者。見た目は真・恋姫無双の関羽。どんなルールも守る良心的な存在。カードは特定の人物しか持っていないカード以外は持っている。モンスター・エクシーズやエクシーズ召喚は知っているがゼアルは一話も見ていない。小さい頃の父親とのデュエルでサイコデュエルリストの力が覚醒し、その力で父親や友達を傷つけてしまい、両親や友達からは嫌われてしまうが妹のレイは嫌いにはならなかつた。レイから十代について言われ、十代のことを不思議に思う。植物族デッキはサイコデュエルリストの力が覚醒した時から使っておらず、デッキ破壊と除外を組み合わせたデッキでレイと（レイしかデュエルする人がいない）デュエルしている。少しシスコン気味。男性恐怖症だが十代は大丈夫。

性別：女

年齢：16（初登場時）

性格：ヤンデレ

使用デッキ：禁止カードを沢山入れているデッキ

精霊：見えるがない

備考：転生者。アニメを見て十代が好きになった。だが、ユベルは大の嫌いで十代をユベルから救おうと考えている。ヤンデレなので頭がおかしく、禁止カードは自分以外は使ってはいけないカードだと思っている。

彩輝サイキ
(ナハトさん提供)

性別：男

年齢：不明

性格：優しいがやるときはやる

備考：零の上司で閻魔大王の長男。零を冥府の官吏者にスカウトした張本人。見た目は烈火の炎の紅麗の顔の傷がない姿。二十歳くら

いに見えるが実際は不明。性格は優しいが罰するときは罰する。結婚はしているがまだに新婚の雰囲気をだしている（周りが砂糖を吐くぐらい）。

玻凜ハリン
(ナハトさん提供)

性別：女

年齢：不明

性格：忠義より愛

備考：零の上司ではないが、それなりの権限を持つている。彩輝の奥さんで見た目は烈火の炎の音遠だが、胸は大きい。趣味は料理と仙薬作りであり、零が仙薬の実験台になっている。

オリキャラ設定（後書き）

いちいちも変更があつたら追加しておきます。

第十八話　冥府の官吏者の制裁（前書き）

第十八話です。早くも真理奈に鉄槌をくだします。セブンスターズの出す順番を変えました。

第十八話　冥府の官吏者の制裁

十代 side

「…………ん、…………あれ?」
「…………」

気がつくとベットに寝ていた。…………そりこえれば、俺はあの時真理奈に刺されて氣を失ったんだよな。俺はどのくらいの時間寝ていたんだ?…………みんなはどうに?…………ユベル達は?

「…………十代君、氣づいたのね。」

「鮎川先生、…………俺は、…………どうして?」

「万丈目君が倒れていたあなたを運んだのよ。出血が多いのに何故か傷がなかつたけど。…………あとこれ、十代君のデッキと倒れていた所に置いてあつた手紙よ。」

万丈目が運んだのか。…………後でお礼言つとかないとな。手紙は後で読んでおこう。

「…………どのくらい俺は寝てたんですか?」

「六日間よ。」

「む、六日間も?」

…………道理で長いと思つたよ。

「…………鮎川先生、俺を刺したの？」「真理奈さんでしょ。」「え？」

「十代君を刺したのは原田真理奈さんよ。」

何で知っているんだ？

「万丈目君が問い合わせて真理奈さんがすぐに認めたのよ。」

「…………そ、そうですか。」

「…………すぐに認めたのかよ。普通はやつていないつて言つだろ。」

「真理奈はどうなったんですか？」

「…………退学になつたわよ。」

まあ、当たり前だよな。

「十代君、しばらくは激しい運動は禁止、でも、出歩いても大丈夫よ。…………今は夕方だから寮に戻つてもいいわよ。」

「ありがとうございます。」

それと、レッド寮に戻るか。

「アーニー、本当によがつだ――..」

翔、頼むから泣かないでくれ。

一本当に良かつたんだな。十代、大丈夫か?」

激しい運動は控えてくれたんですね。

レッヂ寮に戻るとみんなから声をかけられた。
…………本当に俺は幸せ者だよ。

「やつと戻ってきたか、十代。全く俺がいなかつたらお前は死んでいたんだぞ！」

「ありがとうございます、万丈目。」

「万丈目サンダー！！！」

こんなときまでいたわるのかよ。まあ、別にいいか。

セラントスターは誰が来たのか?」

ああ
一人来た

.....

「ダークネスという男とターヤという女だ。ダークネスは天上院君

が、タニヤは三沢がデュエルして勝つた。』

「……………そうか。」

「……………本来と順番が違う。平行世界だから違うのか。

「これは預かつていた鍵だ。お前が持っている。』

「ああ、ありがとな。』

十代 side out

零 side

今は夜。さて、仕事だな。

「カイエン、今回の標的は?』

【『はい、名前は原田真理奈。この世界の遊城十代を殺そうとした女です。】

「……………やり過ぎた転生者っていうのはそいつか。ゴーズ、この世界の遊城十代って確か……。』

【『はい主人、転生者ですが彼は問題ありません。】

【『グルウ、グルウ！』

……お詫びとして後で会つておへか。…………エウセウスナルギオンダルギオンが見つけたようだな。

「…………何で私は退学になつたの?なんで?私はコベルから十代君を救おうとしただけなのに……ビハーツ!……!」

……全く、コマイシ頭おかしいんじゃねーのか?

「見つけたぜ!」

「誰?」

「テメエだな、原田真理奈つてこいつやつは!」

「セツだけど……。」

よし、お仕事開始だ。……と、その前に、

「テメエ、自分が何をしたか分かつてるのか?」

「…………私は十代君を救おうとしただけ。…………それなのに、それなのに……ビハーツになつたの!……!」

……ダメだ、救いよつがない程の馬鹿だな、こいつは。

「テメエは十代を殺そうとしたんだ。あいつは生きていろが下手いたら死んでいたんだぞ!……!」

「…………十代君が私の言つことを聞かないのが悪いんだよ。だ

から刺したの。それの何が悪いの！？

…………もついい。

「俺と『デュエル』してもうつぜ。俺が勝つたら俺の言つことを大人しく聞いてもらうぜ！」

「デュエルね、分かったよ。でも私が勝つんだからー。」

「「デュエルーー！」」

零 L P 4 0 0 0

真理奈 L P 4 0 0 0

「俺のターン、ドロー！俺は《豊穰のアルテミス》を召喚ーカードを四枚伏せて、ターンエンドー！」

零

モンスター 豊穰のアルテミス

魔法、罠 伏せ四枚

いろいろと仕事が立て込んでいるからさつと終わらすか。

「四枚も伏せてどうしたの？私のターン、ドローー！」

「カウンター罠発動！《強烈なはたきおとし》。そのドローしたカードを墓地に捨ててもうつぜ。そして、《豊穰のアルテミス》の効果発動！カウンター罠が発動した時、俺はデッキからカード一枚ドローする。」

「くつ、私は《処刑人 マキュラ》を召喚！」

処刑人 マキュラ ATK1600

それは禁止カードだろ！……でも、関係ねーな。

「カウンター罠発動！《キックバック》。モンスターの召喚、反転召喚を無効にし、手札に戻す！《豊穣のアルテミス》の効果によりデッキからカード一枚ドローする。」

「……………」うなつたら魔法カード、《王家の神殿》を発動！』

……………この二つのデッキには禁止カードしか入ってねーのかよ！

「カウンター罠発動！《マジック・ジャマー》。手札を一枚捨て、魔法力ードの発動を無効にし、破壊する！《豊穣のアルテミス》の効果によりデッキからカード一枚ドロー。」

「ちょっとー？卑怯よそんなのー！」

「禁止カードを使っているテメエが言つなー！」

【い】もつともです。】

【同じく。】

何で禁止カードを使っているんだこいつは？最低限のルールは守れよー。

「カウンター罠で相手のカードを無効にした時、このカードは手札から特殊召喚できる。来い、《冥王竜ヴァンダルギオン》！」

【グルルウウウウー！】

【冥王竜ヴァンダルギオン ATK2800

「《冥王竜ヴァンダルギオン》はカウンター罠で魔法カードを無効にして特殊召喚した時、相手に1500ポイントのダメージを与える！」

「さやあ！」

真理奈 LP 4000 2500

「…………私はカードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

真理奈

モンスター なし

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！ 罠カード発動！ 《トラップ・スタン》。このターンのエンドフェイズまでこのカード以外の罠カードの効果を無効にする。そして、バトル！ 《冥王竜ヴァンダルギオン》で直接攻撃！ 冥王葬送！！」

「さやあ――――！」

真理奈 LP 2500 0

……弱いな。

【御主人、この女はビリしますか?】

「ああ、こいつは「卑怯よ!」な、なんだよ急に!」

真理奈はこきなり声をあげた。

「何でそんなにカウンター罠が多いのー? そんなの卑怯よーーー!」のデュエルは無効だよーーー!」

「だから、禁止カードを使っているテメエが言つたーーー!」

もつとい、強行手段だ!

「…………こでよ、地獄の門!」

真理奈の後ろに門が現れ扉が開いた。扉が開いた門からは灼熱地獄が見える。

「!」「これはー?」

「原田真理奈、お前は灼熱地獄に行け! それがお前の受ける罰だ! !」

「地獄! ? なんで私が地獄に行かなきゃなんないのー私は悪いことは何もしてないんだよー!」

「…………ゴーズ! カイエン!」

【【まつ】】

「ちよ、ちよっとー?なにするの!?離してーー」

ゴーズが真理奈の右腕を、カイエンが真理奈の左腕を掴み、門の中に押し込んだ。

「嫌だよ!私は十代君を助けなきゃいけないのーー!」

「煩い!早く行け!ー!」

そう言つて門を締めた。…………やつと行つたか。

「二人とも、怪我はないな。」

【【まつ】】

「よし、あいつの所に行くぞー!」

零 side out

十代 side

その後、万丈目から詳しく聞いた。ダークネスの正体は明日香の兄である天上院吹雪だつた。そして、タニヤの時にはクロノスと多くの生徒達が決闘場を造らされていたみたいだ。……後で生徒達にはバイト代はきちんと支払われたらしい。夜になつて部屋に戻つた

ら、ゴベル達が出てきて抱きついてきた。

【…………でも、十代が無事で本当によかつたよ。】

【クリ~。】

「みんな、心配かけてごめんな。」

【明日から頑張りましょ~。】

【そうだな~】

「…………まだ、あまり無理はできないけどな。」

少しだるいが無理しなければ大丈夫だろう。

「……で、これは?」

【これは『スパークマン』の人形だね。】

【こちちはアップルパイですね。食べましょ~よ。】

「ううだな、俺にも食わせてくれよ。」

「ああ、いいぞ。…………つて~。」

声がしたので振り返ると窓の所に男と精靈が一人いた。

「誰だ~。」

「はじめまして、だな。俺は天川零だ。冥府の官吏者をやつてる。」
「こつらは俺の部下の、ゴーディーとカイエンだ。」

【はじめまして。】

【よろしくな。】

「……冥府の…………？」

「まあ、簡単にして地獄の門番だ。」ここに来た理由は二つだ、転生者の遊城十代。

「なつ、何故それを……？」

「気にすんな、知ってる」とだからな。

いや、そういう問題じゃないからな。

「まず一つは原田真理奈っていう女のことがだ。

【…………あの女はどうなったの。】

「俺が地獄に送ったよ。」

【…………自業自得だね。】

【…………自業自得ですよ。自業自得ですよ。】

【だな。】

「…………で、2つ目はと、カイエン。」

【はい御主人。十代さん、受け取つて下さい。】

「――、これは、デュエルディスク?」

「俺が丹精込めて作つたデュエルディスクだ!大事に使えよ!」

色は使つていたのと変わらないが今まで使つていたのよりは断然軽い。

「それには、オートシャッフル機能とオートサークル機能は着けておいたぜ。」

「本当か!?」

その2つがあるのは便利だ。

「まあ、海馬にその2つの機能のデータは渡してあるから後々出でくるぜ。」

「か、海馬に!?」

「ちなみにアテムとは知り合いだ。」

「あ、アテム!?!?」

「アッフルパイ食べないのか？」
「…………ちよ、ちよっと待て。知り合いがすいこにな……。

「アッフルパイ食べないのか？」

「…………半分持つていってくれ。」

「ああ、ありがたくもらつていくぜ。」

「…………衝撃が大きすぎで立ち直れない。」

「じゃ、俺達は帰るわ。」

「…………あ、ああ、分かった。」

【十代さん、お気をつけで。】

そう言つて零達は窓から帰つていった。

【クリ~。】

【なんか…………、嵐が去つていったような…………。】

【そり~だね~。】

【ゴベルさん?】

ゴベルを見ると眠たそうな顔をしていた。

「眠いのか?」

【…………うさん】

【ゴベルさん、無理が出てきましたね。】

【…………「めさ、…………でも…………。】

【こへり心配だからひいて六日間ずっと起きていたからだよ。】

【クニ~。】

「…………ゴベル。」

【…………何?】

「一緒に寝てたのか?」

その後、ゴベルはすぐに寝てしまった。…………ゴベルに無理をさせ
ちやつたな。

「…………じめんな、心配かけで。」

俺は一緒に寝て居るゴベルの頭を撫でながらひきつった。ゴベルの
寝顔は安らいでいた。

「…………俺も寝るか。」

十代 side out

第十八話　冥府の官吏者の制裁（後書き）

次も頑張つて書いていきます。

第十九話 満足（前書き）

第十九話です。今回は自重はしません。

第十九話 満足

十代 side

「…………アレを飲んでから体が楽になつたな。」

俺が目覚めてから数日後、ユベルは元気になつた。ちなみにアレとは、俺が目覚めた日の翌日に零が俺の部屋に来た時に、零が持つてきた仙薬のことだ。人間界の薬よりは効能は高いと言つていた。
……ただ、色が緑色で味は殺人的に苦かつたけど……。良薬は口に苦しさのことだな。零とはデュエルしたり、話もした。零は転生者ではないこと、アテムが知り合いの理由などを零は話してくれた。

【…………何かいろいろとありましたね。】

【十代、セブンスターズは後何人いるんだ?】

「ダークネスとターニャが出たからあと五人…………かもしれない。」

【かもしれない?】

「本来とは違う展開になつていてるから詳しくは俺でも分からない。」

【…………そつかい。】

【クリ~。】

「これからどうなるのかは分からない。…………ただ、やるしかないな。」

「どんなことがあつてもいいよつに準備はしておくか。」

【でも、無理は駄目ですよ。】

「分かつてゐるよ。」

翌日

今は体育の授業だが俺は見学している。あと数日したら運動しても大丈夫と言われた。

「…………にしても、零は強かつたな。」

【カウンター罠つて使い方次第で相手に何もさせずに勝てるんだね。】

零とデュエルした時、零が先行の時は全く手も足も出なかつた。モンスターを召喚したら破壊されるわ手札に戻されるわ、魔法や罠を使うと無効化されて《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚されわ、がら空きの状態で直接攻撃すると《ゴーズ》と《カイエン》を出されるわで散々な結果だつた。一番精神的につらかったのは《魔宮の賄賂》と《強烈なはつきおり》と《豊穣のアルテミス》のコンボだつた。まあ、俺が先行の時は《王宮のお触れ》や《トラップ・スタン》を使って何とか凌いだけど。

【午後から実技の授業だけど大丈夫かい?】

「…………そつにえばそうだつた。」

デッキ調整はしておいた。

午後の実技の授業の時間になった。内容はやりたい人とデュエルすること、要は自由にデュエルしていいってこと。…………で、俺の相手はと/or/、

「ちょっととももえー相手は私よー」

「ジユンコさん、相手は私がいたしますから下がつていてくださいましー」

「…………何故かジユンコとももえ。しかもどっちがやるか言い争つている。なんでだ?」

「…………面倒だから一人いつぺんに相手してやるよ。二人はタッグで初期ライフは8000、俺は4000でいいから。」

「 「えつーー?」

驚くなよ。

「いいわよ、絶対に倒してやるんだからー。」

「覚悟してくださいましー。」

「…………あー一人とも、俺を満足させてくれよー。」

「 「 「デュエル!!」」

十代 L P 4 0 0 0

ジュンコ、ももえ L P 8 0 0 0

十代 side out

明日香 side

十代は何を言つているのー? ジュンコとともにえと一緒に相手にするつて、しかも初期ライフポイントの差が2倍、…………でも、何故か十代ならできるつて思うのは私だけかしら? ちなみに最初のターンは全員攻撃できない。制裁タッグデュエルの時と同じことをするのね。だけど十代は1人。しかも順番はジュンコ ももえ 十代の順、十代が不利だけど大丈夫かしら?

「私のターン、ドロー! 私はフィールド魔法、《伝説の都 アトラントイース》を発動! これによって手札のフィールドの水属性モンス

ターのレベルは一つ下がり、攻撃力と守備力は200ポイントアップする。そして、《ギガ・ガガギゴ》を召喚！』

ギガ・ガガギゴLV5 4 ATK2450 2650

「そしてカード一枚伏せてターンエンドよ！」

ジュンコ、ももえ

モンスター ギガ・ガガギゴ

魔法、罠 伝説の都 アトランティス、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は永続魔法、《黒蛇病》を発動しますわ。私のスタンバイフェイズに互いのプレイヤーは200ポイントのダメージを受けます。次のスタンバイフェイズからは受けるダメージは倍になりますわ。そして、《デス・ウォンバット》を召喚します。《デス・ウォンバット》の効果により私は効果ダメージを受けません。カード一枚伏せてターンエンドですわ！」

デス・ウォンバットATK1600

ジュンコ、ももえ

モンスター ギガ・ガガギゴ、デス・ウォンバット

魔法、罠 黒蛇病、伝説の都 アトランティス、伏せ一枚

ジュンコとももえはいつも通りね。

「さてと、俺のターン、ドロー！魔法カード《サイクロン》を発動！《黒蛇病》を破壊させてもらうぜ！《E・HEROバブルマン》

を召喚！効果発動！『バブルマン』が召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードが存在しない場合、デッキからカードを一枚ドローする。そして魔法カード、『HERO-Sボンド』を発動！自分フィールドに『E・HERO』と名のつくモンスターが存在する時発動することができる。手札のレベル4以下の『E・HERO』と名のつくモンスターを一体特殊召喚する。『E・HEROオーション』と『E・HEROエアーマン』を特殊召喚！『エアーマン』の二つ目の効果発動！召喚、特殊召喚に成功した時、このカード以外の『E・HERO』と名のつくモンスターの数だけフィールドの魔法、罠カードを破壊する。ジュンコとともにえの伏せカードを一枚ずつ破壊！

「「えっ！？」

バブルマンLV4 3 ATK800 1000

オーシャンLV4 3 ATK1500 1700

エアーマンATK1800

十代の場に『エアーマン』が現れ、風をおこしジュンコとももえの伏せカードを破壊した。ジュンコの伏せカードは『炸裂装甲』、ももえの伏せカードは『魔法の筒』みたいね。

「魔法カード、『強欲な壺』を発動！デッキからカードを一枚ドローする。そして魔法カード、『融合』を発動！手札の『E・HERO-Hジマン』と『E・HEROスパークマン』を融合。来い！『E・HEROプラズマ・ヴァイズマン』！」

プラズマ・ヴァイズマンATK2600

「魔法カード、『命削りの宝札』を発動！手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする。五ターン後に全て捨てる。手札は0枚だから五枚ドロー！そして、『プラズマ・ヴァイズマン』の効果発動！手札を一枚捨て、相手フィールドに表側攻撃表示で存在するモンスター一体を破壊する。ちなみにこれは手札がある限り発動することができるぜ。一枚捨てて、ジュンコの『ギガ・ガガギゴ』を、もう一枚捨て、ももえの『デス・ウォンバット』を破壊！」

「そんな！？」

……これでジュンコ達のフィールドは『伝説の都 アトランティス』だけね。

「まだまだ行くぜ！俺は魔法カード、『ミラクル・フュージョン』を発動！フィールドの『E・HEROバブルマン』と墓地の『E・HEROスパークマン』をゲームから除外し融合。現れろ！『E・HEROアブソルートZero』！『E・HEROアブソルートZero』はフィールドに存在するこのカード以外の水属性モンスターの数×500ポイント攻撃力がアップする！」

アブソルートZero LV8 7 ATK2500 2700
3200

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター オーシャン、エアーマン、プラズマ・ヴァイズマン、アブソルートZero

魔法、罠　伏せ一枚

な、なによ、この展開力は。一ターンで融合モンスターを一體融合召喚するし、十代のフィールドのモンスターは四体で伏せカードは一枚。あ、あり得ないわよ！

「…………まあ、こんなところか。」

「うううとーーー何すんのよー！」

「……悪い、少しありすがたか？」

「これは少しではありますんわーーー！」

「…………十代、これが少しといつのはおかしいわよー

「私のターン、ドロー！私は《ジエノサイドキングサーモン》を召喚！」

ジエノサイドキングサーモンLV5 4 ATK2400 2600

「罠カード発動！《威嚇する咆哮》。このターンは攻撃はできないぜー。さらに水属性モンスターが増えたことにより《アブソルートZero》の攻撃力が上がる！」

アブソルートZero ATK3200 3700

ジュンコのフィールドに《ジエノサイドキングサーモン》が現れる
が空間が揺れた。

「わ、私はカードを一枚伏せてターンエンドよ……。」

ジュンコ、ももえ

モンスター ジュノサイドキングサーモン

魔法、罠 伝説の都 アトランティス、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《プロミネンズドラゴン》を召喚しますわ！」

プロミネンズドラゴンロード500

「そしてカードを一枚伏せてターンエンド！」の瞬間、《プロミネンズドラゴン》の効果が発動しますわ！エンドフェイズに相手ライフに500ポイントのダメージを与えます！」

十代 LP4000 3500

ジュンコ、ももえ

モンスター ジュノサイドキングサーモン、プロミネンズドラゴン

魔法、罠 伝説の都 アトランティス、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《E・HEROオーシャン》の効果発動！フィールドか墓地のE・HEROと名のつくモンスターを一体手札に戻すことができる。俺は墓地の《E・HEROエッジマン》を手札に戻す。速効魔法、《次元誘爆》を発動！融合モンスター一体を融合[デッキ]に戻し、互いのプレイヤーはゲームから除外されているモンスターを一体まで特殊召喚できる！」

ゲームから除外されているのは十代のモンスターだけね。

「俺は『E・HEROアブソルートZero』を融合デッキに戻し、ゲームから除外されている『E・HEROバブルマン』と『E・HEROスパークマン』を特殊召喚！さらに『アブソルートZero』の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

バブルマン ATK800 1000

スパークマン ATK1600

フィールドから離れただけである禁止カードの『サンダーボルト』と同じ効果が発動ですって！？……………そういえば私と戦った時は『サイバー・ブレイダー』だけだったわね。

「バトル！『プラズマ・ヴァイズマン』で直接攻撃！」

「させないわよ！罠カード発動！『聖なるバリアーミラーフォース』。」

「カウンター罠発動！『パラドックス・フュージョン』。自分のフィールドの融合モンスター一体をゲームから除外し、魔法、罠、モンスター効果の発動のいずれかを無効にし、破壊する！俺は『E・HEROプラズマ・ヴァイズマン』をゲームから除外し、『聖なるバリアーミラーフォース』の発動を無効にし、破壊する！この効果でゲームから除外した融合モンスターは次の俺のターンのエンドフェイズに俺のフィールドに戻る。」

「これってサクリファイス・エスケープ！？なんで十代はこんな

「…」

「続ぐぜ！『エアーマン』、『バブルマン』、『オーシャン』、『スパークマン』で直接攻撃！」

「させませんわよ！農カード発動！『ドレインシールド』。私は『エアーマン』の攻撃を無効にしその攻撃力分ライフを回復しますわ！」

ジュンコ、ももえ』 RP 8000 9800 5500

「俺はターンエンドだ！」

十代

モンスター バブルマン、オーシャン、スパークマン、エアーマン

魔法、罠 なし

ライフはジュンコとももえが有利なのは変わりないけど、フィールドは十代の方が有利ね。

「私のターン、ドロー！やつた！私は魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！手札を一枚捨てて、相手モンスターを全て破壊する！さらに『アトランティスの戦士』を召喚！」

アトランティスの戦士』 LV4 3 ATK1900 2100

「バトル！『アトランティスの戦士』で直接攻撃！」

「…」

十代 L P 3500 1400

「私はこれでターンエンドよー。」

ジュンコ、ももえ

モンスター アトランティスの戦士

魔法、罠 伝説の都 アトランティス

「私のターン、ドロー！私は『ボーガニア』を召喚！」

ボーガニア ATK1300

「バトル！『ボーガニア』で直接攻撃ですわ！」

「うわあ！」

十代 L P 1400 100

「これで勝ちは決まりですね、私はターンエンドですわ！」

ジュンコ、ももえ

モンスター アトランティスの戦士、ボーガニア

魔法、罠 伝説の都 アトランティス

十代のライフは残り100、次のももえのターンが来たら十代の負け。

「俺のターン、ドロー！……俺は魔法カード《魔法再生》を発動！墓地の《強欲な壺》を墓地から手札に加えて発動！『デッキからカードを一枚ドローする。そして魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！』

「……一枚目の《ミラクル・フュージョン》！？」

『強欲な壺』でそのカードを引いたの！？…………まさにミラクル奇跡ね。

「俺は墓地の《E・HEROスパークマン》と《沼地の魔神王》をゲームから除外し融合。来い！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》は墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイント攻撃力が上がる！墓地には四体のE・HEROがいる。さらに墓地の《E・HEROネクロ・ダークマン》の効果を発動！《ネクロ・ダークマン》が墓地に存在する時に一度だけ、手札のレベル5以上のE・HEROと名のつくモンスターを生け贋なしで召喚することができる。俺は《E・HEROヒッジマン》を召喚！」

エッジマンATK2600

シャイニング・フレア・ウイングマンATK2500 3700

『沼地の魔神王』と《E・HEROネクロ・ダークマン》は《E・HEROプラズマ・ヴァイズマン》の効果のコストの時に墓地に送ったのね。

「そして手札の永続魔法、《一族の結束》を発動！墓地のモンスターの元々の種族が一種類だけの場合、俺のフィールドのその種族の

モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！俺の墓地に存在するのは戦士族だけ、よつて『エッジマン』と『シャイニング・フレア・ウイングマン』の攻撃力はアップする！」

「二、攻撃力が800ポイントアップする永続魔法ですって！？」

ヒジマンATK2600
3400

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 3700 4500

成る程ね、このために『ミラクル・フュージョン』で『沼地の魔神王』を墓地から除外したのね。でも『一族の結束』なんてカードは見たことも聞いたこともないわ。他にも『パラドックス・フュージョン』とかもね。

「バトル！『エッジマン』で『ボーガー・アン』を攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

「わわわ、あんまりですわ！」

ジョンコ、ももえ LP5500 3400

「《シャイニング・フレア・ウイングマン》で《アトランティスの戦士》を攻撃！シャイニング・ショート！」

「うう……でもまだよー」

ジュンコ、ももえ LP3400 1000

「『シャイニング・フレア・ウイングマン』の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「え？…？」あやめ「…………」

ジュンゴ、ももえ「R1000 0

ま、まさか一人を相手にして勝つなんて……、夢じゃないわよね？

「…………まだ満足できないな。」

あれだけやってまだ物足りないの！？もう充分でしょ！？

明日香 sude out

第十九話 満足（後書き）

『魔法再生』は原作効果です。

番外編2 零の上司（前書き）

番外編です。甘いので気を付けてください。

十代 side

目が覚めた日の翌日、普通に授業を受けてきた。まだ体がだるいけど。……で、授業は早めに終わつたので部屋に戻つた。

「…………で、なんで零が俺の部屋にいるんだ？」

「細かいことは気にすんなよ。」

しばらくは零と話をしたりテュエルをした。（内容は第十九話を参考照）

「…………そりいえば体の方は大丈夫か？」

「まだ体がだるいんだ。」

「そりだと思つていい物持つてきたぜ。」いつを飲みな。」

そつ言つと零は白磁の瓶を取りだし俺の部屋にあるコップを持ってきて注いだ。が、

「ほんな緑色の飲み物なんか飲めるか！？」

「失礼だな、この仙薬は人間界よりも効能がいいんだぜ。体調不良なんかすぐ吹き飛ぶんだ。」

「…………本当に大丈夫なんだよな？」

「ああ、一気に飲めよ。その方が効能が早く出る。」

俺は覚悟を決めて一気に飲んだ。

「…………ただし、味が殺人的に苦いけどな。」

「うう……」

「こ、苦……」

しばらくはのたうち回ったが、体のだるいのが無くなつた。

「…………あ、ある意味すごいな、これは。」

「だろ、俺もこいつには世話になつていいんだ。俺が原因で改良されていいし、これを飲めば熊ものたうち回る代物だ。」

「酷いなそれは！そんな物を俺に飲ませたのかよ！……」

「これでもマシになつた方だぞ！これになるまで俺が実験台になつたんだよ！」

「わ、悪い……。」

「だいたい、あの時なんかよ……。」

十代 side out

零 side

「…………やつと書類が片付いた。」

【御主人、お疲れ様です。お茶をいれてきました。】

「ああ、悪いな。」

いろいろと仕事が溜まっていたがこの書類を出せば休める。

「さてと、これを出し乍「零、元氣にやつてるかい?」……あつち
から来たか。」

俺が書類を持って出ようとしたら一人の男が入ってきた。

【あ、彩輝さん。お久し振りです。】

「カイエン達も元気そうだね。」

この男は彩輝^{サイキ}、俺を冥府の官吏者にスカウトした張本人であり、俺の上司。さりに閻魔大王の長男である。

「…………で、なんか用が会つてここに来たんだよな。」

「まあ、君達の仕事の進捗率を見に来たのさ。それと「あなた～」おっと、どうしたんだい、**玻凜**？」
ハリン

「私を置いていくなんて酷いわよ！」

「『メソメソ』、どういってたシチューハーショノも君とだと楽し
いかりね。」

もう！あなたってば、いじわる！」

……で、彩輝に抱きついている女が玻凜。
彩輝の奥さんで地獄ではそれなりの権限は持つている。

「…………で、用がないんなら帰れよ！それ以前にいつまでイチャイチャしているつもりだ！このバカツブル！！」

「まあ、僕達の結婚は父上も認めてくれているんだし、気にしないにしない。」

「そういう意味じゃねえ——！——！」

あー、変なオーラが出て来やがった。

ドスンツ！！

「な、なんだ！？」

【し、主人。ヴァ、ヴァンダルギオンが、砂糖を吐いて、倒れ……
ぶはつ！】

【「コーズ！？ヴァンダルギオン！？しつかりして下さい！」】

……一人が砂糖を吐いて倒れやがった！！ヴァンダルギオンはで
かいから吐いた砂糖の量が多い！

【御主人、二人が砂糖を……ぶはつ！】

「カイエン！？」

カイエンまで砂糖を吐いて倒れやがった！！…………ヤバい、どん
どん甘くなつてきてやがる。

「零、甘くなつてきているんならこれを飲むといいよ。甘いのが一
瞬でなくなるから。」

「…………あんたらが甘くしたんだる。早く飲ませるー。」

俺は一気に飲んだ。

「うつー？苦！……てか、なんだよこの味は！？」

「うーん、ちょっと配分を間違えちゃったかしら」「

「…………おい、これってまさか…」

「玻凜が新しく作ったした仙薬だよ。どうかな?」

「不味いに決まってるだろーーー。」

ヤバい、甘いのと苦いのとがダブルで来やがった。

「何がいけなかつたのかしら?」

「もう、君は…………でも、そんな君を僕は愛してこるよ。」

「私もよ、あなた。」

【【【「ぶはつーーーー。】【】】

俺達はしばらくは仕事ができなくなつた。

零 side out

十代 side

「…………まあ、やつを話したことほんの一
部だ。」

「…………うつ、甘過ぎる。」

「ゴーズ達も砂糖を吐いて倒れるから大変なんだよ。」

た、大変つて言葉しか見つからない。

「でも、これをじつちの世界に持ってきて良かつたのか？」

「本来はいけないんだが、転生者云々で俺も仕事が忙しいし、対処させるお前の回復を早めただけだ。それとお前が知っている原作知識もある程度しか役に立たなくなるからな。」

「やつぱり俺のようなやつが原因か?」

「いいや、この世界は平行世界だから本来とは違つことが起きてもおかしくはない。」

「…………やうか。」

「まあ、お前はお前だし、お前だけの物語を作つてみな。俺は俺の仕事をするだけだ。」

そうだよな。

「零、仕事頑張れよ。」

「…………頑張りますよ、つと。」

十代 side out

番外編2 零の上司（後書き）

オリキャラの設定も追加しました。

第一十話 降臨する究極時械神（前書き）

第一十話です。いろいろとあって遅くなりました。

第一十話 降臨する究極時械神

ユベル side

この前の実技の授業の翌日、新たなセブンスターZが現れた。聞いた話だと現れたのはカミュー・ラつていうヴァンパイアの末裔らしい。カイザー・亮とクロノスが挑んだらしいが一人とも負けてしまい鍵は奪われ、二人は人形にされてしまった。

……で、今は十代と僕達はカミュー・ラの城の前にいる。

「一番厄介なのは『幻魔の扉』だ。」

【でも、対策はしてあるんでしょ。】

「ああ。」

【…………それよりさ、その『テッキで行くつもりかい？事故つたらどうするの？】

「大丈夫だ。絶対に勝つ！」

……まあ、十代ならなんとかなる、かな。

「よつこむ、私の屋敷へ！」

「お前がカミコーラか、俺とデュエルしろー。」

「ちょっと十代が怒っているね。…………まあ、なつていなかましだね。」

「いいわよ坊や。かかるべきなさいー！」

「「デュエルーー！」」

十代ＬＰ４０００
カミコーラＬＰ４０００

「先攻は坊やからでいいわよ。」

「じゃあ、遠慮なく、ドロー！俺は《時械巫女》を特殊召喚！」

時械巫女ＡＴＫ０

「《時械巫女》は自分フィールドにカードがない場合、手札から特殊召喚することができる。そして《時械巫女》は天使族モンスターを生け贋召喚するとき一体で二体分の生け贋とすることができます。俺は《時械巫女》を生け贋に《時械神ザフィオン》を召喚ー！」

時械神ザフィオンＡＴＫ０

「レベル10で攻撃力が0？」

ステータスだけで時械神を見ない方がいいよ。

「時械神を見ぐびらない方が身のためだぜ。俺はカードを四枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター 時械神ザフイオン

魔法、罠 伏せ四枚

「私のターン、ドロー！私は永続魔法、《ミイラの呼び声》を発動！私のフィールドにモンスターが存在しない場合、1ターンに一度だけ、手札からアンデッド族モンスターを一体特殊召喚できるわ。私は《ミイラの呼び声》の効果を発動し、手札から《ヴァンパイア・ロード》を特殊召喚！さらに私のフィールドの《ヴァンパイア・ロード》をゲームから除外し、《ヴァンパイア・ジェネシス》を特殊召喚！さらに《不死のワーウルフ》を召喚！」

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3000

不死のワーウルフ ATK1200

「これで私の勝ちよ！《ヴァンパイア・ジェネシス》で《時械神ザフィオン》を攻撃！ヘルビシャス・ブラット！」

《ヴァンパイア・ジェネシス》が《時械神ザフイオン》に攻撃をするが、《時械神ザフィオン》には傷ひとつついていない。

「な、なんで破壊されないのよー？」

「《時械神ザフィオン》は戦闘及びカード効果では破壊されず、表

側攻撃表示で存在する限りこのカードの戦闘によって発生する俺への戦闘ダメージは0になる。そして《時械神ザフィオン》の効果発動！このカードの戦闘終了後、相手の魔法、罠カードを全て持ち主のデッキに戻す！

「なつー、《ミイラの呼び声》がー？」

『ミイラの呼び声』は『神の居城 ヴァルハラ』のアンデッド版なんだよね。

「くっ、私はカードを一枚伏せてターンエンドよー。」

カミニューラ

モンスター ヴァンパイア・ジエネシス、不死のワーウルフ

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《時械神ザフィオン》はデッキに戻る。そして、《時械神ザフィオン》が自身の効果でデッキに戻った時、手札が五枚になるよつてドローするー！」

「何よそのインチキ効果はー？」

『幻魔の扉』っていうチートカードを使っているやつが何を言つているんだか。

「でも、これで坊やのフィールドはがら空きね。次の私のターンで終わりよ。」

「それはどうかな。俺は永続罠、『虚無機アイン』を発動ーさらだ

『虚無機アイン』を墓地に送り、永続罠、『無限機アイン・ソフ』を発動！』

十代のフィールドに鉄の輪が一つ出てきて、すぐにそれが2つになりの形になった。……自重はしないんだね。

「『虚無機アイン』は自分のフィールドにモンスターが存在しない場合、手札のレベル10のモンスターを一体を生け贅なしで召喚できるが攻撃力が0になる。フィールドに『時械神』が一体存在するとき、俺は他の『時械神』を召喚、反転召喚、特殊召喚することはできない。だが、『無限機アイン・ソフ』は攻撃力が0になることは『虚無機アイン』と同じだが、召喚制限効果を無効にして、手札から可能な限り特殊召喚することができる！俺は手札から『時械神サンダイオン』、『時械神ラフィオン』、『時械神ミチオン』、『時械神ラツィオン』を特殊召喚する！」

時械神サンダイオンATK4000 0

時械神ラフィオンATK0

時械神ミチオンATK0

時械神ラツィオンATK0

「さらに魔法カード『命削りの宝札』を発動！デッキからカードを五枚ドローし、5ターン後に全て墓地に捨てる。そして手札から『時械神カミオン』を特殊召喚！」

時械神カミオンATK0

1ターンで五体の時械神を特殊召喚するなんてさすがだね。

「バトル！」

「させないわよ！メインフェイズ終了時に罠カード発動！《威嚇する咆哮》。」

時械神達が攻撃しようとすると空間が揺れ、動きが止まった。

「…………なら俺はターンエンドだ。」

十代

モンスター 時械神サンダイオン、時械神ラフィオン、時械神ミチオン、時械神ラツイオン、時械神力ミオン

魔法、罠 無限械アイン・ソフ、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間、《時械神ラツイオン》の効果発動！相手がドローフェイズにカードをドローした時、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「くうう、…………だけど、いい気にならない方がいいわよー！」

カミューラ LP 4000 3000

やつぱり闇のデュエルだからダメージが実体化している。

「十代！何故一人で…………って、そ、そのモンスター達は！？」

「三沢、…………それより、いつからそーじたへ。」

「デュエルが始まってからソーリーいたよー。」

いつの間にか三沢がいた。…………僕、全然気づかなかつたんだけ
ど。

【早くからいたんですね。】

【…………俺は気づかなかつた。】

【…………クリ。】

三沢つて『光学迷彩アーマー』でも装備しているのかな？それとも
気配を消すのがうまいのかな？

「十代、気をつけろー。」

「分かつてるよ。『幻魔の扉』だろ。」

「やれやれ、分かつているのね。そこまで分かつているのなら使つ
てあげるわー私は魔法カード『幻魔の扉』を発動！』

「使わせるわけないだろ！カウンター罠発動！『封魔の呪印』。手
札の魔法カード一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし、破壊す
る。そして、その魔法カードはこのデュエルでは使用できない！』

幻魔の扉が現れて扉が開くがすぐに閉まり消えていった。

「…………」これでもう《幻魔の扉》は使えないな。」

「くつ、私はターンエンドよー。」

カミューラ

モンスター ヴァンパイア・ジェネシス、不死のワーウルフ

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに俺のフィールドの時
械神達はデッキに戻る。」

時械神達は光となつて消えていった。

「そして、《無限械アイン・ソフ》の効果で手札の《時械神メタイ
オン》、《時械神ハイロン》、《時械神サディオン》、《時械神ガ
ブリオン》を特殊召喚する！」

時械神メタイオンATK0

時械神ハイロンATK0

時械神サディオンATK0

時械神ガブリオンATK0

「バトル！《時械神メタイオン》で《ヴァンパイア・ジェネシス》
を攻撃！」

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。相手モンスターの攻撃を

無効にし、バトルフェイズを終了させる!」

『時械神メタイオン』が炎を出すが渦に吸い込まれた。

「俺はターンエンドだ!」

十代

モンスター 時械神メタイオン、時械神ハイロン、時械神サディオン、時械神ガブリオン

魔法、罠 無限械アイン・ソフ、伏せ一枚

「私のターン、ドロー!…………私は『ゴブリングンビ』を召喚!」

ゴブリングンビ ATK1100

「ターンエンド!」

カミューラ

モンスター ヴァンパイア・ジェネシス、不死のワーウルフ、ゴブリングンビ

魔法、罠 なし

ユベル side out

十代 side

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに俺のフィールドの時
械神達はデッキに戻る。」

俺のフィールドの時械神達は光となつて消えていった。

「ふふふ、坊やの手札はその一枚だけ、次の私のターンで本当に終
わりよ！」

「このターンで終わりだ。」

条件はすでに整っている。

「俺は《無限械アイン・ソフ》を墓地に送り、永続罠、《無限光ア
イン・ソフ・オウル》を発動！」

鉄の輪が2つから3つになつた。

「そして、《無限光アイン・ソフ・オウル》の効果発動！時械神が
十種類召喚されている時、このカードを墓地に送ることで、手札・
デッキ・墓地から《究極時械神セフィロン》を一体特殊召喚できる
！現れる！《究極時械神セフィロン》！」

究極時械神セフィロンATK4000

「攻撃力が4000ですって！？」

「《究極時械神セフィロン》の効果発動！1ターンに一度、手札・
デッキ・墓地の時械神を攻撃力4000にして、可能な限り特殊召
喚できる！現れる！《時械神メタイオン》、《時械神サディオン》、
《時械神力ミオン》、《時械神ラツィオン》！」

時械神メタイオンATK0 4000

時械神サディオンATK0 4000

時械神カニオンATK0 4000

時械神ラツィオンATK0 4000

「そして、『究極時械神セフィロン』の攻撃力はフィールドの時械神と名のつくモンスターの攻撃力の合計した数値になる！」

「…………と、いうことは！？」

究極時械神セフィロンATK4000 20000

「 「 「 攻撃力200000！？」」

いつの間にか明日香と万丈目も來ていたみたいだ。

「バトルだ！『究極時械神セフィロン』で『ヴァンパイア・ジエネシス』を攻撃！アカシック・ストーム！」

「きやあああああああ！！！」

『究極時械神セフィロン』が『ヴァンパイア・ジエネシス』に向かつて光を放つた。

カミューラのライフが0になり少しするとカミューラの後ろに幻魔の扉が現れた。

「なつ！何故扉が！？ち、ちょっと、た、助けて！きやああああああ！」

幻魔の扉にカミューラが吸い込まれていった。

翌日、カイザーとクロノスは元に戻つたみたいだ。それと余談だが、クロノスのレッド寮の生徒に対する態度が改まっていた。

十代 side out

第一十一話 黒蠍盗掘団参上ー（前書き）

第一十一話です。いろいろ話を飛ばしました。

第一十一話 黒蠍盗掘団参上！

十代 side

カミニコーラと戦った後、デュエルアカデミアが万丈目グループに買収されそうになつたり、ミイラがレッド寮の周りに現れて、俺がアビドス三世とデュエルしたり、何故か闇に墮ちていたタイタンが明日香とデュエルしたりいろいろあつた。あと、大徳寺先生が行方不明になつた。

で、鍵を持つている俺達は校長に呼び出された。何故か警察の人かいる。

「校長先生、その人は？」

「私は真暮マグレです。」

「皆さんも分かつてゐるように、既に鍵の一一つは奪われてしまいました。教員会議をし、警部の方に協力を要請しました。」

成る程、でも黒蠍盗掘団だよなこの真暮警部。

「皆さんほどのように鍵を所持していますか？」

「俺は首にかけている。」

「私もよ。」

「俺は、デッキケースの中に入れている。」

「俺もだ。」

上から万丈目、明日香、俺、三沢の順。
んだ。それで真暮警部の提案でそれぞれ保管場所を決めた。

で、夜。

「…………みんな、準備はいいか？」

【いいよ。】

【クリ。】

【大丈夫です。】

【いいぜ。】

さてと、黒蠍盗掘団の化けの皮を剥いでやるか。俺は寝ているふりをしている。

ガチャ。

来た！

「…………さてと、お頭の言つ通りならこの部屋の鍵は机の引き出

しの中だつたな。」

俺は毛布の中から見た。あいつは《逃げ足のチック》か。

(ゴベル、今だ!)

【分かつたよ! 『デモンズ・ローン』!】

「な、なんだこれは!?」

チックが引き出しに手をかけた瞬間、鎖が体に巻き付いた。

【みんな、今だよ!】

【おうおー】

【はーー】

【クリー】

「分かつた!」

ゴベル達は実体化し、俺は毛布をどけた。

「お、お前達は!?」

【クリー!】

【へへへへー】

【えーーー】

「こ、こ、こ、こ、こ、やめなーーー。」

ハネクリボーザ達はチックの顔や髪などを引っ張つてゐる。

「観念しろ、黒蠍盗団の逃げ足のチック。」

「な、なんで俺の名前を！？」

【お頭は《首領・ザルーグ》でしょ。】

「お頭の名前まで知つてるのかー！？」

驚いているな。

「ユベル、こいつを解放してくれ。」

【いいのかい？】

「ああ、鍵は『テッキース』の中にあるから大丈夫だ。」

「そういうとユベルは《デモンズ・チーン》を消した。チックはドアから逃げていった。」

【追いかけないんですか？】

「どうやら、みんな集まつているみたいだな。」

外に出ると翔や明日香、万丈田達は集まっていた。黒蠍盗団も集まっているみたいだ。いつの間にか万丈田が黒蠍盗団を炎り出したらしいな。

「十代、あなたの鍵は？」

「……ある。」

そう言つてテックキースから鍵を出した。

「みんなの鍵は？」

「奪われてしまったわ。」

「…………つまり、俺以外の鍵はあいつらが持つていると言つことか。」

「少年、一つ賭けをしよう。今から少年と私がデュエルをし、少年が勝つことができたら鍵は全て返そ。だが、私が勝つたら少年の鍵は貰い受ける。」

「いいのか？俺が勝つたら今までの苦労は水の泡だぜ？」

「構わない。」

「『デュエル!』」

十代 LP 4000
ザルーグ LP 4000

「私のターン、ドロー! 私は魔法カード《増援》を発動! デッキから《首領・ザルーグ》を手札に加える。そして召喚! ここはせっかくだから、バトルの場には我々自身が参上しよう。」

そう言つてザルーグはフィールドに歩いていった。

首領・ザルーグ ATK 1400

「我々自身?」

「あいつらはカードの精霊だ。」

「カードの精霊?」

「あいつらってことは、あの五人は人間ではなくカードの精霊ってこと?」

「まあ、そんなところだ。」

「私は魔法カード《強欲な壺》を発動! デッキからカードを一枚ドローする。そして魔法カード《黒蠍団召集》を発動! 自分フィールドに《首領・ザルーグ》が存在するとき手札の《黒蠍》と名のつくモンスターを全て特殊召喚する。ただし、同名カードは一枚だけだ。」

いくぞ野郎共！」

「「「「おつー」」「」」

ザルーキの言葉にメンバーが集まつていいく。初手から全員が揃つて
いるのか！？

「黒蠍一の力持ち！強力のゴーグー！」

「黒蠍の紅一点！茨のミーネー！」

「どんな罠でも朝飯前！罠外しのクリフ！」

「お宝いただきや後はトンズラ！逃げ足のチック！」

「「「「我ら、黒蠍盗壙団！..」」「」」

黒蠍　強力のゴーグ ATK1800

黒蠍　茨のミーネ ATK1000

黒蠍　罠外しのクリフ ATK1200

黒蠍　逃げ足のチック ATK1000

黒蠍盗壙団のメンバーが集まり決めポーズを決めた。

「私はカード一枚伏せてターンエンドー！」

ザルーキ

モンスター 首領・ザルーク、強力のゴーグ、茨のミーネ、罠外しのクリフ、逃げ足のチック

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROフォレストマン》を召喚！」

フォレストマンDEF2000

「カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「アニキが融合を使わない？」

「手札に融合が来ていらないみたいね。」

明日香の言つ通りなんだけど、次のターンで融合は手札に来る。

「私のターン、ドロー！私は罠カード《黒蠍コンビネーション》を発動！このカードは我々黒蠍盗団全員がフィールドに存在する時発動できる。我々はこのターン相手プレイヤーに直接攻撃することができる。だが直接攻撃する場合、与えるダメージは一体につき、400ポイントになる。」

「こいつら効果が厄介なんだよな。」

「バトル！少年に直接攻撃！私に続け！」

「……おつ……」「……」

「不味い！これを受けければ十代は2000ポイントのダメージだ！」

「…………手札の《速攻のかかし》の効果発動！相手が直接攻撃してきた時、手札のこのカードを墓地に送ることで攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させる！」

黒蠍盗掘団が攻撃してくるがそれは《速攻のかかし》に防がれた。

「くっ、私はカード一枚伏せてターンエンド！」

ザルーグ

モンスター 首領・ザルーグ、強力のゴーリグ、茨のミーネ、罷外
しのクリフ、逃げ足のチック

魔法、罷 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《E・HEROフレストマン》の効果発動！デッキから《融合》を手札に加えることができる。俺はデッキから《融合》を手札に加える。《E・HEROヒーロー》を召喚！《ヒーロー》の効果発動！このカード以外のHEROと名のつくモンスターの数だけフィールドの魔法、罷カードを破壊することができる。その伏せカードを破壊する。

「それにチューインして罷カード発動！《和睦の使者》。このターン、

「

我々は戦闘によつては破壊されず、戦闘によつて発生するダメージ
は〇になる。」

エアーマン ATK1800

エアーマンが破壊したカードは発動した《和睦の使者》だった。空
振りか！

「俺はターンエンド！」

十代

モンスター エアーマン、フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は永続魔法《連合軍》を発動！私のフィ
ールドの戦士族、魔法使い族一体につき、私のフィールドの戦士族
の攻撃力は2000ポイントアップする。我々は戦士族なので我々の
攻撃力は1000ポイントアップする！」

首領・ザルーグ ATK1400 2400

黒蟻 強力のゴーグ ATK1800 2800

黒蟻 茨のミーネ ATK1000 2000

黒蟻 罷外しのクリフ ATK1200 2200

黒蟻 逃げ足のチック ATK1000 2000

「バトル！《黒蠍》強力の《ゴーグ》で《ヒアーマン》を攻撃！」「

「ノリつきハンマー！」

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させる！」

「……私はターンエンド！」

ザルーカ

モンスター 首領・ザルーカ、強力の《ゴーグ》、茨のミーネ、罠外しのクリフ、逃げ足のチック

魔法、罠 連合軍

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROワイルドマン》と《E・HEROヒッジマン》を融合。来い！《E・HEROワイルド・ジャギーマン》！」

ワイルド・ジャギーマン ATK2600

「そして魔法カード《H ヒートハート》を発動！E・HEROと名のつくモンスターを一体選択し、選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、貫通能力を得る。俺は《E・HEROワイルド・ジャギーマン》を選択する！」

ワイルド・ジャギーマン ATK2600 3100

「あと、夜も遅いこのターンで終わらせる！」

「少年よ、このターンで終わらす」ことが出来るのか?」

「出来るぜ。《ワイルド・ジャギーマン》は相手モンスターに一回ずつ攻撃が出来るのやー。」

「「「「何だとー?」」」

「バトル!《ワイルド・ジャギーマン》で《黒蠍 強力のゴーグ》を攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサーー(ワン)ー。」

「ぐううー。」

ザルーキ LP 4000 3700

「次!《黒蠍 罷外しのクリフ》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー2(ツー)ー。」

「のわあー。」

ザルーキ LP 3700 2800

「まだまだ!《黒蠍 茨のミーネ》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー3(スリー)ー。」

「あやあー。」

ザルーキ LP 2800 1700

「さりにー!《黒蠍 逃げ足のチック》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー4(フォー)ー。」

「いつてえ！」

ザルーグ LP1700 600

「最後だ！《首領・ザルーグ》に攻撃！インフィニティ・エッジ・スライサー5（ファイブ）！」

サル - ケ L P 6 0 0 0

黒蠍盗掘団全員が《ワイルド・ジョーカー》に攻撃され、後ろに倒れた。

一
お、お頭

----- 我々の負けた
鍵は遡るべく

そこでサルバは鎧を返してくれた

「さてと、お前と野郎共、行くぞ！まだ見ぬお宝が我々を待つて

「我ら、黒蠍盜掘団……」

そう言つて黒蠍盗掘団は走り去つていつた。

Γ Γ Γ Γ Γ ° Γ Γ Γ Γ Γ

【 【 【 。】】】】

俺達はあまりにも突然のこと、少しの時間動くことができなかつた。

十代 side out

第一十一話 黒蠍盗掘団参上！（後書き）

次は学園祭編を投稿しようと思います。

第一十一話 学園祭前編 ～黒薔薇の魔女～（前書き）

第一十一話です。学園祭ですが「テュエルはありません。

第一十一話 学園祭前編 ～黒薔薇の魔女～

ゴベル si de

明日香の兄である吹雪が目覚めたらしい。吹雪によると、廃寮で闇のデュエルの研究中に闇に飲み込まれ、ダークネスになったと言っていた。さらに、それを指導していたのは今行方不明になっている大徳寺先生だと言っていた。

【なんで大徳寺先生は指導していたんだううね。】

「…………詳しく述べは思い出せない。」

ただ、その話を聞いて十代達が悲しそうな顔をしていた。
で、今は今度やる学園祭の準備をしている。

【で、なに作つてるの?】

「コスプレデュエルの衣装。」

【コスプレデュエルって、レッド寮の出し物だつたよな。】

【なんかそれつて面白やつですね。】

【クリ~。】

【十代、楽しそうだね。】

「何言つているんだ。学園祭を楽しむのは当たり前のことだぜ。」

成る程ね。

【といひでレイには「真っ先に連絡したぜー。」…… セスがだな。】

【クリ~。】

「やつ言ふば、氣になることがあつてな。」

【【氣になること?】】

「ああ、レイがお姉ちやんと一緒に行くね、って言っていたんだ。」

【レイさんにお姉さんつていましたか?】

「分からなーいが、イレギュラーかもな。」

【イレギュラーねえ。】

そう言つて僕は十代のベットに寝転がつた。

「…………あ、そうだ。コベル、この六枚のカードを渡しておくれ。」

【何これ?】

「気が付いたら持つていたんだ。俺が持つておくよコベルが使つた方がいいと思つてさ。」

【えつと、『HERO』ヴァージョンプレイト』、『E

HEROアースクエイカー》、《E HEROウイングサージ》、
《E HEROセイクリッド・ダーク》、《E HEROヒーティ
ド・ニア》、《E HEROプリントデーモン》、確かに僕が使つ
た方がいいカードだね。これって本来はあるの?】

「ない。俺も初めて見たカードだ。」

【そりなんだ。】

このカード達は属性融合E・HEROのE HERO版だね。《バ
ージエヴァポレイト》は《アブソルートZero》と同じ水属性、
《アースクエイカー》は《ガイア》と同じ地属性、《ウイングサー
ジ》は《Great TORNADO》と同じ風属性、《セイクリ
ッド・ダーク》は《エスクリダオ》と同じ闇属性、《ヒーティット・
エア》は《ノヴァマスター》と同じ炎属性、《プリントデーモン》
は《The シャイニング》と同じ光属性。素材はE・HEROと名
のつくモンスターとそれとの属性モンスター、条件は《ダーク・
フュージョン》または《超融合》の効果でしか特殊召喚出来ない。
……って《超融合》!?

【十代、《超融合》は余ってる?】

「あるけど。」

【ありがとう。】

そう言って十代は《超融合》のカードを渡してくれた。

ユベル side out

十代 side

学園祭当日の日。さてと楽しまないと損だな。

【ねえ、十代のコスプレって僕だよね?】

「見てわからないのか?」

【ユベルさんですね!】

【クリ~。】

【カラー・コントラクトまで使つてるのか。】

俺の今の格好はユベルだ。右目にはオレンジ、左目には緑のカラー・コントラクトを入れている。翼も作つたし、右が白、左が藍色のカツラも作つた。いや~、作るのに苦労したよ。カラー・コントラクトの色がなかなか見つからなかつたり、カツラの色づけも一人でやつたりしたから大変だった。

「あとと、楽しむとしますか!」

そう言つて部屋を出た。

【結構集まつてますね。】

【確かに。】

周りを見渡してみると、万丈田は《X-Y-Z ドラゴン・キャノン》、明日香は《ハーピィ・レディ》だ。

「万丈田、どうしたんだ？顔が赤いぞ。」

「う、うるせー……」

「ところで十代、あなたの格好は何のモンスターなの？」

「《ゴベル》だ。」

そう言って《ゴベル》のカードを見せた。

「十代、人間っぽいけど性別が分からんんだけど？」

「ゴベルは両方だ。」

「「両方！？」」

万丈田と明日香は何故か驚いている。

「とりあえず、誰かと『ゴエルス』…………あ、見つけた。レイー！」

辺りを見渡すとレイを見つけた。

「あー十代、遊びにきたよ！」

「待つてたぜ。」

「ねえ、それってユベル、だよね？」

「やうだ。作つたけど苦労したよ。…………で、レイ。後ろにいるのは？」

「ボクのお姉ちゃんだよ。」

「あ、あの、は、はじめまして。ユキつていいます。」

「ああ、よひしくな。ユキ。俺は十代でいいから。」

ユキつていうのか。…………なんか外に慣れていないって感じがするな。

「…………レイが『デュエルアカデミア』に来た時、レイに変なことした？」

「え？」

「お姉ちゃん！十代はなにも変な」としてないよ。…………十代ごめんね。お姉ちゃんつてば心配性なんだ。」

成る程、ユキはシステムって訳だな。

「変な」とはしない。

「…………よかつた。」

信用されて無かつたのかよ。

「…………まあ、とにかく楽しもつぜ。」

「うとー…………あれ、お姉ちゃん、どういいくの?」

「えつと、…………なんか買つてくるね。」

そう言つてユキは足早に離れていた。…………どうしたんだ?

十代 side out

ユキ side

おかしい。原作だとあんな格好じゃなかつた。確かに、『ひや』混ぜだつたような、…………どつしてなんだろう?

「わわー!」

【こつたついー】

考え方してたから誰かにぶつかつてしまつた。…………この人つて
!?

「ふ、ブラック・マジシャン・ガールだよね?」

【やうだけじ。あーそうだーあっちの方でなんか楽しそうなことが
あるから早く行かないとー】

「あ、あの、ちょっと待つて！」

【なに?】

「…………ちょっと頼みたいことがあるんだけど。いい？」

【うーーーん、それって私にしか出来ないこと?】

「うん。」

【分かった！で、何をすればいいの?】

「それはね…………。」

レイには可哀想だけど、これやるしかない。

ユキ side out

レイside

お姉ちゃんがなにか黙つてぐるりと見てたけど、本当にじりつした
んだるう〜。

【二人とも、久しぶりだね。】

【…久しぶり。】

【あそびにきたよ〜!】

「レイ、一人も連れてきたのか？」

「うん。エクスが行きたいって駄々こねるから仕方なく……。」

【…私が面倒見るからマスターは心配しなくても大丈夫。】

「いつもごめんね、ヴァルキリア。」

【あれ世のいへーーー！ねえ、世やへーーー！世やへーーー！】

〔 静かにして。〕

ガシツ！

【上篇】

[.....]。

三八三・ハシ

「いたいいたいいたいいたいいたい！」あたまが、あたまがわれる！

【…………あ、アイアンクローラーですよね？】

【雪舟からやつしののかよー】

【…………く、クリ～。】

……ねえ、ヴァルキリアって魔法使い族だよね。なんでアイア
ンクローで頭がミシッとかじりの？この前なんかチョークスリーパー
ーとかやついたし。

【武道派だね。】

「あ、やうだな。レイ、それから止めたらどうだ？」

「こや、…………やひらしたら止める、と黙つよ。」

【…あまり騒こじや駄目だよ。それと私はおばさんじやないから。
分かった？】

【「うう、せ～～～。】

エクスの頭ついでどうなつてるんだい？中じやなくて外だよ。

「一人はこつもこんな感じなのか？」

「たまにだよ。こつもは仲がいいんだ。」

「人は一緒に遊んだりしてるんだけどね。」

「ボク、ちょっとお姉ちゃんの」と探してくるよ。」

「髪をつけたな。」

【あそばないの～？】

【……私達もいくよ。】

「お姉ちゃんさー..ビリーハーるのーー!..?」

ボク達はお姉ちゃんのことを探している。

「ビリーハー行つたんだわ!..お姉ちゃんつて男性恐怖症なんだよね。
変な人になにかされてないかな?」

【…十代さんと普通に話してましたよ。】

【わ~だよ~。】

……………そうだった!何で十代と話してて大丈夫だったのか気に
なるけど今は置いておけ!..

【あー..レー~, あれユキだよ~。】

「えつー!..?」

本当にお姉ちゃんだ。でも、誰かと話している。

【…あれば…】

「知ってるの？」

【…「ラック・マジシャン・ガールです。でも、何でここ?】

「ふ、ブラック・マジシャン・ガール!…?」

【レイ、じえおつきいよ~。】

「…………レイなの?」

しまつた!…ばれちゃつた!

「レイ!…何でここ?」

「お姉ちゃん!…何でここ?…それに、隣にいるのってブラック・マジシャン・ガールだよね?」

「…………うん。」

本物なんだ。…………つて違う違う!…今はそんなこと聞いていい場合じゃない!…

「…………レイ。レイに一つ言つておかなきやいけないことがあるの。」

「急にビックリしたのお姉ちゃん?」

「私にはね、…………前世の記憶があるの。」

…………え？

「そ、それって、ビ、ビ、ビックリ」と。

「私はね、本来はこの世界にはいないの。」

「え？え？本来は～この世界？前世？…………一体ビックリヒー～？」

【準備出来たよ。】

「……………レイ、今までありがとうございましたね。」

と、お姉ちゃんはそうしてブラック・マジシャン・ガールと一緒に消えていった。

【ユキがきた～！？】

【…マスター、マスター！】

「えっ！って、あれ？あ、お姉ちゃんはビニー～？ブラック・マジシャン・ガールもいない！？」

【…近くにほいません。】

「お姉ちゃんが言つてたことってビックリことなんだろう？…………もう、いろんなことがあって何がなんだか分かんない！」

【やうだ！レイ、わからんないならじゅうだいにきなばいいんだよ～。】

【……マスター、十代さんなら何か知つてると悪いです。】

「本当……？」でも、なんで十代が知つてると悪いの？

【勘です。】

勘つて……でも、分かんないから十代に聞いた方がいいかも
しない。

レイ side out

十代 side

「あー、疲れた。」

【まじめだい。】

俺は何回かデュエルをして、今は自分の部屋で休憩中。

【まだまだ盛り上がりますね。】

【そうだね。】

「…………そりこえば、レイとコキはまだ戻ってきてないのか？」

【そりこえば、二人とも見かけてないね。】

【……行つたんだ？…………何か嫌な予感がする。】

エヘンエヘン。

「十代、こるー?」たら開けてー?」

【レイさんです。】

レイか、でも何か急いでいるみたいだな。

ガチャ。

「十代ーあの、えっとーお、お姉ちゃんがーあ、あのねー」

「レイ、まずは落ち着けー何があつたー?」

「うーん……。」

「お姉ちゃんがボク達の田の前で消えちゃつたのー。」

「レイ、何があつたー?」

「消えたー?」

【それってビリビリの意味だー?】

「…………あとね、何か変なーと書いたの。」

【変なーと、ですか?】

変なこと、なんだそれは？

「前世の記憶とか、本来はこの世界にはいないとか、そう言つていつたの。十代なら何か知つてると思つて、ヴァルキリアが。」

【……そうです。何か知つてますか？】

「……」

「まさか、コキは転生者か！？」

「ね、ねえ、……何か知つてるの？」

【……何か知つてるのですか？】

【じゅうだい、なにかしつてるの～？】

「……」「うしけないな。

「…………知つてる。」

「本当ー？教えてーお願いーーー。」

「ま、まずは落ち着けー。」

「「」あざ。」「

……とは言つたものの何から話せばいいんだ？

【僕が話せつか?】

「…………ああ、任せる。」

【分かったよ。レイ、これから話すことは冗談じゃないから良く聞いてね。…………その前に過程から聞く、それとも結論から聞く?】

「う~んと、結論から。」

【結論からね、ユキは転生者なんだ。】

「て、転生者って何?」

【それはね。】

その後ユベルはレイ達に説明をした。ちなみに俺のことは話していない。

【まあ、ざつとこんなところかな。】

「…………そなんだ。あと、言い忘れたんだけど、お姉ちゃんには不思議な力があるんだ。」

【不思議な力?】

「デュエルティスクでデュエルすると、何故かモンスターが実体化したりするんだ。でも、ティスクを使わなければ大丈夫なんだけど。それと、見たことがないカードも持っているの。」

【ユキは転生者であり、サイバーテクノリストでもあるのか。】

それと見たことがないカードは、シンクロモンスターとかだな。

「その不思議な力でお父さんや友達が怪我をしたんだ。お姉ちゃんはその事があつてみんなから嫌われているの。」

まるで、5D'sの最初のほうのアキだな。

【ビリあるんだ?】

「…………コキを探ねう。なんか嫌な予感がする。」

やつこつて部屋を出ようとした時だった。

「うわあ——————！」

「あやあ——————！」

…………へんつ、遅かったか！

【クリー?】

【な、何がおこったんですか！?】

【…外が騒がしい。】

「みんな、行くぞー！」

【十代、デッキ忘れちや駄目だよーはいこれー】

「分かつてるー！」

俺達が外に出ると騒然としていた。誰がデュエルをしているみたいだが、人が少なくなつていた。

「明日香、何があつたんだ！？」

「十代！あなた、どこに行つていたのよ！」

「部屋で休んでいただけなんだけど、これは一体どうなつてるんだ？」

「そ、それが、いきなり黒薔薇の魔女つて名のる人が現れて、デュエルしたのだけど、ソリッドビジュンで何故か対戦相手が大怪我したりしているのよ！一人正体を知つている子がいたのだけれどその子も怪我しているのよ。」

不味いな、すでに被害者が出ているのか。

【…マスター、あの人は。】

「…………十代。…………あれ、お姉ちゃんだよ。」

「…………そうか。」

…………厄介だな。ユキはどうしてこんなことを？それと、ユキはアキが黒薔薇の魔女になつている時の仮面をつけている。あと衣装も似ている。

「仕方ない、俺が田を覚ませせてやる。」

「十代！危ないよ！」

「レイ、俺は大丈夫。心配するな。」

「…………お願い、…………お姉ちゃんを止めて。」

…………覚悟しないとな。コキの心の傷は相当深い。生半可な覚悟じゃ一いつがやられる。

「次の相手はあなたね。」

「ああ、田を覚ませせてやる。黒薔薇の魔女、いや、コキー。」

「な、なんで！？」

「別にいいだろ。それよりデュエルしないのか？」

「ええ、いいわよ。」

「「デュエル！」」

十代 LP 4000
コキ LP 4000

十代 side out

第一十一話 学園祭前編 ～黒薔薇の魔女～（後書き）

オリカはじ〇〇さんの提供です。デュエルは次の話でやります。

第一二三話 学園祭中編 ～星屑の竜と黒薔薇の童～（前書き）

第一二三話です。諸事情により十代がシンクロを使います。もう一度いいます、十代がシンクロを使います。ご了承下さい。

第一二三話 学園祭中編 ～星屑の竜と黒薔薇の童～

十代 side

「「「テュエル！」」

十代 LP 4000
ユキ LP 4000

俺とユキはレッド寮から離れてテュエルをすることにした。レイ達
はいる。翔に隼人に明日香、万丈目に吹雪もいる。さて、どうやつ
て…………ん？あれ、このテックキは…………。

(ユベル。)

【どうしたんだい？】

(…………俺に渡したテックキ、間違えただる。)

【え？】

(見てみるよ、この手札を！)

手札には『スピード・ウォーリア』、『エンジェル・リフト』、
『チューニング・ソーター』などHEROテックキには入っていない
カードがあった。そういえば、一応作ってHEROテックキの隣に
このテックキを置いていたんだよね…………。半分は俺のせいか！

【十代、ごめん。】

(…………仕方ないから)のままやるしかない。)

「私のターン、ドロー！私は《ロードポイズン》を呪喚！」

ロードポイズン ATK1500

「魔法カード《おろかな埋葬》を発動！デッキから《フェニキシア・シード》を墓地に送る。永続魔法、《世界樹》を発動！そしてターンエンディュー！」

ユキ

モンスター ロードポイズン

魔法、罠 世界樹

さて、俺のターンだな。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天使の施し》を発動！デッキからカードを三枚ドローし、一枚捨てる。そして、《スピード・ウォリアー》を召喚！」

スピード・ウォリアー ATK900

「す、《スピード・ウォリアー》！？」

ユキが驚いている。まあ、無理もないか。このカードは本来この世界にはないからな。

「バトル！《スピード・ウォリアー》で《ロードポイズン》を攻撃！ソニック・エッジ！」

「アニキ、《スピード・ウォリアー》の方が攻撃力が低いのになんで攻撃するの！？」

「《スピード・ウォリアー》の効果発動！召喚に成功したターンのみ、このカードの元々の攻撃力をエンドフェイズまで倍にすることができる！」

スピード・ウォリアー ATK900 1800

《スピード・ウォリアー》が《ロードポイズン》に向かって走り出し、回し蹴りを放つて破壊した。

ユキルP4000 3700

「うひ、でもこの瞬間、《ロードポイズン》の効果発動！このカードが戦闘によつて破壊された時、墓地から《ロードポイズン》以外の植物族モンスターを一体特殊召喚できる！墓地から《フェニキアン・シード》を特殊召喚！そして、《世界樹》はフィールドの植物族モンスターが破壊された時、このカードにフラワーカウンター（以下FC）を一つのせる。」

フェニキアン・シード ATK300

世界樹 FC0 1

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

スピード・ウォリアー ATK1800 900

十代

モンスター スピード・ウォリアー

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《フェニキシアン・シード》の効果発動！このカードをリリースし、手札の《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》を特殊召喚する！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス ATK2200

「リリース？」

「生け贋つてことだな。」

「バトル！《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》で《スピード・ウォリアー》を攻撃！フレイム・ペタル！」

「罠カード発動！《ガード・ブロック》。この戦闘によつて発生する戦闘ダメージを0にし、デッキからカード一枚ドローする。」

《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の攻撃によつて《スピード・ウォリアー》が破壊されるが俺にはどかなかつた。

「だけどこの瞬間、《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果発動！このカードが攻撃したダメージステップ終了時、このカードを破壊する。そして、このカードが破壊された時、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！スキヤツタ・フレイ

「うわあ――――――」

十代 LP4000 3200

くつ、ダメージが実体化しているのか！衣装が所々焦げている。だけど、カラー・コンタクトは外しておいてよかつた。

「な、なんなんだ、あれは！？」

「服がなんで焦げているの！？」

「…………お姉ちゃん。」

「《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》が破壊されたことにより、《世界樹》にFCがのる。」

世界樹 FC1 2

「私はカード一枚伏せてターンエンド！そして墓地の《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果発動！墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外することでこのカードを表側守備表示で特殊召喚する。私は《フェニキシアン・シード》をゲームから除外し、特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリス DEF 0

「エンドフェイズに永続罠発動！《エンジェル・リフト》。自分の墓地のレベル2以下のモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する。

『チューニング・サポーター』を特殊召喚!』

「『チューニング・サポーター』も!?」

チューニング・サポーター ATK100

ユキ

モンスター フュニキシアン・クラスター・アマリリスト

魔法、罠 世界樹 (FC2)、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー!」

まだ動かない方がいいな。シンクロ召喚を使って来るかもしねない
からな。

「カードを一枚伏せてターンエンド!」

十代

モンスター チューニング・サポーター

魔法、罠 エンジェル・リフト、伏せ一枚

「(なんで十代が『スピード・ウォーリア』や『チューニング・
サポーター』を持っているの?ここはGXの世界のはずなのに!?)
……私のターン、ドロー!私はチューナーモンスター、『夜薔薇
の騎士』を召喚!」

「チューナーモンスター！？」

「シンクロ召喚か！」

「（えつ、何でシンクロ召喚やチューナーを知っているの？）……
……《夜薔薇の騎士》の効果発動！このカードが召喚に成功した時、
手札のレベル4以下の植物族モンスターを一体特殊召喚できる！《
キラー・トマト》を特殊召喚！」

キラー・トマト ATK1400

………… アイツが来る。

「レベル4の《キラー・トマト》にレベル3の《夜薔薇の騎士》を
チューニング！」

《夜薔薇の騎士》が三つの光の輪になり、その中を《キラー・トマ
ト》が通過する。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け！」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚！現れよ！《ブラック・ローズ・ドラゴン》！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！シンクロ召喚に成
功した時、フィールド上のカードを全て破壊する」ことができる…」

「させない！手札の《エフェクト・ヴォーラー》の効果発動！このカードを墓地に送り、相手モンスター一体の効果をエンドフェイズまで無効にする！俺は《ブラック・ローズ・ドラゴン》を選択する！」

【……十代さん、なんで私がこっちのデッキに入っているんですか！？ひどいですよ！！】

(…………悪い。)

【今、何か変な間があつましたよね！？】

(文句は後にしてくれー！こいつのデッキを使つとは思つてなかつたんだよ！）

【ゴベルさんのせいですね！】

【何で僕！？七割は十代のせいでしょう！】

(何で俺が七割！？)

【三割は認めるのか。】

【クリ。】

「（《Hフュクト・ヴューラー》もあるの！？本当に一体どうなつているの？）…………《フニキシアン・クラスター・アマリリス》を攻撃表示に変更。」

「私は《世界樹》の効果発動！」このカードにのつているFCJを2つ取り除くことで、フィールド上のカードを一枚破壊する！私は右の伏せカードを破壊！」

世界樹 FC2 0

「罷カード発動！《威嚇する咆哮》。相手はこのターン攻撃出来ない！」

《世界樹》の効果で伏せカードが破壊されそうになるが発動し、空間が揺れた。

「（FCJが無駄になつた。）……私は魔法カード《フレグランス・ストーム》を発動！フィールド上の植物族モンスターを一体破壊し、私はデッキからカード一枚ドローする。そして、ドローしたカードが植物族モンスターの場合、お互いに確認し、私はもう一枚ドローすることができる。私は《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》を破壊しドロー！……ドローしたのは植物族モンスターではない。だけど《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果発動！このカードが破壊された時、相手に800ポイントのダメージを与える！」

「ぐわあ――――！」

十代 LP3200 2400

くそ、翼がなくなつた！……だけど不思議と体のダメージは少ない。

「《フニキシアン・クラスター・アマリリス》が破壊されたことにより、《世界樹》にFC0がのる。」

世界樹 FC0 1

「私はターンエンド！そして、《フニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果発動！墓地の《キラー・トマト》をゲームから除外し、表側守備表示で特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0

ユキ

モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン、フニキシアン・クラスター・アマリリス

魔法、罠 世界樹 (FC1)、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は手札の《ボルト・ヘッジホック》を墓地に送り、《クイック・シンクロロン》を特殊召喚！」

クイック・シンクロロンATK700

「ぐ、《クイック・シンクロロン》！？それに《ボルト・ヘッジホック》！？どうしてそのカードを持つているの？」

「…………貰った。」

「嘘じやないからなー本当のことだからなー！」

「《クイック・シンクロロン》ってことは、シンクロ召喚をするのね

？」

「「「十代（アニキ）がシンクロ召喚をするの（するのか）！？」

「」

【…………後で大変なことになるな。】

【…………クリ～。】

ハネクリボーターボシンクロン！何で一人は遠い目をしてるんだ！？

「…………とにかく、《チューニング・サポーター》の効果発動！シンクロ召喚をする時、このカードはレベル2として扱うことが出来る。」

チューニング・サポーターLV1 2

「レベル2として扱う《チューニング・サポーター》にレベル5の《クイック・シンクロン》をチューニング！」

《クイック・シンクロン》が5つの光の輪になり、その中を《チューニング・サポーター》が通過する。

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！」

2 + 5 = 7

「シンクロ召喚！燃え上がり、《ニトロ・ウォリアー》！」

「ニトロ・ウォリアー ATK2800

「《チューニング・サポーター》の効果発動！このカードがシンク口素材として墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドローする。そして装備魔法^{（ジャンク・アタック）}を発動！《ニトロ・ウォリアー》に装備する！そしてバトル！《ニトロ・ウォリアー》で《ブラック・ローズ・ドラゴン》を攻撃！ダイナマイト・ナックル！ダメージステップ時に《ニトロ・ウォリアー》の効果発動！自分のターンに自分が魔法カードを発動した時、そのターンに一度だけ攻撃力が1000ポイントアップする！」

「うつー！」
ニトロ・ウォリアー ATK2800 3800

「きやあー！」

ユキルP3700 2300

「装備魔法、《ジャンク・アタック》の効果発動！装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「きやあー！」

ユキルP2300 1100

「さりと、《ニトロ・ウォリアー》は相手モンスターを戦闘によって破壊した時、表側守備表示で存在する相手モンスターを攻撃表示にし、そのモンスターに続けて攻撃することが出来る。俺は《フェニキアン・クラスター・アマリリス》を攻撃表示に変更させる。ダイナマイト・インパクト！」

フュニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0 ATK2200

「《二トロ・ウォリアー》で《フュニキシアン・クラスター・アマリリス》に攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「二Jの攻撃が通れば十代の勝ちだ！」

「罠カード発動！《棘の壁》。植物族モンスターが攻撃された時に発動することが出来る。相手フィールドに存在する攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

《二トロ・ウォリアー》が《フュニキシアン・クラスター・アマリリス》に向かつて拳をつき出しが、《棘の壁》に阻まれて破壊された。

「俺は《マッシュブ・ウォリアー》を召喚し、ターンエンド！」

マッシュブ・ウォリアー ATK600

十代

モンスター マッシュブ・ウォリアー

魔法、罠 伏せ一枚

十代 side out

ユベル side

この「ゴベル」は一体どうなるんだろ？…………僕は十代との約束があるから手は出せない。あれ？何であそこに『ブラック・マジシャン・ガール』がいるんだろう？しかも何かをしているみたいだ。

(ゴベル、どうしたんだ？)

【ちょっと気になることがあつてね。ハネクリボー、着いてきて。】

【クロー。】

【うへん、何かうまくいかないな、どうしてだろ？】

本当に何をしてこられるの？

【ねえ、何をしているんだい？】

【だ、誰ー？】

【誰でもいいと思つたゞね。それより何をしているんだい？】

【…………言わなきゃ駄目？】

【駄目。】

僕はそれを聞いたとしているんだよ。

【……………分かったよ、実はね、頼まれたんだ。あまり被害が出ない
みたいに魔法を使っているんだけど何かうまくいかなくてね。】

【それって、ユキに頼まれたのかい？】

【ユキ？えっと、あの子だよね？ そうだよ。】

【何でユキはそんなことを頼んだの？】

【……………確かに、ううんと、そうだ！ 何かね、レイが私のこと
を嫌いになるようにしたいんだ、って言ってたよ。レイが私のこと
を嫌いになれば私がいなくなつても大丈夫、とも言つてたような
気がする。】

【……………成る程ね。】

【クリ？】

ユキが何をしようとしているのが分かつた。……………十代、負
けちゃ駄目だからね。ユキを救えるのは十代だけなんだから。

ユベル side out

レイ side

「でも、十代なしきつとお姉ちゃんを止めてくれる。」

「私のターン、ドロー！私は《ブルー・ローズ・ドラゴン》を召喚！」

ブルー・ローズ・ドラゴン ATK1600

「バトル！《フェニキアン・クラスター・アマリリス》で《マッシュ・ウォリアー》を攻撃！」

「《マッシュ・ウォリアー》は一ターンに一度だけ、戦闘によつては破壊されない。そしてこのカードの戦闘によつて発生するダメージは0になる。」

「でも、《フュニキション・クラスター・アマリリス》は攻撃した場合、破壊される。そして、このカードが破壊された時、相手に800ポイントのダメージを与える！」

「墓地の《ダメージ・イーター》の効果発動！効果ダメージが発生した時、墓地のこのカードをゲームから除外し、その効果はその数值分ライフを回復する効果になる！」

《フェニキション・クラスター・アマリリス》が爆発し、爆風が十代に向かってくるが、十代の前に《ダメージ・イーター》が現れ、爆風を食べてしまった。

「《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》が破壊されたこと
で《世界樹》にFC1がのる。」

世界樹 FC1 2

「《ブルー・ローズ・ドラゴン》で《マッシュブ・ウォリアー》に攻
撃！」

『ブルー・ローズ・ドラゴン』の攻撃によって《マッシュブ・ウォリ
アーリス》が破壊されるが十代にダメージはない。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！そして、墓地の《ロード
ポイズン》をゲームから除外し、《フェニキシアン・クラスター・
アマリリス》を特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0

「エンドフェイズに罠カード発動！《砂塵の大龍巻》。《世界樹》
を破壊！カードは手札がないからセットは出来ない。」

お姉ちゃんの場の《世界樹》が破壊された。

ユキ

モンスター ブルー・ローズ・ドラゴン、フェニキシアン・クラ
スター・アマリリス

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！魔法カード《命削りの宝札》を発動！手札
が五枚になるようにドローし、五ターン後に全て墓地に送る。俺の

手札は0、よつて五枚ドロー！」

手札が0枚でそのカードを使うの！？どんな引きをしているの？

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札を一枚墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する。デッキから《チューニング・サポーター》を特殊召喚！そしてチューナーモンスター、《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

チューニング・サポーター ATK100

デブリ・ドラゴン ATK1000

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動！召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを一体、効果を無効化して特殊召喚する。墓地のもう一体の《チューニング・サポーター》を特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK100

「さりに、墓地の《ボルト・ヘッジホック》の効果発動！自分の場にチューナーが存在する時、墓地から特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、フィールドから離れた時、ゲームから除外される。」

ボルト・ヘッジホック ATK800

「レベル1の《チューニング・サポーター》一体とレベル2の《ボルト・ヘッジホック》にレベル4の《デブリ・ドラゴン》をチューニング！」

『デブリ・ドラゴン』が4つの光の輪になり、その中を一体の『チユーニング・サポーター』と『ボルト・ヘッジホック』が通過する。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！」

1 + 1 + 2 + 4 = 8

「シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

【きらめいてる〜】

【…綺麗。】

『スターダスト・ドラゴン』にみんなが見とれている、本当に綺麗。

「す、『スターダスト・ドラゴン』…」

「『チユーニング・サポーター』の効果により俺は一枚ドローする。」

「ちょっと待つて十代、効果が無効化されているのなら一枚しかドローできないんじゃ……。」

「効果を無効化するのはあくまでフィールドに存在する時だ。『チユーニング・サポーター』の効果は墓地で発動するから無効化されずに俺は一枚ドローできる。」

「ちょっと難しいな。ということは効果を無効化された『ク

リッター》も墓地に送られたら効果は発動するんだ。

「バトル！《スターダスト・ドラゴン》で《ブルー・ローズ・ドラゴン》を攻撃！シュー・ティング・ソニック！」

《スター・ダスト・ドラゴン》が《ブルー・ローズ・ドラゴン》を攻撃し、破壊した。

ユキ LP1100 200

「でもこの瞬間、《ブルー・ローズ・ドラゴン》の効果発動！このモンスターが戦闘によつて破壊された時、墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》を特殊召喚することができる…」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

十代
モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法、罠 伏せ一枚

レイ side out

第一二三話 學園祭中編 ～黒魔の竜と黒薔薇の竜～（後書き）

いいで、一回区切ります。

第一十四話 学園祭後編 ～姉妹の絆～（前書き）

第一十四話です。すゝくグダグダでネタがあります。

第一十四話 学園祭後編 ～姉妹の絆～

十代 side

十代 モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法、罠 伏せ一枚

ユキ
モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン、フェニキアン・クラスター・アマリリス

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ テッキからカードを一枚ドローする。手札を一枚墓地に送り魔法カード『力ード・フリッパー』を発動！ 相手モンスター全ての表示形式を変更する！」

何もない空間から糸が出てきて、《スターダスト・ドラゴン》を縛り、守備表示になった。

スターダスト・ドラゴン ATK2500 DEF2000

「.....私は装備魔法、《憎悪の棘》を発動！ このカードは《ブラック・ローズ・ドラゴン》か植物族モンスターにのみ、装備することができる！ 装備されたモンスターの攻撃力は600ポイントアップする！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400 3000

「さらに『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果発動！1ターンに一度、自分の墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外することで守備表示で存在する相手モンスターを一体、エンドフェイズまで攻撃力を0にして、攻撃表示に変更する！私は墓地の『ウイード』をゲームから除外し、『スター・ダスト・ドラゴン』の攻撃力を0にし、攻撃表示に変更する！」

「攻撃力0で攻撃表示！？」

「不味いぞ！」のままじや十代が！

スター・ダスト・ドラゴン DEF2000 ATK0

「バトル！『フェニキアン・クラスター・アマリリス』で『スター・ダスト・ドラゴン』を攻撃！」

「罠カード発動！『次元幽閉』。攻撃してきたモンスターをゲームから除外する！」

「伏せてある速効魔法、『神秘の中華なべ』を発動！モンスターを一体リリースし、攻撃力か守備力を選択しその数値分、ライフを回復する。『フェニキアン・クラスター・アマリリス』をリリースし、攻撃力分ライフを回復する！」

かわされたか！

ユキ LP200 2400

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》で《スターダスト・ドラゴン》を攻撃！ヘイテ・ローズ・ウイップ！」

「ぐわあ————」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》の攻撃によつて、《スターダスト・ドラゴン》の体に傷がつき、余波で俺にもダメージが来た。

十代 LP 3200 200

「なんで破壊されないんだ？」

「《憎悪の棘》を装備したモンスターに攻撃されたモンスターは戦闘によつては破壊されないのよ。」

………… 覚悟はしていたが、………… 痛いな。………… だけど。

「アニキ！？」

「十代、デュエルをやめるんだ！」

………… やめるわけには、………… いかない！

「…………俺は大丈夫だ！」

「キを救うためには、これくらいひとつないことない！」

「お姉ちゃん、もつやめて……なんで」ことするの……？」

「……………」レベ、本郷は私のことなど覚えていなかったんだ

じよ。」「

「…………え?」「

「私をいつも可哀想な物を見るような田口、あなたのうわべだけの優しさに、もう少しやれましたのかよ。」

「わ、違つよー!ボクはー?」

「何が違つて違うのー?お姉ちゃんなんかになれば二つて、心のどこかで思つてこないでしょ。」

「あ、それは…………。」「

。」

「…………違つ、違つよ。ボクは…………、お、お姉ちゃんの」と

「…………。」「

「…………なによ、なにか言なきこみー!何が違つのよー?」

。」

「私は、私は化け物なのよー!いつも私の側に置いてくれたけど本郷は恐いんでしょー!どうなのよー?」「

「…………」

「向よ。」「

「…………」

「…………お前、…………本当は寂しいんだろ。」

「…………え？」

「…………お姉ちゃんが…………寂しい…………？」

「あなたに私の何が分かるの！？」

「…………分かるぞ、小さい頃俺もデュエルで友達を傷つけて、一人になつたことがあるからな。」

「…………十代が？」

まあ、そのあとはゴベルとなんとか和解することができたからな。
「…………その後は、原因を突き止めてその友達とも和解できたからな。」

「…………私が寂しい？私は寂しくなんか「じゃあ、なんで泣いているんだー？」…………え？」

よく見ると仮面の隙間から涙が流れていた。

「ユキ、…………お前は一人じゃない。」

「…………一人…………じゃない？」

「ああ、お前は一人じゃない。レイがいるだろ。…………レイだけじゃない、俺もいるから。」

「…………。」

「…………『ユエル、続けよつぜ。』」

「…………うん、私はターンエンドー。」

スター・ダスト・ドラゴンATK0 DEF2500

ユキ

モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン

魔法、罠 憎惡の棘 (ブラック・ローズ・ドラゴンに装備)

「俺のターン、ドロー！」

「…………来てくれたか！

「罠カード発動！『重力解放』。フィールドの全てのモンスターの表示形式を変更する！』

スター・ダスト・ドラゴンATK2500 DEF2000

ブラック・ローズ・ドラゴンATK3000 DEF1800

「俺は『救世竜セイヴラー・ドラゴン』を召喚！」

救世竜セイヴラー・ドラゴンATK0

「モンスターの召喚に成功したターン、《ワンショット・ブースタ

ー』は手札から特殊召喚できるー俺は《ワンショット・ブースター》を特殊召喚！』

ワンショット・ブースター ATK0

「攻撃力0のモンスターが一体？」

「…………《救世竜セイヴァー・ドラゴン》…………。」

「俺はレベル8の《スターダスト・ドラゴン》とレベル1の《ワンショット・ブースター》にレベル1の《救世竜セイヴァー・ドラゴン》をチューニング！」

《救世竜セイヴァー・ドラゴン》が一つの光の輪になり、その中を、《スターダスト・ドラゴン》と《ワンショット・ブースター》が通過する。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！」

8 + 1 + 1 = 10

「シンクロ召喚！光来せよ！《セイヴァー・スター・ドラゴン》！」

セイヴァー・スター・ドラゴン ATK3800

「《セイヴァー・スター・ドラゴン》の効果発動！相手モンスターの一体の効果をエンドフェイズまで無効化することができる。俺は《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果を無効化する。サプリメーション・ドレイン！」

「うう…………。」

「ユキ？」

「…………大丈夫。…………続けて。」

「…………ああ、『セイヴィア・スター・ドラゴン』は効果を無効化したモンスターに記されている効果を一度だけ使用することができます！墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外して、守備表示モンスターを攻撃力0にし、攻撃表示にする！」

「でも十代の墓地に植物族モンスターは存在しないはずだ、発動はでk「いるぜ、一体だけな！」…………一体、だけ？」

「墓地の『グローアップ・バルブ』をゲームから除外し、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の攻撃力を0にし、攻撃表示にする！」

「『グローアップ・バルブ』？」

「…………植物族のチューナーモンスター。でもいつ墓地に？」

「『ワン・フォー・ワン』の時のコストだ。」

「あつ！」

「ブラック・ローズ・ドラゴンDEF1800 ATK0

「バトル！『セイヴィア・スター・ドラゴン』で『ブラック・ローズ・ドラゴン』を攻撃！シューティング・ブラスター・ソニック！」

「あああああああー。」

ゴキーピ2400 0

十代 side out

ゴキ side

……負けた、……私は間違っていたのかな。
レイにも、みんなにも嫌われた。……私は。

「…………お姉ちゃん。」

気がつくとレイが近くにきていた。それと仮面がなくなっていた。
「…………前にも言ったよね。ボクはどんなことがあってもお姉ちゃんの味方だつて。」

「…………レイ。…………でも、私は、レイにひざこじを言つたんだよ。」

「…………関係ないよ。お姉ちゃんはお姉ちゃんでしょう。」

レイ、ごめんね。

「…………うわ、ひっく、うわあ——
——ん——。」

「お、お姉ちゃん!——?…………もう、ボク達がいるから大丈夫だよ。」

「

ユキ side out

十代 side

ユキが泣き出してしまった。……………和解できたようだな。じばら
く一人だけにしてやるか。

「十代、大丈夫か?」

「俺は大丈夫だ。……………それとユキとレイはしばりくは一人だ
けにしておいてくれよ。」

「どうして?」

「……………翔、少しあは空氣を読め。あと、俺はちょっと行くところがあるから。」

そういうふうにユベルはまざこに行つたのか探さないとな。

「…………で、『れまじうしたんだ?』

【あ、十代一・ちょっと手伝つてよー】

「何を?」

【かわいい～！～！】

【クリ～！～？】

「…………成る程。だいたい分かった。」

ブラック・マジシャン・ガールがハネクリボーコトを抱き締めて離さないみたいだ。

【…………ク、クリ～。】

【ハネクリボーを離してくれないかな?】

【え～、やだ。かわいいんだもん。】

お持ち帰りか!?

【ハネクリボーさん、大丈夫ですか?】

【…………あ。】

【え?】

【お持ち帰り～～！】

……今度はエフェクト・ヴェーラーか。…………つて止めなきや

【クリ♂。】

【ハネクリボー、大丈夫かい?】

〔 ク、クリ。〕

〔…………大丈夫じゃないね。〕

なんか今日は疲れるな。

話は飛んで今は俺の部屋にいる。ユキもレイも俺の部屋にいる。まあ、ユキがデュエルで怪我をさせてしまった人達を治したり、ユベルがブラック・マジシャン・ガールを首根っこ掴んで部屋に引っ張つたりしていた。…………あのデュエルの後、ユキの力は何故か傷つける力ではなく癒やす力になっていたらしい。まだあまりうまく使えないと言つていたが。…………まさか、『セイヴォー・スター・ドラゴン』のサプリメーション・ドレインで傷つける力が無くなつたのか？

「お姉ちゃん大丈夫?」

「…………うん、大丈夫だよ。」

「無理はするなよ。…………で、話は変わるがユキの側にいるのは…………。」

「私の精霊なんだけど…………。」

ユキの側には四人精霊がいる。その後、ユキは精霊が見えるようになつたみたいだ。それは置いてといて、…………ブラック・マジシャン・ガールは分かるが、三人は分からぬ。…………どんなモンスターなんだ?一人は何故かメイドの格好だし、一人は魔女っぽいし、一人は傘を持っているし。

【十代様、私とは先程お会いいたしましたよ。】

「先程…………つて、十代様!…?」

【なあ、ユキ。何で私を使ってくれなかつたんだ?私も暴れたかつたぜ。】

【私もよ、ユキ。】の馬鹿よりは暴れられるわ。】

【…………おい、馬鹿って誰だ!】

【あなた以外誰がいるっていうのよ。】

【やるのかー私は容赦はしないぜー】

「……で暴れるなー外でやれ、外で！」

「全く、てかこの三人どつかで見たことあるな。

「なあ、ユキ。この三人ってどんなモンスターなんだ？」

「…………サクヤは『ブラック・ローズ・ドラゴン』、ユウカは『凛天使クイーン・オブ・ローズ』、マリサは『魔天使ローズ・ソーサラー』の精霊だよ。『ブラック・マジシャン・ガール』はマナだよ。」

「サクヤ？ ユウカ？ マリサ？ 全員東方から？」

「…………うん。見た目が見た目だから。」

「それより、『ブラック・ローズ・ドラゴン』がサクヤって、……
……十六夜つながりか？」

「そうだよ。」

【…………十代様、先程は申し訳ありませんでした。】

「いいよ別に。サクヤが謝ることじゃないだろ。」

【…………ですが、私は…………。】

【別にいいじゃねーかよ。十代もいつ聞いてるんだぜ。気にすんなよ。】

【あら、マツサにしては意外なこと言つわね。】

【おい！それってどういう意味だ！】

【アガルト】

「少し落ち着いて、二人とも。」

.....

[アラタ～.]

【お、い、しゃせ！なにして遊ぶんだ？】

「和毛」

「… もう少しで帰るよ」

卷之三

あ、三分くらいで帆船が出来上がる。

【確かにそうだな】

【 そ、そうでしたね】

ケリハ

十代 ホケ達 そろそろ帰るから

「ああ、…………」キ。レド。

「「何?」」

「…………俺は一人の味方だからな。あと、ユキ。ユキにはレイ達がいるから、一人で抱え込むなよ。」

「うん。」

「…………ありがとう。ちょっとといいかな?」

ユキが近づいてきた。

「ん?つ……」

…………ユキにキスされた。…………しかも、…………深い方。

「…………ふはつ。」

「あーーーお姉ちゃんズルい!ボクもー!」

「おーーーつ……」

…………レイに元もされました。

「…………ふはつ。」

「…………二人していきなりなにするんだー!」

「「…………」」

「人の顔が真っ赤になつてゐる。…………まさか！」

【十代、フラグ立てたね。】

レイはともかくユキもか！

「ユキ、俺はな、レイのことが「ボクはいいよ。」…………えつ？」

「…………お姉ちゃんなら、いいよ。」

【…………十代さん、一股ですね。】

【一股だな。】

【クリ~。】

【…公認の一股。】

【ふたまた？】

【ラブラブだね~、三人とも。】

【やれやれだぜ。】

【これは責任とらなきや駄目ね。】

【「、公認の一股！？

【…………あの、お嬢様、妹様、そろそろ準備をしないといけませ

んよ。】

「…………分かってるよ。十代、これからレイには変なことしないでね。」

「ああ、…………全く、コキはシスコンだな。」

「十代はロリコンだしょ。」

神槍「スピア・ザ・グングニル」

グサツ！

「ぐはつー。」

「お姉ちゃん！十代は一股のロリコンだよー。」

禁忌「レーザー ヴァーテイン」

ブスツ！

「ぐふつー。」

な、なんでスペルカードが発動しているんだー…………精神的ダメージが大きすぎる。

「十代、大丈夫？しつかりしてーー？」

「…………だ、…………大丈夫…………だ。」

でも、しばらへは残りそつだな。

「……………そつだ、一人に一つだけ言い忘れてたことがあつた。

「

「何？」

「じつしたの？」

「俺もユキと同じ転生者だから。」

「「……………え……………」」

「」、声が大きい！

「ほ、本当に転生者なのー？」

「そつだけど。」

「十代も転生者だったんだ。でも、なんていきなり言ひの？」

「タイミング逃していたんだ。」

「そつなんだ。」

【そーなのかー。】

【…何言ひてゐるの？】

……東方が多いな。

「…………でも、なんかすつきりした。ありがと。」

「お姉ちゃんー早くしないと帰れなくなっちゃうよねー。」

「えつ、本当にー。」

時計を見ると、時間がなくなっていった。

「十代、私もレイと一緒に来るから待つてね。」

「ああ、待ってるからな。それと、これからいふこと大変だと思うけど頑張れよ。」

「うそー。」

「お姉ちゃんー。」

「分かってるよー。」

ユキヒレイは帰つていつた。

十代 side out

第一十四話 学園祭後編 ～姉妹の絆～（後書き）

学園祭は終了です。

第一一十五話 七人目のセブンスターズ（前書き）

第一一十五話です。グダグダになつたよつな気がします。

第一一十五話 七人目のセブンスターズ

十代 side

「…………ここだな。」

俺達は廃寮の前にいる。俺達とはいっても俺以外の人はいない。学園祭から数日後、校長に呼び出され、相手から俺に指命があり廃寮の中で待つてもららうらしい。校長に廃寮に入る許可はもらっている。

【なんでこの中なんだろうね?】

【相手は誰なんですか?】

【セブンスターズの七人目だよな。】

【クリ。】

相手はアムナエル、いや、大徳寺先生だ。正直言つて戦いたくはない。だけど、俺を一人で呼んだのには理由があるはずだ。

【…………十代さん?】

「…………あ、悪い。少し考え方をしてたんだ。」

【考え方かい?】

「ああ。」

【相手は待つてゐみたいだから早く行こひづ。】

「分かつてゐよ。」

行くしかないな。俺達は廃寮に入つた。

俺達は廃寮に入り、いろいろと見て回つた。

【ここに来るのは一回目だね。】

「あの時は勝手に入つたけど、今回は許可はもらつてゐるから大丈夫だ。」

制裁デュエルはもう御免だ。

【前にデュエルした所で待つてゐるのかもな。】

「そうかもしけ.....ん?」

【どうしたんですか?】

「.....前にここに通路なんてあつたか?」

前にタイタンとデュエルした所に向かおうとしていたが、その途中で通路が分かれていた。

【いや、なかつたよ。】

「…………」の先にこゑな。

【慎重に行こう。】

行くか。

十代 side out

明日香 side

「アーニキはもう行ったの！？」

「ええ、校長先生に呼ばれて一人で行ったわ。」

「心配なんだな。」

確かに心配ね。闇のデュエルは私もしたけどもつしたくないわ。

「…………でも、アーニキは勝つよ。絶対！」

「俺もなんだな！」

私も十代が勝つと思つてる。心配だけど待つしかないわね。

明日香 side out

十代 side

「……………」

【実験室みたいだな。】

【クリ。】

【いろいろ機械があるね。】

新しく出来ていた通路をしばらく歩いていると開けた所に出た。通路は暗かつたがこの部屋だけはほんの少し明るかった。

【……………じ、十代さん。あ、あれ。】

エフエクト・ヴェーラーが指を指していくまつを見るとそこには棺桶があった。

【棺桶だよね。】

「……………開けてみるか。」

俺は棺桶の蓋を開けてみた。

【きゃ――――!――?み、み、!!イラですょ――――?】

【なんで!!イラがあるんだ!――?】

【クリ――?】

「みんな！少し落ち着け！」

……いや、落ち着けて言つても普通は落ちてはこられないよな。

【十代、ミイラについて】

「……………やつぱりな。」

ミイラは大徳寺先生のだ。

「――ヤー。」

【ミイラが喋りましたよー？】

「……………――ヤー？」

ミイラから何故か猫の鳴き声がした。猫？

「つむ、 フララオー？なんぞこいー？」

俺達についてきたのか？……………そこへえばこに最近、レッジ寮で
はみかけてはいないな。

「……………よひこそ、私の実験室へ。遊城十代。」

声が聞こえたと同時に少しだけ明るかつた部屋が全体が見えるようになつた。

「ビードー・ビードーだー。？」

「…………フフフ、私はここにいるんだ。」

振り向くとそこには仮面をつけ、衣を身に纏つた男がいた。

「我が名はアムナエル。七人目のセブンスターズだ。」

「…………。」

「お前はもう逃げられない。ここを出たければこの世界の真実が綴られたエメラルドタブレットの前で私との闇のデュエルで勝つことだ。」

「…………エメラルドタブレット。最高の鍊金術師が持つ究極のアイテム。」

「よく知っているな。私が最後の試練だ！」

【…………十代。負けないでね。】

ユベル、分かつてゐるよ。

「「デュエル！！」」

十代 LP4000
アムナエル LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROヒーマン》を召喚ー。」

エアーマン ATK1800

「《Hアーマン》の効果発動！デッキから《E・HEROクレイマー》を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター エアーマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《異次元の女戦士》を召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500

「私は永続魔法、《次元の裂け目》を発動！」このカードが発動している限り、墓地に送られるモンスターは墓地に送られず、ゲームから除外される。」

「罠カード発動！《砂塵の大竜巻》。《次元の裂け目》を破壊する！その後、カードを一枚伏せる。」

とりあえず、沢山のモンスターを除外される訳にはいかないな。

「バトル！《異次元の女戦士》で《エアーマン》を攻撃！」

《異次元の女戦士》が《エアーマン》に切りかかるが、返り討ちにされた。

「くつ！だがこの瞬間、《異次元の女戦士》の効果発動！このモンスターが攻撃した時、このモンスターと攻撃されたモンスターをゲームから除外する。」

《異次元の女戦士》と《Eアーマン》が現れた次元の穴に吸い込まれた。

「私はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

アムナエル
モンスター なし

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、永続罠発動！《マクロコスモス》。このカードが発動している限り、墓地に送られるカードは墓地に送られず、ゲームから除外される。」

不味い！今は《マクロコスモス》を破壊できるカードは来ていないし、これだと《ネクロ・ダークマン》を墓地に送ることが出来ない。

「俺は魔法カード、《融合》を発動！手札の《E・HEROバーストレディ》と《E・HEROクレイマン》を融合。来い！《E・HEROランパート・ガンナー》！」

ランパート・ガンナー DEF 2500

「バトル！《ランパート・ガンナー》は守備表示の時、相手に直接

攻撃することができる。その代わり『えるダメージは半分になる。
ランパートシヨット！』

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。」

《ランパート・ガンナー》が攻撃するが防がれた。

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代
モンスター ランパート・ガンナー

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！《原始太陽ヘリオス》を召喚！」

原始太陽ヘリオスATK？

「《原始太陽ヘリオス》の攻撃力はゲームから除外されているモンスターの数×100となる。今、ゲームから除外されているモンスターは四体。よって、《原始太陽ヘリオス》の攻撃力は400になる。」

原始太陽ヘリオスATK？ 400

「そして、《原始太陽ヘリオス》を生け贋に《ヘリオス・デュオ・メギストス》を特殊召喚！《ヘリオス・デュオ・メギストス》はゲームから除外されているモンスターの数×200となる。《原始太陽ヘリオス》が除外されたことにより、ゲームから除外されているモンスターは五体になる。」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK? 1000

「魔法カード『強欲な壺』を発動！デッキからカードを一枚ドローする。さらに魔法カード『天使の施し』を発動！デッキからカードを三枚ドローし、一枚捨てる。『マクロコスマス』が発動しているのでゲームから除外される。そして今ゲームから除外された『ネクロフェイス』の効果発動！お互いのプレイヤーはデッキの上から五枚ゲームから除外する！」

くそっ！ゲームから除外されたモンスターが多くなってきた。

「私は五枚のうち一枚がモンスターだ。」

「俺は三枚だ。」

「三枚ともE・HEROだ。」

「これで除外されたモンスターは十一体。よつて、『ヘリオス・デュオ・メギストス』の攻撃力は2200だ。」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK1000 2200

まだ『ランパート・ガンナー』で耐えきれる。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！」

アムナエル
モンスター ヘリオス・デュオ・メギストス

魔法、罠 マクロコスモス、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード『強欲な壺』を発動！ デッキからカードを一枚ドローする。そして『エフェクト・ヴェーラー』を召喚！」

エフェクト・ヴェーラー ATK0

【十代さん、なんで私を召喚するんですか？】

「『マクロコスモス』が発動しているから効果は使えないんだ。」

【そうなんですね。分かりました。】

「伏せてある魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！ フィールドの『E・HEROランパート・ガンナー』と『エフェクト・ヴェーラー』をゲームから除外し、融合。来い！ 『E・HERO Theシャイニング』！」

Theシャイニング ATK2500

「除外されたモンスターは十三体だ。」

ヘルオス・デュオ・メギストス ATK2200 2600

「『Theシャイニング』はゲームから除外されているE・HEROと名のつくモンスター×300ポイントアップする。ゲームから除外されているE・HEROと名のつくモンスターは六体だ！」

Theシャイニング ATK2500 4300

「バトル！『Theシャイニング』で『ヘリオス・デュオ・メギストス』に攻撃！オブティカル・ストーム！」

「ぐつ！」

アムナエル LP 3700 2000

「俺はターンエンド！」

十代

モンスター Theシャイニング

魔法、罠 なし

『ヘリオス・デュオ・メギストス』を破壊したがまだ油断しない方がいいな。

「…………アムナエル、いや、大徳寺先生。なんでこんなことをしているんですか？」

「…………今は関係無い。私のターン、ドロー！スタンバイフェイズにゲームから除外された魔法カード『異次元からの宝札』の効果発動！ゲームから除外された次の自分のターンのスタンバイフェイズにこのカードを手札に戻す。この効果で手札に戻った時、お互いのプレイヤーはデッキから一枚ドローする。」

ドローは出来たがあっちもだ。

「私は魔法カード『闇の誘惑』を発動！デッキからカードを一枚ドローリし、手札の闇属性モンスターを一体、ゲームから除外する。除外来ない場合は手札を全て墓地に送る。私はデッキから一枚ドローリし、手札の『ネクロフェイス』をゲームから除外する。」

「ここで『ネクロフェイス』か！？」

「ゲームから除外された『ネクロフェイス』の効果でデッキの上からカードを五枚ゲームから除外する。五枚のうちモンスターは一枚だ。」

「俺は一枚、一枚ともE・HEROだ。」

TheシャイニングATK4300 4900

「これで除外されたモンスターは十八体。一体目の『原始太陽ヘリオス』を召喚！」

原始太陽ヘリオスATK? 1800

「『原始太陽ヘリオス』を生け贋に『ヘリオス・デュオ・メギストス』を特殊召喚！」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK? 3800

「そして、『ヘリオス・デュオ・メギストス』を生け贋に『ヘリオス・トリス・メギストス』を特殊召喚！『ヘリオス・トリス・メギストス』の攻撃力はゲームから除外されているモンスターの数×300だ。」

今ゲームから除外されているモンスターは…………二十体……？

ヘリオス・トリス・メギストスATK? 6000

「バトル! 『ヘリオス・トリス・メギストス』で『Theシャイニング』を攻撃! フェニックス・プロミネンス!」

「くつ！」

十代LP4000 2300

「除外されたモンスターが増えたことにより、『ヘリオス・トリスマギストス』の攻撃力は上がる。」

ヘリオス・トリス・メギストスATK6000 6300

『Theシャイニング』は墓地に送られた時に効果は発動するから、今は発動出来ない！

「私はターンエンドだ！」

アムナエル

モンスター

ヘリオス・トリス・メギストス

魔法、罠 マクロコスモス、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は『E・HEROフェザーマン』を召喚！」

フェザーマンDEF1000

「カード一枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズに伏せてある速効魔法、《サイクロン》を発動！
その伏せカードを破壊する！」

《炸裂装甲》が破壊された！

十代

モンスター フェザーマン

魔法、罠 なし

「私のターン、ドロー！バトル！《ヘリオス・トリス・メギストス》で《フェザーマン》を攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

…………このままじゃ不味い。《ヘリオス・トリス・メギストス》の攻撃力が上がるだけだ。

ヘリオス・トリス・メギストス ATK 6300 6600

「私はターンエンド！（…………君ならこの状況を打破できると信じている。）」

アムナエル

モンスター ヘリオス・トリス・メギストス

魔法、罠 マクロコスモス

諦める訳にはいかない！たとえ可能性が低くとも、じやなけば逆

転はできるー。

「…………。」

「君も所詮この程度だったようだな。」

「…………それはどうかな?」

「この状況を打破できると言つのか!?」

「できるわ。…………俺が望みさえすれば運命は絶えず俺に味方する、つてな!」

行くぞ!

「俺のターン、ドロー!..」

來た!

「…………魔法力ード》平行世界融合》を発動!ゲームから除外されている》E・HEROフェザーマン》、》E・HEROバーストレディ》、》E・HEROバブルマン》、》E・HEROクレイマン》をデッキに戻し、融合!來い!》E・HEROエリクシーラー』!」

エリクシーラー ATK2900

ヘルオス・トリス・メギストス ATK6600 5400

「《エリクシーラー》の効果発動!《エリクシーラー》が融合召喚

に成功した時、ゲームから除外されている全てのカードを持ち主のデッキに戻す！」

「全てだと！？」

ヘリオス・トリス・メギストス ATK5400 0

「『エリクシーラー』は光属性だが地、水、炎、風属性としても扱う。さらに相手フィールドに同じ属性のモンスターが存在するとき、そのモンスター一体につき、攻撃力が300ポイントアップする。」

エリクシーラー ATK2900 3200

「バトル！『エリクシーラー』で『ヘリオス・トリス・メギストス』を攻撃！フュージョニスト・マジスタリー！」

「うわああああああ！」

アムナエル LP2000 0

十代 side out

ユベル side

十代が勝つことができた。……………だけど十代の表情は暗い。

「……………大徳寺先生、先生は何でこんなことを？」

「……………十代君、君は分かっていたのか。私の正体を。」

「はい。」

十代は転生者だから知っていたんだね。

「私は君を試していた。これから起ころる災いからこの島を守る力があるのかを……。」

「これから起ころる災い、……………それは七星門が開いて、三幻魔が復活するってことですね。」

「……………それだけではないのかもしれない。」

「それだけではない？」

「一体どうこう」とだらり。

「詳しく述べ分からぬ。だが、君と君の仲間とならそれにも打ち勝つことができるだろ。いや、それだけじゃない。これから起ころる災いにも打ち勝つことができる。」

「……………。」

「……………十代君、これを受け取れ。」

大徳寺先生は十代にエメラルドタブレットを渡した。

「……………俺は守りますよ。この島を、……………いや、みんなを。」

「……………ありがとうございます。これで私も……………。」

そつ言つて大徳寺先生は砂になつた。

「……………。」

【……………十代。】

「……………わかつてゐるよ。戻ろう、みんなが心配しているからな。」

【そうですね。】

僕達はこの部屋を後にした。……………だけど、この後の戦いで予想できなかつたことが起きたことをこの時の僕達は知ることはなかつた。

ユベル side out

零 side

いろいろと仕事があつたがようやく一息つけることができた。ゴーズ達も疲れている。

【御主人、大丈夫ですか?】

「まあな。」

【……………。】

「ゴーズ、どうした?」

【…………主人、妙な胸騒ぎがする。】

「妙な胸騒ぎ?」

【…………はい。】

「…………お前もか。」

【御主人もですか?】

「ああ。」

「一体何なんだこの妙な胸騒ぎは?」(最近ずっと起つていて)

「仕事のし過ぎで疲れているかもしだねえが、一応警戒はしておくぞ。いいな?」

【【はい。】】

【グルウ。】

零
s i d e
out

第一十六話 三幻魔（前書き）

第一十六話です。三幻魔戦ですが呆氣なく終わります。

第一十六話 三幻魔

十代 side

大徳寺先生とのデュエルの後、校長先生を始め、みんなに報告した。翔達は悲しい顔をしていた。俺も悲しいが気になることがある。三幻魔が復活することは分かるが、他に起こる災について一体何なんだ？

「ユベル、どう思つ？」

【僕も分からぬよ。】

……やっぱり分からない。

【十代、あれこれ考えても仕方ないぜ。】

「…………そうだな。ちょっと気分転換にテレビでも見るか。」

テレビの電源を入れた。

…………こちら、現場です。三時間前、突如空が暗くなり、巨大な黒い鳥が現れ町を破壊し、町の住人が行方不明になつたことです。』

…………何だ、これは？

【…………クリ~。】

【ハネクリボー、どうしたんだ?】

【なんか不気味ですね。】

確かに不気味だな。暫く見ていると上空のへりからの映像になつた。

『今、私は現場の上空に来ています。何か鳥のような模様が見えますでしょ?』

「これは!?」

【十代、いきなりどうしたんだい?】

.....何でだ?何で今の時代にいるんだ?

「.....何で地縛神がいるんだ!」

【地縛神ですか?】

【十代も持つているだろ。】

「.....持つているが、俺が持つている地縛神にこんな力はない!」

【確かに、十代が持つている地縛神はただのカードだからね。】

「.....しかも、この模様は、「コンドルの地縛神だ!」

コンドルの地縛神、ウイラコチャ・ラスカ。何でこの地縛神がいるんだ?

【これが言つていたことかな?】

「…………恐らくな。」

何で地縛神が?…………でも今は三幻魔をじりにかしないとな。

十代 side out

零 side

「…………く、くそつー。ゴーズ! カイエンー。ヴァンダルギオン
!しつかりしるー。」

俺達は突如現れた地縛神を止めるために来た。だが、何であいつが
!?

「テメー、一體…………どうやつて地獄から抜け出した!?」

「何でこの女が!?

「…………私は十代君を助けなきゃいけないの。…………それ以外
に理由はないよ。」

…………くそつー。あいつの記憶をなくして別の世界に転生させて
おるべきだった!

「そんなくだらない理由で、…………関係ねえ人間を巻き込むな!
…………お前のやつたことでどれだけの人間が…………犠牲にな

つたと思つていやがるんだ！」

「別にいいじゃん。それにくだらなくないよ。私は十代君を救うつてこう使命があるんだから。この力があれば十代君を救える。」

この女の頭はどこまで腐つてやがるんだ！？

「…………邪魔だよ。消えてくれない？」

あの女の後ろに地縛神ウィラ「コチャ・ラスカが現れた。

「…………やつちやえ。」

「うわあ――――――！」

零 side out

十代 side

「…………良かつた。二人は無事みたいだ。」

俺はあのニュースを見た後、ユキとレイに連絡した。どうやら、二人の住んでいる町ではなかつたようだ。ユキも俺と同じで驚いていた。

【…………でも、何で地縛神がいるんだ？】

【…………クリ。】

【あの〜、何で地縛神が現れる人が消えるんですか?】

「…………地縛神は人間や精霊の魂を生け贋に召喚される。」

【消えてしまった人はどうなるんですか?】

「地縛神を倒せば元に戻るが、…………倒せなければそのままだ。」

【そのままで…………。】

「…………といつあえず、今は三幻魔をどうにかしないといけない。」

今は休もう。

翌日

七星門の鍵が盗まれたらしい。…………犯人は万丈目だよな。で、今は万丈目を追い詰めたところだ。ちなみに鍵は全てある。

「万丈目君、どうしてこんなことを?」

「それは…………、天上院君、君とデュエルをするためだ!」

「それなら普通にデュエルでいいと思つけどな。」

「それでは駄目だ。これは七星門の鍵と天上院君とのデータを掛けたLOVE'テュエルだ！」

万丈目、七星門の鍵はいらないと思つた。

「万丈目君、何を馬鹿なことを…………。」

「何が馬鹿だ、明日香！』

その声がした方に向くと何故か南国風の格好をし、ウクレレを持った吹雪がいた。…………それより、馬鹿じやなかつたら一体これをどのように言えど？

「兄さん！？」

「吹雪！？」

「明日香！万丈目君は男の純情を掛けて明日香に勝負を挑んでいるんだ。君も女の純情を掛けて勝負を受けるべきだ！」

…………もう帰りたい気分だ。

「…………また吹雪の悪い癖が出たな。」

「…………兄さん。」

なんだか、明日香から何かオーラが出ている。

「さあ、明日香！君も準備を『兄さんの馬鹿！』ふべらー？」

明日香の拳が吹雪の顔にクリーンヒットした。

「自業自得なんだな。」

確かに。

【なあ、明日香の腕がオベリスクの腕に見えなかつたか?】

【見えました。】

【クリ。】

【「ラシードハンドクラッシュヤーだね。】

「どうやらみんなには《オベリスクの巨神兵》に見えたようだ。」

【十代は何に見えたんだい?】

(俺には《眠れる巨人ズシン》の腕に見えたんだが。)

【ズシンパンチだね。】

「吹雪ー!? しつかりしろー!」

よく見ると吹雪の口から白い何かが出ている。

「……………万丈目、ああなりたくなかつたら鍵を返したほうが多いぜ。」

「……………わ、分かつた。な、何だ?」

「地震だ！！」

万丈田が鍵を返さうとした時、突如地震が起つた。

「す、ぐ揺れでるー！」

「何が起つてこねんだー…？」

しばらくすると地震はおそれました。

「あ、鍵が！」

「え？？」

よく見ると鍵が光り、万丈田の手から離れて浮かんだ後、移動して
いった。

「おい、待て！？」

俺達は浮かんで移動している鍵を追いかけた。

しばらく追いかけると向やら機械があり、その回りに七本の柱がある場所に出た。

「よしよし？」

「見て！鍵が柱に吸い込まれたわ！」

「あっちの柱にもだよ。」

「あの柱にもだ！」

「まさか、七星門が開くのか！？」

「みなせーん！」

「一体何が起つているノーネー？」

「校長先生、クロノス先生！」

「ついにこの時がきたか！」

「…………みんな、あれを。」

三沢が指を指している方に向くと三枚のカードがあつた。

「…………あれが。」

「三幻魔のカードか！」

万丈目達が走りだし三幻魔のカードを取りうとした時だった。

『貴様らにそのカードを渡すわけにはいかんな。』

「誰だ！？」

「上だー。」

上を見ると飛行機があり、そこから何かがパラシュートを広げて降りてきて、着地した。

「何だあれは？」

パラシュートで勢いを落としていたが、重さがあるために砂煙が上がった。しばらくすると砂煙は晴れた。

「あれは…………ロボット？」

『フフフフフフフフ、私の声を忘れたかね、鮫島校長？』

「その声は、…………影丸理事長！？」

『時は満ちた。これより幻魔の復活の儀式を行つ。』

「復活の儀式？」

『私がここに三幻魔のカードを封印し、七星門の鍵を鮫島に渡しておいたのだ。全てはこの時のためだー。』

その後、理事長は幻魔のカードについて話し始めた。

『…………さて、長話もこれくらいにして幻魔復活の儀式を始めよう。相手は遊城十代、お前だ。』

…………あ、やつとか。

「何故俺なんだ？」

『それは、強い精靈の力を持つたお前でなければならないからだ！』

「……………分かつた。」

さて、やるか！

「『デュエル！』」

十代 LP 4000
影丸 LP 4000

『私のターン、ドロー！私はカードを三枚伏せる。』

魔法か罠かどっちだ？

『私は伏せた罠カード三枚を墓地に送り、《神炎皇ウリア》を特殊召喚！《神炎皇ウリア》の攻撃力と守備力は墓地に存在する罠カードの数×1000ポイントとなる。』

神炎皇ウリア ATK 0 3000 DEF 0 3000

「これが、……………三幻魔の一体。」

『《神炎皇ウリア》は罠カードの効果を受けず、魔法、モンスター効果は発動ターンのみ有効となる。』

アニメ効果の《神炎皇ウリア》か。

『フフフフハハハハ、私はターンエンドだ！』

影丸

モンスター 神炎皇ウリア

魔法、罠 なし

……なんでだろう、あれだけ心配していた三幻魔が弱く見える。

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード《禁じられた聖杯》を発動！ モンスターを一体選択し、そのモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。俺は《神炎皇ウリア》を選択する！」

『何だと！？』

神炎皇ウリア ATK3000 400 DEF3000 0

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！ 手札を一枚墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを一体特殊召喚する。デッキから《ハネクリボー》を特殊召喚！」

【クリ！】

ハネクリボー ATK300

「さりに、墓地の《E・HEROネクロ・ダークマン》の効果で手札から《E・HEROヒジマン》を生け贅なしで召喚！」

エッジマン ATK2600

「バトル！『エッジマン』で『神炎皇ウリア』を攻撃！パワー エッジ・アタック！」

『ぐわあー！』

影丸 LP4000 1800

「さりに、『ハネクリボー』で直接攻撃！」

【クリ～！】

影丸 LP1800 1500

「カードを一枚伏せて、魔法カード『命削りの宝札』を発動し、五枚ドロー！カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター エッジマン、ハネクリボー

魔法、罠 伏せ三枚

「いいぞ、その調子だ！」

「アニキ、頑張れ！」

『…………な、何故だ、何故三幻魔がこんなにも簡単に？』

……………あれだけ心配していた俺は一体なんだつたんだろう?

【十代、油断しちゃ駄目だよ。】

(分かつてゐるよ。)

『くつ！私のターン、ドロー！私は手札の罠カードを一枚墓地に送り、墓地の《神炎皇ウリア》を特殊召喚！墓地には四枚の罠カードがある。《神炎皇ウリア》の攻撃力と守備力は4000だ！』

神炎皇ウリア ATK 0 4000 DEF 0 4000

『《神炎皇ウリア》の効果発動！1ターンに一度、セットされる罠カードを一枚破壊することができる！お前の真ん中の伏せカードを破壊する！トラップティストラクション！』

「伏せカードは罠カード《ヒーローシグナル》だ。よつて破壊される。」

『さらに私は魔法カード《天よりの宝札》を発動！私は六枚ドロー！』

「俺は三枚ドロー！」

『そしてカードを三枚伏せ、私は伏せた魔法カードを三枚墓地に送り、《降雷皇ハモン》を特殊召喚！』

降雷皇ハモン ATK 4000

「三幻魔が一体！？」

『バトル！《神炎皇ウリア》で《ハネクリボー》を攻撃！ハイパー
ブレイズ！』

「伏せてある速効魔法、《進化する翼》を発動！《ハネクリボー》
と手札一枚を墓地に送り、手札から《ハネクリボーLV10》を特
殊召喚する！」

【クリ～！】

《ハネクリボー》が光に包まれ、光が収まると《ハネクリボーLV
10》に姿を変えていた。

ハネクリボーLV10 ATK300

『進化しても雑魚に変わりはない！バトルを続行！《神炎皇ウリア
》で《ハネクリボーLV10》を攻撃！ハイパー・ブレイズ！』

「そのまま《ハネクリボーLV10》を攻撃してくると思ったぜ！
《ハネクリボーLV10》の効果発動！このカードを生け贅に、相
手フィールドの表側攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊し、
破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤー
に与える！」

【クリ～！】

『ぐわあ――――――！』

影丸 LP1500 0

……呆氣ない終わりだな。

「十代が勝つたわ！」

「やったー！」

……でも何か腑に落ちない。

「十代、どうしたんだ？あの三幻魔に勝つたんだぞ？」

「…………いや、案外呆氣ない終わりだったからちよつとな。」

そう話しているうちに影丸理事長はここに来た飛行機で帰つていった。三幻魔のカードを再び封印し、俺達も帰ろうとした時だった。

「十代君、やつと見つけたよー。」

突然誰かの声がした。…………「、この声はー？」

「…………な、何でお前がここにいるんだー？」

「何でつて、十代君を助けに來たんだよー。」

俺のことを刺して退学になり、零によつて地獄に送られた筈の真理奈がいた。

十代 side out

第一十六話 三幻魔（後書き）

理事長を速効で退場させました。

第一一十七話 最強最悪の地縛神（前書き）

第一一十七話です。 真理奈が壊れました。

第一一十七話 最強最悪の地縛神

ゴベル s.i.d.e

何である女がここにいるんだー?あの女は地獄に送られた筈、一体どうしてなんだ?

「真理奈、何でお前がここにいるんだー?」

「私は十代君を助けに来たの。十代君に憑いている悪魔を倒してあげるからね!」

悪魔つて僕のことだね。まあ、僕は悪魔族だから否定はしないけど。
…………それより何か禍々しい力を感じる。

「十代に悪魔が?」

「一体どうここに」と?

「みんなには見えないの? 十代君には悪魔が憑いているんだよ!」

見えるわけがないよ。

【十代、また僕がやるつか?】

(…………いや、俺にやらせてくれ。)

【分かった、でも気をつけてね。アイツからは何か禍々しい力を感じるのは。】

(禍々しい力?.....まさか地縛神か!?)

【恐りくはね。】

「.....真理奈。」

「十代君、私とデュエルしようよ!」

「いいぜ、お前の歪んだ思いを俺が打ち碎く!」

「「デュエル!」」

十代 L P 4 0 0 0

真理奈 L P 4 0 0 0

ユベル side out

十代 side

「俺のターン、ドロー!俺は《E・HEROヒーローマン》を召喚!」

ヒーローマン A T K 1 8 0 0

「《ヒーローマン》の効果で、デッキから《E・HEROヒーローフォレストマン》を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンド!」

十代 モンスター ヒーローマン

魔法、罠　伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は魔法カード《ハーピィの羽根箒》を発動！」

「それは禁止カードよ…」

「何言つてゐるの？禁止カードは私以外が使っちゃいけないカードなんだよ。」「

禁止カードにアニメ効果の地縛神、ある意味最悪の組み合せだな。

「…………カウンター罠発動！《マジック・ジャマー》。手札を一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし、破壊する…」

「私は、フィールド魔法、《ダーク・ゾーン》を発動！闇属性モンスターの攻撃力は500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンするよ！そして《キラー・トマト》を召喚…」

キラー・トマトATK1400 1900

「バトル！《キラー・トマト》で《ヒアーマン》を攻撃！」

「くつ…」

十代LP4000 3900

「私はカードを一枚伏せてターンエンドだよ…」

真理奈

モンスター キラー・トマト

魔法、罠 ダーク・ゾーン、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード《テイク・オーバー・ファイブ》を発動！ デッキの上から五枚カードを墓地に送る。」

墓地に送られたE・HEROは一体。

「魔法カード《強欲な壙》を発動！ デッキからカードを一枚ドローする。魔法カード《融合》を発動！ 手札の《E・HEROスパークマン》と《E・HEROオーシャン》を融合！ 来い！ 《E・HEROアブソルートZero》！」

アブソルートZero ATK2500

「バトル！ 《アブソルートZero》で《キラー・トマト》を攻撃！ 瞬間氷結！」

「罠カード発動！ 《聖なるバリアーミラーフォース》。相手が攻撃してきた時に発動出来る。表側攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊するよ！」

「…………だが、《アブソルートZero》の効果発動！ フィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

《キラー・トマト》が凍りついて破壊された。

「俺は《E・HEROフォレストマン》を召喚し、ターンエンデー！」

フォレストマンDEF2000

「エンドフェイズに伏せてある速効魔法、《終焉の焰》を発動するよ！私のフィールドに《黒焰トークン》を一体守備表示で特殊召喚！」

黒焰トークンDEF0

地縛神の生け贋を残してしまったか！

十代
モンスター フォレストマン

魔法、罠 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《黒焰トークン》一体を生け贋に、……《地縛神コカパク・アプ》を召喚！」

空に大きな心臓が現れ、それが《地縛神コカパク・アプ》になった。

「な、なんだあの巨大なモンスターは…？」

「空も暗くなってるよ…」

地縛神コカパク・アプATK3000 3500

くそつ、地縛神の召喚を許してしまった！

「こ」の力さえあれば、私は十代君を救える！あの悪魔だつて倒せる

！」

……狂つてるな。

(ユベル、準備はいいか?)

【いつでも大丈夫だよ。】

「地縛神は相手モンスターが存在しても相手プレイヤーに直接攻撃出来るの。しかも相手の魔法、罠カードの効果は受けず、相手はこのカードを攻撃対称にすることは出来ないんだよ！」

「攻撃力3500で直接攻撃！？」

「不味いぞ！」

…………さて、真理奈がこれに引っ掛かってくれるかどうかだ。

「永続罠発動！《リミット・リバース》。墓地の攻撃力1000以下の中モンスターを一体、攻撃表示で特殊召喚する！俺は《ユベル》を特殊召喚！」

ユベルATK0 500

「《ユベル》！？みんな！こいつが十代君に憑いている悪魔だよ！」

「あれは、…………十代が学園祭でコスプレしたモンスターだ！」

「本當だ！」

「十代君、その悪魔を今すぐ倒してあげるからね！バトル！《地縛神コ力パク・アプ》で《ユベル》を攻撃！消えてよ悪魔！！」

……予想通りに引っ掛けってくれた！

【…………馬鹿だね。】

「さやあ―――！」

真理奈 LP 4 000 500

「…………な、何で私がダメージを受けているの！？何で《ユベル》は破壊されないの！？どうして！？おかしいよ！？」

「《ユベル》は戦闘によつては破壊されず、戦闘によつて発生する俺へのダメージは0になる。《ユベル》が攻撃された場合、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「そんな効果なんて卑怯だよ！」

「【禁止カード】を使つてお前が言つた―――】

れつわと終わらせないとな。

「…………許さない、…………許せないゆるさないゆるさないユル
サナイユルサナイイイ―――」

な、何だ！？真理奈の様子がおかしい。

「私ハ魔法カード《強欲な壇》ヲ発動！デッキカラカードヲ一枚ド

「――サラニ、魔法カード！『苦渋の選択』ヲ発動！選ブノハコノ
五枚ダヨ！」

真理奈が選んだのは『地縛神カラライア』、『地縛神ウル』、『地
縛神アスラ・ピスク』、『地縛神チャク・チャルア』、『地縛神ク
シル』の五体。何をする気だ？

「……『地縛神アスラ・ピスク』を選択する。」

「残リハ墓地ニ送ルヨー！サラニ魔法カード『強欲な壇』ヲ発動！力
ードヲ一枚ドロー！」

一枚目の『強欲な壇』！？禁止カードだけではなく、制限すらも守
らないのかよ！

「魔法カード『天使の施し』ヲ発動！デッキカラカード三枚ドロー
シテ、一枚捨テル！キヤハハハハハ！！十代君、スゴイノヲ見セテ
アゲルヨ！」

何がくるんだ？

「私ハ、私ノフィールド、墓地ニ七種類ノ地縛神ガ存在スル時、ソ
ノ七種類ノ地縛神、ソレトデツキ、手札、フィールド、墓地ノカ一
ドヲ全テゲームカラ除外シ、私ノライフヲロニシテ、最強ノモンス
ターヨ特殊召喚スルヨ！」

真理奈 LP 5 00 0

真理奈がそう言つと真理奈の後ろに左からカラライア、クシル、ア
スラ・ピスク、ウイラコチャ・ラスカ、ウル、チャク・チャルアの

六体の地縛神が現れた！

「まさか、このモンスター達は！？」

「全部地縛神なのか！？」

「…………天ニ輝ク七ツノ死ノ星ヨ！地ニ縛ラレシ神々ニ全テヲ死ニ至ラス力ヲ授ケヨ！ソシテ、地ニ縛ラレシ神々ニ現世ト冥界ノ全テヲ喰ラウ魔神トカセ！」

地縛神ウイラコチャ・ラス力の頭上に北斗七星が現れ妖しく光り、地縛神ウイラコチャ・ラス力を中心に七体の地縛神が融合していく。

「現レヨ！『混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル』ATK7500

！」

混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル

「…………な、何なんだ！？これは！」

何なんだよ、このモンスターは！？胴体はコカパク・アップ、足はウル、翼はアスラ・ピスク、尻尾はクシルとチャク・チャルア、胸にはコカラライアの頭があり、頭部はウイラコチャ・ラス力になつている。

「『混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル』ハアラコル魔法、罠、コノカード以外ノモンスター効果ヲ受ケナイ！コノモンスターガ存在スル限り十代君ノ勝利スルタメニハコノモンスターヲ倒サナイトイケナイノ！私ノライフガードモデッキカラカードヲドロー出来ナクテモ私ハ負ケルコトハナイ！」

厄介な効果を持つていやがる！！

「私ハターンエンドダヨ！ソシテ、コノ瞬間ノ効果発動！コノカ一
ドニ七星カウンターヨーツノセル。北斗七星ノ一ツ、貪狼ガ光ルヨ。
」

『カオス・アンリミテッド・デビル』の上空に星が一つ光った。

カオス・アンリミテッド・デビル 七星カウンター 0 1

「コノ北斗七星ハ私ノターンノエンドフェイズニーツズツ光ルノ。
北斗七星ガ全テ光ツタ時、私ハ勝利スル！」

「…………つまり、十代に残されたターンは…………あと六タ
ーンか！」

六ターン。長いようで短いな。…………だが、負ける訳にはいか
ない！

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル （七星カウンタ
ー1）

魔法、罠 なし

十代 side out

オリカ紹介（ナハトさん提供）

『混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル』

星12・闇・超魔神族・効果

ATK7500 DEF7500

このカードは通常召喚出来ない。自分のフィールド、墓地に七種類の地縛神が存在する時、このカード以外の自分のデッキ、手札、フィールド、墓地の全てのカードをゲームから除外し、自分のライフを0にした場合のみこのカードは手札から特殊召喚することが出来る。このカードはあらゆる魔法、罠、このカード以外のモンスター効果を受けない。相手プレイヤーの勝利条件はこのカードを破壊することになる。このカードのコントローラーはライフが0でも敗北しない。このカードのコントローラーはデッキからカードをドロー出来なくても敗北しない。このカードは相手モンスター全てに攻撃することが出来る。このカードが相手に与える戦闘ダメージは0になる。このカードが相手モンスターを戦闘によつて破壊した時、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。このカードのコントローラーのエンドフェイズにこのカードに七星カウンターを一つのせる。このカードに七星カウンターが3つ以上のついている時、1ターンに一度、このカードを攻撃してきたモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力より高い場合、その攻撃を無効にすることができる。このカードに七星カウンターが7つのつた時、このカードのコントローラーはデュエルに勝利する。

第二十八話 奇跡の力（前書き）

第二十八話です。決着がつきました。

第二十八話 奇跡の力

十代 side

十代 モンスター ユベル、フォレストマン

魔法、罠 リミット・リバース

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル（七星カウンタ
ー1）

魔法、罠 なし

今は守備を固めておこう。

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《フォレストマン》の効果発動！それにチーンして魔法カード《テイク・オーバー・ファイブ》の効果発動！墓地の《テイク・オーバー・ファイブ》をゲームから除外し、デッキから一枚ドロー！《フォレストマン》の効果でデッキから《融合》を手札に加える。」

手札は三枚。だが、まだ足りない！

「……………ユベル。」

【別にいいよ。僕だけじゃ、あれは倒せないからね。】

「…………分かつた！魔法カード《アドバンスドロー》を発動！自分のフィールドのレベル8以上のモンスターを一体生け贅に、デッキからカードを一枚ドローする。俺は《ユベル》を生け贅に、一枚ドロー！」

「…………消エタ。悪魔ガ消エター！」

「…………うるさい。

「…………俺は《E・HEROクレイマン》を召喚し、カードを一枚伏せてターンエンド！」

クレイマンDEF2000

十代

モンスター フオレストマン、クレイマン

魔法、罠 リミット・リバース、伏せ一枚

「私ノターン、バトル！《カオス・アンリミテッド・デビル》デ《フォレストマン》ニ攻撃！北斗葬送波！」

「くつ……だがダメージはない。」

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！相手モンスターヲ戦闘ニヨツテ破壊シタ時、相手ニ1000ポイントノダメージヲ『エルヨ！北斗百鬼夜行！』

「何！くつ！」

十代 LP 3900 2900

「ダケド、《カオス・アンリミテッド・デビル》ハ相手ニ戦闘ダメージハヒラレナイノ。」

モンスターを破壊出来るのは1ターンに一度だけだな。

「サラニ、《カオス・アンリミテッド・デビル》ハ全テノ相手モンスターニ攻撃スルコトガ出来ルノ！《カオス・アンリミテッド・デビル》デ《クレイマン》ヲ攻撃！北斗葬送波！」

《フォレストマン》に続いて《クレイマン》も破壊された！

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！北斗百鬼夜行！」

「うわああ！」

十代 LP 2900 1900

「私ハターンエンド！ソシテ、《カオス・アンリミテッド・デビル》ニ七星カウンターワンツノセルヨ！北斗七星ノ二ツ目ノ星、巨門こもんガ光ル！」

七星カウンター 1 2

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンターアー)

魔法、罠　なし

「俺のターン、ドローー。」

違う、このカードじゃない……だけど、あれにはいつすればいいのか。

「…………俺はターンエンンド！」

十代
モンスター　なし

魔法、罠　リミット・リバース、伏せ一枚

「十代！何故モンスターを出さないんだ！」

「…………いや、十代のやつていることは正しい。」

「兄さん、どうこうこと？」

「あの巨大なモンスターは相手に戦闘ダメージは与えられないと言っていた。ダメージが発生するのは、戦闘によつて相手モンスターを破壊した時とも言つていた！」

そつだ、この効果を知るのは賭けだつたけどな！

「私ノターン、…………私ハターンエンド！『カオス・アンリミテッド・デビル』二七星カウンターライツノセル！北斗七星ノツツ田ノ星、禄存ガ光ルノ。」

真理奈

モンスター カオス・アンロード・テッド・デビル（七星カウンターモード）

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー！」

よし！これなら！

「魔法カード《融合回収》を発動！墓地の《E・HEROオーシャン》と《融合》を手札に加える。魔法カード《融合》を発動！手札の《オーシャン》と《沼地の魔神王》を融合。来い！《E・HEROジ・アース》！」

ジ・アース ATK2500

「伏せてある魔法カード《マジック・プランター》を発動！俺のフィールドの表側表示の永続罠を一枚墓地に送り、一枚ドローする。《リミット・リバース》を墓地に送り、二枚ドロー！魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROバーストレディ》と《E・HEROネクロ・ダークマン》を融合。来い！《E・HEROノヴァマスター》！」

ノヴァマスター ATK2600

「そして、墓地の《ネクロ・ダークマン》の効果で、《E・HEROヒッジマン》を生け贅なしで召喚！」

エッジマン ATK2600

「このターンで倒す！」

「《ジ・アース》の効果発動！ フィールドに存在するこのカード以外のE・HEROと名のつくモンスターを生け贋にして、生け贋にしたモンスターの攻撃力分、《ジ・アース》の攻撃力がアップする。俺は《ノヴァマスター》と《エッジマン》を生け贋にする！」

ジ・アース ATK2500 5100 7700

「よし、攻撃力が上回った！」

「十代、行け！」

「バトル！ 《ジ・アース》で《カオス・アンリミテッド・デビル》に攻撃！ アース・マグナ・スラッシュ！」

《ジ・アース》の体が赤くなり、剣を持つて《カオス・アンリミテッド・デビル》に切りかかった！

「…………《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！」

バリィイイイン！

「な…………何でだ！？」

《カオス・アンリミテッド・デビル》に《ジ・アース》の剣が当た

つた瞬間、《ジ・アース》の剣が粉々に砕けてしまった。

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果ダヨー！」

「どんな効果だ！？」

「…………《カオス・アンリミテッド・デビル》ハネ、コノカーデニ七星カウンターガ3ツ以上ノッティル時、1ターンニ一度、コノカードヲ攻撃シテキタモンスターノ攻撃力ガコノカードヨリ高イ場合、ソノ攻撃ヲ無効ニスルコトガ出来ルンダヨー！」

「そんな！？」

じゃあ、今の《カオス・アンリミテッド・デビル》を倒すには攻撃力7500を超える攻撃力で二回攻撃か、攻撃力を7500丁度で攻撃しなければ倒せないのか！

「…………俺は、ターンエンド！」

ジ・アース ATK7700 2500

十代

モンスター ジ・アース

魔法、罠 なし

「私ノターン、バトル！《カオス・アンリミテッド・デビル》デ、《ジ・アース》ヲ攻撃！北斗葬送波！」

……《ジ・アース》も破壊された。

「『カオス・アンリミテッド・デビル』の効果発動！北斗百鬼夜行！」

「ぐわあー！」

十代 LP 1900 900

「私ハターンエンド！ソシテ、エンドフェイズニ『カオス・アンリミテッド・デビル』ニ七星カウンターライツノセルヨ！北斗七星ノ4ツ目ノ星、文曲ガ光ルノ！」

七星カウンター 3 4

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル（七星カウンターライツ）

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー！」

……………」のカードは違う！

「俺はターンエンドだ！」

十代

モンスター なし

魔法、罠 なし

「十代君、何モシナイノ?」

.....「ちこちつむわせい。

「マア、イイヤ。私ノターン、コノママ私ハターンエンド!『カオス・アンリミテッド・デビル』ニ七星カウンターヲ一ツノセル!北斗七星ノツツ田ノ星、廉貞^{れんじょう}ガ光ル!」

七星カウンター 4 5

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンタ
ー5)

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー! 魔法カード《天使の施し》を発動! デッキからカードを三枚ドローし、一枚捨てる!」

.....くそつ、これも違う! E・HEROを一體墓地に送るこ
とは出来たが。

「.....ターンエンダ!」

十代
モンスター なし

魔法、罠 なし

「私ノターン、私ハターンエンド！ソシテ、《カオス・アンリミテツド・デビル》ニ七星カウンターライツノセル！北斗七星ノ6ツ目ノ星、無曲ガ光ル！」

七星カウンター 5 6

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル（七星カウンターライツ）

魔法、罠 なし

「キヤハハハハハ！アト1ターン、アト1ターンダード・アト1ターンデ十代君ヲ救エル！」

くそつ、…………どうすればいい。

「あと1ターンしかないよ！…………アニキが負けたらどうなるの！？」

「北斗七星ノ7ツ目ノ星、はぐん破軍ガ光ツタ瞬間、私ノ勝チ！十代君ガ負ケルトネ、世界中ノ人達ノ魂ガ《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ生ヶ贊ニナルンダヨ！」

「世界中の人達が生け贊に！？」

「デモ、十代君以外ノ人達ガ生ヶ贊ニナルンダヨ！十代君待ツテテネ！モウ少シデ、アノ悪魔カラ救ツテアゲレルカラネ！」

「…………ふざけるなよ。」

「エツ？」

「ふざけるなって言つたんだよ！ユベルは俺の仲間だ！ユベルだけじゃない！ハネクリボーも、ター・ボシンクロンも、エフェクト・ヴェーラーも全員俺の仲間だ！」

「仲間？ナニ言ツテイルノ？ユベルハ十代君ヲ騙シテイルンダヨ！ 目ヲ覚マシテ！ハネクリボー達モユベルニ騙サレテイルノ！」

「…………こいつは！どこまでも救えない奴だな！」

「…………十代君、ユベルハ悪魔ナシダヨ！」

…………。

「…………私が助ケテアゲルカラネ心配シナ「ふざけるのもいい加減にしろ！！」ナ、何言ツテイルノ！？私ハ十代君ノ為ニ言ツテイルンダヨ！」

「俺がいつ！お前に！助けてほしつて頼んだ！それに俺の為にして言つているが、本当は自分の為だろ！」

「違ウ！本当ニ私ハ十代君ノ為ニ！」

「だったら、関係ない人達を巻き込むな！…………悪魔はユベルじゃない！お前なんだよ！真理奈！」

「私が、悪魔？…………違ウ！私ハ悪魔ジャナイ！私ハ天使ダ

「三一。」

「天使？……………お前が？」

「ソウダヨー！私ハ十代君ヲ救ウ為ニ別ノ世界カラ來タ天使ナンダ！」

「別の世界？」

「あいつは何を言つてゐるんだ？」

「私ハ十代君ヲ救ウ為ナラ何ヲヤツテモ許サレルノ！」

「…………もういい。お前の馬鹿馬鹿しい妄想はうんざりだ。」

「…………馬鹿馬鹿シイ？何ノコト？」

「お前を、倒す！－」

……………言つたのはいいが、どうすればいいんだ？『カオス・アンリミットッド・バビル』を倒すにはどうすれば？

「……………。」

「どうすればいいんだ？」

「十代君ハ。」

「……………いちいち喋るな、つるをこんだよ。」

「十代君ハ十代君ナンダヨネ？」

「喋るなって聞こえなかつたのか？」

「何テ、ユベルハ十代君ノ側ニイルノ？本来ココニハイナイ筈ナノ
ニドウシテ？」

「…………そんなど、今は関係ないだろ。」

「答エテ！」

「…………つるさー。」

「答エテヨー。ユベルガ十代君ノ側ニイル理由ヲ！」

「…………イライラしてくる。でも、早く答えないとずっと聞いてく
るな。」

「ユベルは俺の仲間だ。それ以外に理由はない。」

「…………違ウ。」

「何が違うんだ？」

「…………君ハ私ノ知ツテイル十代君ジヤナイ！」

「…………また何か変なことを言い出しあがつた。」

「…………君ハ十代君ノ偽物ナンダ！」

「…………。」

「俺は俺だ。」

「違う！』

「何なんだよ、ここいつ！」

「私ノ十代君ハ、ソシナ事ハ言ワナイ！」

「…………俺はお前の物じゃない。俺は俺として生きている。
それだけだ！行くぞ！俺のターン！」。

くそつー…デッキからカードをドローしようとすると、手が震えてし
まう！

(このドローで、…………全てが決まる。…………だけど、手が
震えて動かない…)

動いてくれ！

【十代さん、あなたなら大丈夫です！】

【クリー】

【十代、自分を信じる！】

【…………僕達がつっこむよ。】

「アニー。」

「きばれ、十代！」

「負けるなー！」

「あなたなら勝てるわー！」

「信じていろーネー！」

「十代君、君なら大丈夫ですー！」

みんな。…………ん？『デッキの一一番上のカードが光っている。奇跡をこの手で起こしてやるー

「…………ドローニー！」

「このカードはーー！」

「…………魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！ライフを半分支払う事で、デッキまたは墓地からカードを一枚手札に加え、このカードをデッキに加え、シャッフルする！俺は『デッキから魔法カード《ミラクル・フュージョン》を手札に加える！』

十代 LP 900 450

「魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《沼地の魔神王》と《E・HEROスパークマン》をゲームから除外し融合。来い！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 2500

「『シャイニング・フレア・ウイングマン』の攻撃力は墓地のE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイントアップする！俺の墓地にE・HEROと名のつくモンスターは、十三体だ！よつて攻撃力は3900ポイントアップする！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 2500 6400

「『賢者の石 サバティエル』の効果で手札にえたカードをデュエル中に使用した時、デッキの『賢者の石 サバティエル』を手札に加える。そして、墓地の罠カード『スキルサクセサー』をゲームから除外し、『シャイニング・フレア・ウイングマン』の攻撃力を800ポイントアップさせる！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 6400 7200

「でも、あと300ポイント攻撃力が足りない！」

「…………300ポイントか。手札の魔法カード『賢者の石 サバティエル』を発動！ライフを半分支払い、墓地の速効魔法、『異次元からの埋葬』を手札に加える。その後、デッキに加え、シャツフルする！」

十代 LP 450 225

「速効魔法、『異次元からの埋葬』を発動！ゲームから除外される『E・HEROスパークマン』を墓地に戻す。これで墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターは十四体だ！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 7200 7500

「攻撃力が並んだ！」

いや、並んでもまだだ！

「《賢者の石 サバティエル》の効果で手札に加えたカードをデュエル中に使用した時、デッキの《賢者の石 サバティエル》を手札に加える！そして《セカンド・ブースター》を召喚！」

セカンド・ブースター ATK1000

「《セカンド・ブースター》の効果発動！このカードを生け贋に、表側攻撃表示で存在するモンスターを一体選択し、その選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで1500ポイントアップさせる！俺は《シャイニング・フレア・ウイングマン》を選択する！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK7500 9000

「十代、何をしているんだ！？攻撃力が上回つたら攻撃は無効化されるんだぞ！」

「そんなこと、言わねなくても分かつてる！俺を信じろ！魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！ライフを半分支払い、墓地から速効魔法、《異次元からの埋葬》を手札に加える！そして《賢者の石 サバティエル》をデッキに加え、シャッフルする！」

「速効魔法、《異次元からの埋葬》を発動！ゲームから除外されている《沼地の魔神王》を墓地に戻す！《賢者の石 サバティエル》の効果で手札に加えたカードをデュエル中に使用したので、デッキ

十代 LP225 113

から《賢者の石 サバティエル》を手札に加える!」

これで全てが揃った!

「魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動!《賢者の石 サバティエル》は効果を三回使用したとき、効果が変わる!自分フィールドの表側攻撃表示のモンスターを一体選択し、相手モンスターの数だけ選択したモンスターの攻撃力を倍にする!俺は《シャイニング・フレア・ウイングマン》を選択する!そしてお前のモンスターは一体、よつて攻撃力は倍になる!」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK9000 18000

「バトル!《シャイニング・フレア・ウイングマン》で《カオス・アンリミテッド・デビル》に攻撃!《シャイニング・シユート!」

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ攻撃ヲ無効化スルヨ!」

《シャイニング・フレア・ウイングマン》が攻撃するが、《カオス・アンリミテッド・デビル》には届かなかつた。

「キヤハハハハハハ!コレデ、私ノ勝チ!」

「そんな!」

「…………真理奈、《カオス・アンリミテッド・デビル》が攻撃を無効に出来るのは1ターンに一度だけだよな?」

「ソウダヨ!」

た！

「…………俺は速効魔法、《ダブル・アップ・チャンス》を発動！モンスターの攻撃が無効になつた時、そのモンスターを一体選択して発動する。選択されたモンスターはこのバトルフェイズ中にもう一度だけ攻撃することが出来る。さらに、選択されたモンスターはダメージステップ時に攻撃力が倍になる。俺は《シャイニング・フレア・ウイングマン》を選択する！」

「…………エッ？」

《シャイニング・フレア・ウイングマン》の体がさつきとは比べ物にならないくらいに輝き出した！

「これで最後だ！《シャイニング・フレア・ウイングマン》で《力オス・アンリミテッド・デビル》に攻撃！究極の輝きを放て！シャイニング・シユート！！！！！」

シャイニング・フレア・ウイングマンATK18000 36000

《シャイニング・フレア・ウイングマン》の放つた光が、《力オス・アンリミテッド・デビル》を貫いた！

「キヤアアアアアアアアアアアア…………」

光が消えると、《力オス・アンリミテッド・デビル》の姿はなく、暗くなつていた空も明るくなつた。

「……………やつと倒せた。」

俺はその場に座りこんだ。

「やつたー！」

「十代、よくやつたー！」

「す、いんだなー！」

「…………みんなのおかげだ。」

俺の周りにみんなが集まってきた。

「ナ、何コレ！？」

真理奈の声がしたので見ると、足元に黒い何かがあり、足が膝の辺りまでその黒い何かに入っている。

「あれは何だ！？」

「どんどん沈んでいるわー！」

「イヤダ！助ケテヨー！」

「これが真理奈の罰だな。

「十代君、助ケテ！」

真理奈は、もう首のところまで沈んでいる。

「助ケテヨー。十代く…………。」

黒い何かは真理奈の全身を引き込むと消えてしまった。

十代 side out

第一十八話 奇跡の力（後書き）

『賢者の石 サバティエル』はアニメ効果ではなく末OCG効果です。

第二十九話 現在と未来（前書き）

第二十九話です。投稿に時間が空いてしまい申し訳ありませんでした。仕事が忙しかったのとネタ切れ等の諸事情がありましたので。しかも今回は短いですしげダグダです。

それと、この話はランサーさんの『遊戯王』転生者はサテライト』『お気に入り百件記念の話から十代達が戻つて所から始まります。

第二十九話 現在と未来

ユベル side

あの地縛神を倒してから数日後、隼人がI2社にカードデザイナーとしてスカウトされ、それに難癖をつけたクロノスとデュエルして行かせるか決めるらしい。まあ、結果は隼人が勝つた。最後は『コアラツコ』の効果で『古代の機械巨人』の攻撃力を0にして、『マスター・オブ・オズ』で『古代の機械巨人』を倒して勝つた。隼人はクロノスに認められ、I2社へ行った。

それと、僕達は平行世界の未来に行つてきた。ダークっていう男が現れて、倒した筈のあのジャックの偽物が平行世界の未来に現れたらしい。ダークが言うには、あの時の本人の『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃によつて魂が焼かれたが、その残りが平行世界の未来に流れてしまつたみたいだ。

ともかく、偽物は海斗の『古代の究極機械巨人』の攻撃によつて倒された。あの時居なくなつてしまつた『ダーク・リゾネーター』を助けて僕達は元の世界に戻つて來た。

.....無事に戻つて來たのはいいけれど、ある事實が判明した。それは、

【十代さん！何で無くしてしまつたんですか！？】

【あの時渡された筈だろー。どうして無くなっちゃったんだよー。】

「どこにいつたんだ!? テツ キケースに入れた筈なのに! ? ケース
じゃないならここか? ここも違う! ? どことだ! ?」

分かる人は分かると思うけど、持つてきた『ダーク・リゾネーター』のカードだけが無くなってしまった。

「どうしておなごだ———?」

【クリ～！？】

【十代、少しは落ち着いたらどうだい？】

「落ち着いていられるか！？」

【『ダーク・リゾネーター』は死んでいないと思つよ
多分。】

「多分！？今小声で多分って言つたよな！？」

【僕にだつて分からぬよ。】

まあ、生きているのは分かるけどどうにいるまでは分からぬ。

……今は無事にいる」とを祈るしかないな。」

【…………それしかありませんね。】

本当にどこにいったんだろう?

「……………そりいえば、」の[写真は何だ?】

【あーそれは私が撮りました。】

「どうやって撮った?】

【十代さん、それは聞いては駄目ですよ。】

十代が何枚かの[写真を見つけた。

「へえ～、良く撮れてるな。……………って、何だこれは?これは誰かの巫女服とメイド服の[写真。これは、……………ぐ、グレートサイヤマンかよ。よ、良くこんな格好出来るな。あれ?こっちの[写真は二号が一人?】

【いやー、沢山[写真が撮れましたので満足ですよ。】

どひゅつて撮つたのか気になるけど、気にしないほうがいいね。

「……………気にしたら負けか?】

【負けです。】

ユベルside out

十代side

「……………もつ入学してから一年か、案外一年つて早いもんだ

な。」

【十代、それ毎年言つてるよね。】

誰もが感じることだけど、言わせてくれ。本当にいろいろあって、あつといつ間に過ぎていったからな。

【十代、誰か来たぞ。】

足音が聞こえ、俺の部屋の前で足音が消えた。

「…………十代、いるか?」

「ああ、ちよつと待つてくれ。」

俺がドアを開けるとそこには亮がいた。

「何か用か?」

「十代、3日後に卒業デュエルがおこなわれるのは知つているな?」

「知つているけど、…………俺に在校生代表として出てほしいのか?」

「…………そうだ。」

そういうえば卒業デュエルは卒業生代表と在校生代表でするんだったな。

「いいぜ。卒業したら今度いつデュエル出来るか分からいからな。

「

「助かる。…………それと、少しあは部屋を片付けたりひつだ?」

「い、言われなくても分かってるー。」

俺の部屋の今の状態は、いろいろと物が散乱している。《ダーク・リゾネーター》のカードを探していたからだ。

「…………十代、俺は戻る。」

「ああ、今度は絶対に勝つからなー。」

亮は戻つて行つた。

【クリ~。】

【とつあえず片付けようぜ。】

片付け終わつたら、テッキ調整するか。

ついに卒業デュエルの日が来た。全校生徒が集まっている。

「十代、じつしてデュエルするのはあの時以来だな。」

「ああ、あの時は俺が負けたけどな。お互い悔いの残らないようこ
しよりぜー！」

「…………いいだろ？。」

「「デュエル！」」

十代 L P 4 0 0 0
亮 L P 4 0 0 0

十代 side out

第一十九話 現在と未来（後書き）

今年中には卒業デュエルの話をあげます。

第三十話 卒業デュエル、カイザーとの激闘（前書き）

第三十話です。今までで一番長く、そして激闘です。

第三十話 卒業デュエル、カイザーとの激闘

亮 side

ついに卒業デュエルが始まった。このデュエルは正直どうなるか分からない。相手は十代、あの時はギリギリで勝てた。…………だが、十代は今までのデュエルで不利な状況をひっくり返してきたんだ。俺が負けてもおかしくはない。

「俺のターン、ドロー！ モンスターをセットし、カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター 伏せ一枚

魔法、罠 伏せ一枚

様子見というところか？

「俺のターン、ドロー！ 俺は《サイバー・ドラゴン》を特殊召喚！ さらに《サイバー・フェニックス》を召喚！」

サイバー・フェニックス ATK2100

サイバー・ドラゴン ATK1200

「バトルだ！ 《サイバー・ドラゴン》でセットモンスターを攻撃！ エヴォリューション・バースト！」

『サイバー・ドラゴン』が光線を放ち、セットモンスターを破壊した。

「この瞬間、破壊された『幻影の魔術師』の効果発動！それにチエーンして罠カード『ヒーロー・シグナル』を発動する！『幻影の魔術師』が戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1000以下のE・HEROと名のつくモンスターを一体表側守備表示で特殊召喚する。『ヒーロー・シグナル』はモンスターが戦闘によつて破壊され墓地に送られた時、デッキからレベル4以下のE・HEROと名のつくモンスターを一体特殊召喚する。俺は『ヒーロー・シグナル』の効果で『E・HEROザ・ヒート』を、『幻影の魔術師』の効果で『E・HEROフォレストマン』を特殊召喚する！」

ザ・ヒート ATK1600 2000

フォレストマン DEF2000

.....追撃は無理か。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！」

亮

モンスター サイバー・ドラゴン、サイバー・フェニックス

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに『フォレストマン』の効果発動！俺はデッキから『融合』を手札に加える。そして、『E・HEROエアー・マン』を召喚！」

エアーマン ATK1800

「『エアーマン』の第一の効果発動！『デッキから『E・HEROクレイマン』を手札に加える。E・HEROが増えたことにより『ザ・ヒート』の攻撃力が上がる！」

ザ・ヒート ATK2000 2200

「バトルだ！『エアーマン』で『サイバー・フェニックス』を攻撃！」

亮 LP 4000 3400

「くつ！だがこの瞬間、『サイバー・フェニックス』の効果発動！戦闘によって破壊され墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドローすることが出来る。俺は一枚ドロー！」

「そして、『ザ・ヒート』で『サイバー・ドラゴン』を攻撃！」

「罷カード発動！『アタック・リフレクター・ユニット』。『サイバー・ドラゴン』を生け贋に、デッキから『サイバー・バリア・ドラゴン』を特殊召喚する！」

サイバー・バリア・ドラゴン DEF2800

「攻撃は中断、カードを一枚伏せてターンエンダ！」

十代

モンスター ザ・ヒート、エアーマン、フォレストマン

魔法、罠　伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！永続罠、《リビングナッシュ》を発動！墓地の《サイバー・ドラゴン》を攻撃表示で特殊召喚する！」

サイバー・ドラゴン ATK2100

「さらに《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴァイ ATK1500

「《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》の効果発動！手札の魔法カード一枚を相手に見せる」と、このターンのエンドフェイズまでフィールド上に存在するこのカードを《サイバー・ドラゴン》として扱うことが出来る。俺は手札の《融合》を見せ《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を《サイバー・ドラゴン》として扱う。そして魔法カード《融合》を発動！フィールドの《サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン》として扱う《サイバー・ドラゴン・ツヴァイ》を融合。現れる！《サイバー・ツイン・ドラゴン》！」

サイバー・ツイン・ドラゴン ATK2800

「バトル！《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《ヒアーマン》を攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

「くつー！」

十代 LP4000 3000

ザ・ヒート ATK2200 2000

「まだだ！《サイバー・ツイン・ドラゴン》は一度のバトルフェイズに一回攻撃することができる！《サイバー・ツイン・ドラゴン》で《フォレストマン》を攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！二連打！」

『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃によって十代の《エアーマン》と《フォレストマン》が破壊された。

ザ・ヒート ATK2000 1800

「カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

「エンドフェイズに罷カード発動！《奇跡の残照》。このターン、戦闘によって破壊され墓地に送られたモンスターを一体選択し、そのモンスターを特殊召喚する。俺は《E・HEROエアーマン》を特殊召喚！《エアーマン》の第一の効果発動！その伏せたカードを破壊する！」

エアーマン ATK1800

ザ・ヒート ATK1800 2000

亮

モンスター サイバー・ツイン・ドラゴン、サイバー・バリア・ドラゴン

魔法、罷 リビングデッドの呼び声、伏せ一枚

『ヒーローマン』によつて、今伏せた『聖なるバリアーミラーフォース』が破壊された。

「俺のターン、ドロー！ 魔法カード『融合』を発動！ フィールドの『E・HEROヒーローマン』と手札の『E・HEROクレイマン』を融合。 来い！ 『E・HEROガイア』！」

ガイアATK2200

「『ガイア』の効果発動！ 『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃力を半分にし、エンドフェイズまでその数値分、『ガイア』の攻撃力がアップする！」

サイバー・ツイン・ドラゴンATK2800 1400

ガイアATK2200 3600

「バトル！ 『ザ・ヒート』で『サイバー・ツイン・ドラゴン』を攻撃！」

「伏せてある速効魔法、『融合解除』を発動！ 『サイバー・ツイン・ドラゴン』をデッキに戻し、『サイバー・ドラゴン』と墓地では『サイバー・ドラゴン』として扱う『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を特殊召喚する！」

サイバー・ドラゴンATK2100

サイバー・ドラゴン・ツヴァイATK1500

「なら、『ザ・ヒート』で『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』を攻

撃！』

「くつ！」

亮 L P 3400 2700

「そして、『ガイア』で『サイバー・バリア・ドラゴン』を攻撃！
コンチネンタルハンマー！」

『ザ・ヒート』の攻撃で『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』が、『
ガイア』の攻撃で『サイバー・バリア・ドラゴン』が破壊された。

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！『ガイア』の攻撃力は元
に戻る。」

ガイア A T K 3600 2200

十代
モンスター ガイア、ザ・ヒート

魔法、罠 伏せ一枚

やはり、一筋縄ではいかないか。

「俺のターン、ドロー！魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札
が五枚になるようにドローし、五ターン後に全て捨てる。四枚ドロ
ー！俺は魔法カード『大嵐』を発動！」

「罠カード発動！『和睦の使者』。それにチエーンして速効魔法、
『非常食』を発動する！『非常食』の効果で『和睦の使者』を墓地

に送り、ライフを1000ポイント回復する。そして、《和睦の使者》の効果でこのターン、俺のモンスターは戦闘によつては破壊されず、俺が受ける戦闘ダメージは0になる。」

十代 LP 3000 4000

『大嵐』で破壊出来たのは俺の《リビングデッキの呼び声》の一枚。無駄打ちだつたか。

「なら、魔法カード《エヴォリューション・バースト》を発動！このカードは自分のフィールドに《サイバー・ドラゴン》が存在する時発動することができる。相手フィールドのモンスターを一体破壊する。このカードを発動するターンは《サイバー・ドラゴン》は攻撃することは出来ないが、今は関係ない。俺は《ガイア》を破壊する！」

「《ガイア》が破壊されたことにより、《ザ・ヒート》の攻撃力が下がる。」

ザ・ヒート ATK 2000 1800

「俺は《プロト・サイバー・ドラゴン》を召喚！《プロト・サイバー・ドラゴン》はフィールドに存在する限り、《サイバー・ドラゴン》として扱うことが出来る。カード一枚伏せてターンエンデー！」

プロト・サイバー・ドラゴン ATK 1100

モンスター サイバー・ドラゴン、プロト・サイバー・ドラゴン
亮

魔法、罠 伏せ一枚

亮 side out

十代 side

やつぱり強いな。一瞬でも気が抜けない。観客席の生徒や先生達も一進一退の攻防に驚いている。

「俺のターン、ドロー！」

…………ちよっとやばいかな。

「魔法カード《R ライトジャスティス》を発動！自分フィールドに存在するE・HEROと名のつくモンスターの数だけ、フィールドの魔法、罠カードを破壊する。俺のフィールドには《ザ・ヒート》がいる。よって、その一枚を破壊する！」

「ならば、罠カード発動！《威嚇する咆哮》。相手はこのターン攻撃することは出来ない。」

…………強いた。

「俺は《ザ・ヒート》を守備表示に変更してターンエンドだ！」

ザ・ヒート ATK1800 DEF1200

十代

モンスター ザ・ヒート

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドロー！俺は一休目の《サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ》を召喚！」

サイバー・ドラゴン・ツヴィアイATK1500

「バトル！《サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ》で《ザ・ヒート》を攻撃！《サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ》の効果発動！このモンスターが相手モンスターを攻撃する時、攻撃力が300ポイントアップする！」

サイバー・ドラゴン・ツヴィアイATK1500 1800

「そして、《プロト・サイバー・ドラゴン》と《サイバー・ドラゴン》で直接攻撃！」

「うわあ！」

十代 LP 40000 2900 800

「俺はターンエンド！」

亮

モンスター プロト・サイバー・ドラゴン、サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ、サイバー・ドラゴン

魔法、罠 なし

【十代、少し肩の力を抜いたらどうだい?】

「(…………そうだな。)俺のターン、ドローー。」

「…………」のカードは調度いいな。

「魔法カード『一時休戦』を発動!お互にプレイヤーはカードを一枚ドローする。そして、次の相手のエンドフェイズまでお互いが受ける全てのダメージは0になる!」

「…………十代、何がしたいんだ?」

「ちょっとした息抜きだ。」

「…………成る程、なら俺もドローをせんじゃう。」

「どんな」とでも息抜きは必要な事だ。

「俺はターンエンド!」

十代
モンスター なし

魔法、罠 なし

「俺のターン、ドローー。(十代のフィールドはがら空きだが、『一時休戦』というカードの効果でこのターンのエンドフェイズまでダメージは『えられない。)…………俺はこのままターンエンド!」

亮

モンスター プロト・サイバー・ドラゴン、サイバー・ドラゴン・ツヴァイ、サイバー・ドラゴン

「俺のターン、ドロー！（ユベル、行くぞ！）」

【分かつてるよー】

「魔法カード『融合』を発動！手札の『E・HEROオーシャン』と『ユベル』を融合。来い！『E・HERO Hスクリダオ』！」

エスクリダオ ATK2500

「『Hスクリダオ』の攻撃力は俺の墓地の『E・HERO』と名のつくモンスターの数×100ポイントアップする。俺の墓地の『E・HERO』と名のつくモンスターは六体。よつて攻撃力は600ポイントアップする！」

エスクリダオ ATK2500 3100

「バトル！『エスクリダオ』で『プロト・サイバー・ドラゴン』を攻撃！ダークディフェュージョン！」

「ぐつー！」

亮 LP2700 700

「俺はカード一枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター エスクリダオ

魔法、罠　伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！…………十代、このトユエルは勝たせてもらう！俺は手札の魔法カード『パワー・ボンド』を見せ俺のフィールドの『サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ』を『サイバー・ドラゴン』として扱う。手札の速効魔法、『サイバネティック・フュージョン・サポート』を発動！ライフを半分支払い、墓地のモンスターを融合素材として扱うことが出来る。」

亮 L P 7 0 0 3 5 0

「そして魔法カード『パワー・ボンド』を発動！フィールドの『サイバー・ドラゴン』、『サイバー・ドラゴン』として扱う『サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ』、そして墓地の『サイバー・ドラゴン』として扱う『サイバー・ドラゴン・ツヴィアイ』をゲームから除外し、融合。現れる！『サイバー・ハンド・ドラゴン』！『パワー・ボンド』の効果で『サイバー・ハンド・ドラゴン』の攻撃力は倍になる！」

サイバー・ハンド・ドラゴン ATK 4 0 0 0 8 0 0 0

ついに来たか、『サイバー・ハンド・ドラゴン』！

「行くぞ！バトルだ！『サイバー・ハンド・ドラゴン』で『エスクリダオ』を攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

やつてやる。この『サイバー・ハンド・ドラゴン』を倒す！

「農カード発動！《ハイ・アンド・ロー》。このカードは自分フィールドに表側表示で存在するモンスターが攻撃対象に選択された時に発動することが出来る。自分のデッキの一番上のカードを墓地に送り、そのカードがモンスターカードの場合、エンドフェイズまで、攻撃対象モンスターの攻撃力は墓地に送ったモンスターの攻撃力分アップする。だが、この効果で攻撃対象モンスターの攻撃力が攻撃モンスターの攻撃力を上回った場合、その攻撃対象モンスターを破壊する。俺はこの効果を三回まで繰り返すことが出来る。」

「……ギヤンブルカードか！？」

「まあ、やうだな。」

さて、どうなるか楽しみだ！

「まずは、一枚目だ！……………モンスターカード、『E・HEROキヤプテン・ゴールド』！攻撃力は2100、『エスクリダオ』の攻撃力は『キヤプテン・ゴールド』の攻撃力と自身の効果で2200ポイントアップする！」

エスクリダオ ATK3100 5200 5300

「一枚目」……………モンスターカード、《E・HEROワイルドマン》一攻撃力は1500、《エスクリダオ》の攻撃力は《ワイルドマン》と自身の効果で1600ポイントアップする！」

エスクリダオ ATK5300 6800 6900

「…………十代、代りに、さういふやうな俺の勝ちのようだな。」

「…………いや、俺は三回目の効果を使わせてもらつぜー！」

「何だと！？もし『エスクリダオ』の攻撃力が『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃力を上回った場合は『エスクリダオ』は破壊されるんだぞ！分かっているのか！？」

会場もかなりざわめきたつている。…………無理もないだろうな。だが、

「そんなこと分かつてゐるぜ！だからこそ、俺はこれに賭ける！行くぜ、…………三枚目……！」

会場が一気に静まりかかる。

「…………三枚目は、」

俺はカードをゆっくりと自分の方へ向ける。

」
「.....。

俺は来ると信じていた！

「.....モンスターカード、《E・HEROフェザーマン》！
攻撃力は1000、《エスクリダオ》の攻撃力は《フェザーマン》
と自身の効果で1100ポイントアップする！－よつて、《エスク
リダオ》の攻撃力は《サイバー・エンド・ドラゴン》の攻撃力と同
じ、8000だ！！」

エスクリダオ ATK 6900 7900 8000

「行け！《エスクリダオ》！ダークディフュージョン！！」

「迎え撃て！《サイバー・ヒンド・デラゴン》－ヒターナル・ヒヴ
オリューション・バースト！－」

《エスクリダオ》の攻撃と《サイバー・ヒンド・デラゴン》の攻撃
がぶつかり合い、そして、両方を巻き込んだ！

「うわあ……」

「ぐう……」

俺は思わず口を開じた。…………少しして口を開けるとお互いのフ
ィールドには何もなかつた。

「…………俺は《サイバー・ジラフ》を召喚！－」

サイバー・ジラフATK300

「《サイバー・ジラフ》の効果発動！」このカードを生け贋に、この
ターン俺が受ける効果ダメージは0になる。魔法カード《死者蘇生
》を発動！墓地の《サイバー・ヒンド・デラゴン》を特殊召喚する
！ターンコンドー！」

サイバー・ヒンド・デラゴンATK4000

亮

モンスター サイバー・ヒンド・デラゴン

魔法、罠 なし

…………最後の最後で《サイバー・ヒンド・デラゴン》か。

「…………十代、俺は全てを出した。」

「やつぱつ、いひじやないとトコホルは面白くはないな！」

「俺もだ！」

俺の手札とフィールドは、次のドローで全てが決まる。実質次がラストターンだ！

「行くぜ！…………俺のターン、ドロー……！」

「…………」の状況でこれは嬉しい！

「…………魔法力カード『ホープ・オブ・ファイフス』を発動！墓地のE・HEROと名のつくモンスターを五体選択し、選択したモンスターをデッキに戻してデッキから一枚ドローする－このカードの発動時、手札及びフィールドにこのカード以外存在しない場合、デッキから三枚ドローする－俺は墓地の『E・HEROエアーマン』、『E・HEROフォレストマン』、『E・HEROキャプテン・ゴード』、『E・HEROガイア』、『E・HEROエスクリダオ』の五体をデッキに戻し三枚ドロー！『E・HEROバブルマン』を召喚！」

バブルマンATK800

「『バブルマン』の効果発動！召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、フィールドに他のカードが存在しない場合、デッキからカード一枚ドローする！」

まだまだ行くぜ！

「魔法カード『融合回収』を発動！墓地の『E・HEROオーシャン』と『融合』を手札に加える！魔法カード『融合』を発動！手札の『オーシャン』と『沼地の魔神王』を融合。来い！『E・HEROジ・アース』！」

ジ・アースATK2500

「魔法カード『強欲な壙』を発動！デッキからカードを一枚ドロードする！魔法カード『E・HERO・sボンド』を発動！自分のフィールドにE・HEROとの名のつくモンスターが存在する時、手札のレベル4以下のE・HEROと名のつくモンスターを一体特殊召喚する！手札の『E・HEROスパークマン』と『E・HEROプリズマ』を特殊召喚！」

スパークマンATK1600

プリズマーATK1700

「…………最後の一枚、魔法カード『ミラクルフュージョン』を発動！墓地の『E・HEROクレイマン』と『沼地の魔神王』をゲームから除外し融合。来い！『E・HEROサンダー・ジャイアント』！」

サンダー・ジャイアントATK2400

「『ジ・アース』の効果発動！自分フィールドのE・HEROと名のつくモンスターを生け贋にすることで、その生け贋にしたE・HEROと名のつくモンスターの攻撃力分、自身の攻撃力がアップす

る！俺は《バブルマン》、《スパークマン》、《プリズマー》、《サンダー・ジャイアント》を生け贋に《ジ・アース》の攻撃力は6500ポイントアップする！」

ジ・アース ATK 2500 3300 4900 6600 9000

《バブルマン》、《スパークマン》、《プリズマー》、《サンダー・ジャイアント》が《ジ・アース》に吸収され、《ジ・アース》の体が真っ赤に染まった。

「い、攻撃力が9000だと！？」

「これが俺のデッキの絆だ！例え攻撃力が低くても、レベルが低くても、合わされば無限の力を出すことが出来る！バトルだ！《ジ・アース》で《サイバー・エンド・ドラゴン》に攻撃！アース・マグナ・スラッシュユ！！」

《ジ・アース》が剣を上に構えると、刀身が《ジ・アース》の数倍になり、《サイバー・エンド・ドラゴン》に振り下ろして、《サイバー・エンド・ドラゴン》を縦に真っ二つに切り裂いた！

「うわああ————！」

亮 LP 350 0

……勝てた！

「…………俺の負け、か。」

亮がそうつぶやく。会場からも「…………嘘だろ。」とか、「…………あのカイザーが負けた?」とか聞こえてくる。

「…………十代、強くなつたな。俺もまだ未熟だつて分からされた。」

「まあな、でも俺は何もせずに強くなつた訳ではないぜ。
俺は、完璧じゃない。だからこそ、いろいろと努力して強くなつたんだ。」

「…………完璧じゃない、か。」

さてと、

「二人とも!凄かつたぞ!」

「こんなデュエルは始めて見たぜ!」

「ありがとう!」

生徒から歓声があがる。

「十代、俺はプロに行く。アカデミアは任せやー。」

「任せやー。」

十代 side out

第三十話 卒業デュエル、カイザーとの激闘（後書き）

『ハイ・アンド・ロー』はTF効果です。

第一期完結！ 第一期はいろいろと話をはさんでから行きますので
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127t/>

遊戯王GX～十代に転生！？～

2011年11月23日18時56分発行